

青森県埋蔵文化財調査報告書 第177集

かみへびさわ

上蛇沢(2)遺跡



平成6年度

青森県教育委員会

上蛇沢（2）遺跡発掘調査報告書正誤表

	誤	正		誤	正
写真図版(50)	129-1	132-1	写真図版(52)	124-1	127-1
"	129-3	132-3	"	124-2	127-2
"	129-4	132-4	"	124-3	127-3
"	129-5	132-5	"	124-4	127-4
"	129-6	132-6	"	124-5	127-5
写真図版(51)	120-1	123-1	"	124-6	127-6
"	120-2	123-2	"	124-7	127-7
"	120-3	123-3	"	125-1	128-1
"	120-4	123-4	"	125-2	128-2
"	120-5	123-5	"	125-3	128-3
"	120-6	123-6	"	125-4	128-4
"	120-7	123-7	"	125-5	128-5
"	120-8	123-8	"	125-6	128-6
"	120-9	123-9	"	125-7	128-7
"	120-10	123-10	"	125-8	128-8
"	120-11	123-11	"	126-1	129-1
"	120-12	123-12	"	126-2	129-2
"	120-13	123-13	"	126-3	129-3
"	121-1	124-1	"	126-4	129-4
"	121-2	124-2	"	126-5	129-5
"	121-3	124-3	"	126-6	129-6
"	121-4	124-4	"	126-7	129-7
"	121-5	124-5	"	126-8	129-8
"	121-6	124-6	"	126-9	129-9
"	121-7	124-7	"	126-10	129-10
"	121-8	124-8	"	126-11	129-11
"	121-9	124-9	写真図版(53)	127-1	130-1
"	122-1	125-1	"	127-2	130-2
"	122-2	125-2	"	127-3	130-3
"	122-3	125-3	"	127-4	130-4
"	123-1	126-1	"	127-5	130-5
"	123-2	126-2	"	127-6	130-6
"	123-3	126-3	"	127-7	130-7
"	123-4	126-4	"	127-8	130-8
"	123-5	126-5	"	127-9	130-9
			"	128-1	131-1
			"	128-2	131-2
			"	128-3	131-3
			"	128-4	131-4

青森県埋蔵文化財調査報告書 第177集

かみへびさわ
上蛇沢(2)遺跡

—東北電力株式会社新五戸変電所新設工事に係る
発掘調査報告書—

平成6年度

青森県教育委員会



遺跡全景（南から）



調査区近景（北から）



出土土器（縄文時代中期）



第6号土坑出土 石 冠

序

青森県教育委員会は平成5年度に、東北電力株式会社新五戸変電所新設工事に係る五戸町道切谷内線拡幅工事地内に所在する、上蛇沢(2)遺跡の記録保存を図るため発掘調査を実施いたしました。

調査により、縄文時代中期から後期の遺構、遺物を発見しました。特に大型の土坑群や小土坑列は注目され、当時の生活を知るうえで、多くの成果を得ることができました。

本報告書は、この発掘調査の成果をまとめたものであり、考古学・歴史学のみならず、学校教育・社会教育においても活用され、文化財の保護活動の普及および啓蒙に役立てば幸いに存じます。

最後ではありますが、調査の実施と報告書の作成にあたり関係各位から御協力、御指導賜りましたことに対し、心から感謝の意を表します。

平成7年3月

青森県教育委員会

教育長 佐々木 透

例 言

- 1 本報告書は、青森県教育委員会が平成5年に実施した上蛇沢（2）遺跡の発掘調査の成果を取録したものである。
- 2 本遺跡は、青森県三戸郡五戸町大字切谷内字上蛇沢に所在し、「青森県遺跡台帳」（平成4年3月：青森県教育委員会）に記載されている五戸町と八戸市にまたがる前平遺跡と一部重複している。五戸町遺跡番号59041と八戸市遺跡番号03206であり、平成4年の踏査により五戸側の範囲が広がることが判明したため、上蛇沢（2）遺跡の名称を付し調査を行った。
- 3 本報告書の執筆は、担当調査員が協議の上、分担して執筆した。執筆者名は、依頼原稿については文頭に示し、その他は文末に示した。
- 4 本報告書における実測図の用例は次のとおりである。
 - 1) 方位 地形図・遺構図の方位は磁北を示す。
 - 2) 縮尺率 縮尺率は遺構・遺物の大きさと性格により適宜決定した。選択した縮尺率については、スケール脇に示した。
 - 3) ケバ 遺構内の傾斜及び落込みは「┐」で示した。
木根等の擾乱及び後世の削平は「≡」で示した。
 - 4) 小穴 竪穴住居跡内の小穴には、P番号（P1…）を付した他、床面からの深さをカッコ内に表示した。
 - 5) 挿図中で使用したスクリーントーンは次のとおりである。

焼 土



粘 土



これ以外のスクリーントーンを表示は、その用例を同図中に示した。

- 6) 礫石器の実測図については、擦り・敲きの使用痕跡が顕著な部分をドットで表示した。
 - 7) 写真図版中の個々の遺物番号は、挿図番号と一致する。（第15図1は→15-1と表示）
- 5 引用・参考文献については巻末に収めた。文中に引用した文献名については著者名と西暦年で示した。
 - 6 発掘調査および本報告書作成にあたって、下記の諸氏から御協力・御助言を得た。（敬称略、順不同）

福田友之、工藤大、佐藤智雄、福田祐二、宇部則保、小保内裕之、押山雄三、山岸英夫、本間宏、吉田秀享、甲田美喜雄、田中寿明、古屋敷則雄、瀬川滋

目 次

序	
例言	
目次	
序 章	
第1節 調査要項	1
第2節 遺跡の位置と自然的環境	2
第3節 周辺の遺跡	6
第I章 調査の経過と方法	
第1節 調査の経過と方法	8
第2節 基本層序	14
第II章 遺構と遺物	
第1節 竪穴住居跡	17
第2節 土 坑	84
第3節 出土遺物	152
土 器	152
石 器	176
土製品	191
第III章 ま と め	192
付 章	
写真図版	
報告書抄録	

図 版 目 次

第1図	遺跡周辺地形区分	4	第31図	第7号住居跡 出土遺物(5)	45
第2図	遺跡の位置と周辺の遺跡	5	第32図	第7号住居跡 出土遺物(6)	46
第3図	遺跡の地形・調査区割	7	第33図	第7号住居跡 出土遺物(7)	47
第4図	遺構配置(1)	10	第34図	第7号住居跡 出土遺物(8)	48
第5図	遺構配置(2)	11	第35図	第7号住居跡 出土遺物(9)	49
第6図	遺構配置(3)	12	第36図	第7号住居跡 出土遺物(10)	50
第7図	遺構配置(4)	13	第37図	第8号住居跡	51
第8図	基本土層	16	第38図	第8号住居跡 出土遺物(1)	52
第9図	第1号住居跡	18	第39図	第8号住居跡 出土遺物(2)	53
第10図	第1号住居跡・同炉	19	第40図	第9号住居跡・出土遺物(1)	55
第11図	第1号住居跡 出土遺物(1)	20	第41図	第9号住居跡 出土遺物(2)	56
第12図	第1号住居跡 出土遺物(2)	21	第42図	第10号住居跡・同炉	58
第13図	第1号住居跡 出土遺物(3)	22	第43図	第10号住居跡 出土遺物	59
第14図	第2号住居跡・同炉	24	第44図	第11号住居跡・出土遺物	60
第15図	第2号住居跡 出土遺物(1)	25	第45図	第12号住居跡・同炉	62
第16図	第2号住居跡 出土遺物(2)	26	第46図	第12号住居跡 出土遺物	63
第17図	第3号住居跡・同炉	28	第47図	第13号住居跡 炉	64
第18図	第3号住居跡 出土遺物(1)	29	第48図	第14号住居跡	65
第19図	第3号住居跡 出土遺物(2)	30	第49図	第15号住居跡	67
第20図	第4号住居跡・同炉	32	第50図	第15号住居跡 炉・出土遺物(1)	68
第21図	第4号住居跡 出土遺物(1)	33	第51図	第15号住居跡 出土遺物(2)	69
第22図	第4号住居跡 出土遺物(2)	34	第52図	第15号住居跡 出土遺物(3)	70
第23図	第5号住居跡・出土遺物	34	第53図	第15号住居跡 出土遺物(4)	71
第24図	第6号住居跡・出土遺物(1)	36	第54図	第15号住居跡 出土遺物(5)	72
第25図	第6号住居跡 出土遺物(2)	37	第55図	第15号住居跡 出土遺物(6)	73
第26図	第7号住居跡・同埋設土器炉	39	第56図	第16号住居跡・同炉	74
第27図	第7号住居跡 出土遺物(1)	41	第57図	第17号住居跡・同炉	75
第28図	第7号住居跡 出土遺物(2)	42	第58図	第17号住居跡 出土遺物	76
第29図	第7号住居跡 出土遺物(3)	43	第59図	第18号住居跡	78
第30図	第7号住居跡 出土遺物(4)	44	第60図	第18号住居跡 炉・出土遺物(1)	79

第61図	第18号住居跡 出土遺物(2)……………80
第62図	第18号住居跡 出土遺物(3)……………81
第63図	第19号住居跡・出土遺物……………82
第64図	第20号住居跡 炉・埋設土器……………83
第65図	フラスコ状土坑(1) 1・24・9a、b・106a、b号……………95
第66図	フラスコ状土坑(2) 26・52・53・59号……………96
第67図	フラスコ状土坑(3) 54・55・56・92号……………97
第68図	フラスコ状土坑(4) 57・58・75号……………98
第69図	フラスコ状土坑(5) 76・77・78号……………99
第70図	フラスコ状土坑(6) 82・83・86号……………100
第71図	フラスコ状土坑(7) 88・89・102号……………101
第72図	フラスコ状土坑(8) 90・107・111号……………102
第73図	フラスコ状土坑(9) 110・121・104a、b・105a、b号……………103
第74図	フラスコ状土坑00 61・115・119・132・133号……………104
第75図	フラスコ状土坑 出土遺物(1)……………105
第76図	フラスコ状土坑 出土遺物(2)……………106
第77図	フラスコ状土坑 出土遺物(3)……………107
第78図	フラスコ状土坑 出土遺物(4)……………108
第79図	フラスコ状土坑 出土遺物(5)……………109
第80図	フラスコ状土坑 出土遺物(6)……………110
第81図	フラスコ状土坑 出土遺物(7)……………111
第82図	フラスコ状土坑 出土遺物(8)……………112

第83図	フラスコ状土坑 出土遺物(9)……………113
第84図	フラスコ状土坑 出土遺物00……………114
第85図	フラスコ状土坑 出土遺物01……………115
第86図	小土坑A列……………117～118
第87図	小土坑A列・10・11号土坑出土遺物 119
第88図	小土坑B列……………121
第89図	小土坑C列……………122
第90図	小土坑列 出土遺物……………123
第91図	土坑墓(1) 2・25号土坑出土遺物 125
第92図	土坑墓(2) 62・64・68・103・118号…126
第93図	2号土坑 出土遺物……………127
第94図	25号土坑 出土遺物……………129～130
第95図	62号土坑 出土遺物……………130～131
第96図	溝状土坑(1) 46・79・97・98号……………135
第97図	溝状土坑(2) 99・100・129・131号……………136
第98図	溝状土坑(3) 134・135・138・139号……………137
第99図	溝状土坑(4) 140・141号……………138
第100図	土坑(1) 3・4・6・7・8・22・23・28号……………145
第101図	土坑(2) 51・69・80・81・84・85・91・93・94・95・96号 146
第102図	土坑(3) 101・106a・108・109・113・114・116・122号……………147
第103図	土坑(4) 112・120・127・136・137・145号…148
第104図	土坑(5) 130・142号……………149
第105図	土坑 出土遺物(1)……………150

第106回	土坑 出土遺物(2).....	151	第120回	第II群A~C類土器.....	173
第107回	遺構外出土土器(1).....	156	第121回	第II群H類土器.....	174
第108回	遺構外出土土器(2).....	157	第122回	第II群H類・第III群A類土器.....	175
第109回	遺構外出土土器(3).....	158	第123回	遺構外出土石器(1).....	179
第110回	遺構外出土土器(4).....	159	第124回	遺構外出土石器(2).....	180
第111回	遺構外出土土器(5).....	161	第125回	遺構外出土石器(3).....	181
第112回	遺構外出土土器(6).....	162	第126回	遺構外出土石器(4).....	182
第113回	遺構外出土土器(7).....	164	第127回	遺構外出土石器(5).....	185
第114回	遺構外出土土器(8).....	167	第128回	遺構外出土石器(6).....	186
第115回	遺構外出土土器(9).....	168	第129回	遺構外出土石器(7).....	187
第116回	遺構外出土土器(10).....	169	第130回	遺構外出土石器(8).....	188
第117回	遺構外出土土器(11).....	170	第131回	遺構外出土石器(9).....	189
第118回	遺構外出土土器(12).....	171	第132回	遺構内・外出土土製品.....	190
第119回	遺構外出土土器(13).....	172			

序 章

第1節 調査要項

1 調査目的

新五戸変電所新設工事の実施に先立ち、当該地区に所在する上蛇沢（2）遺跡の埋蔵文化財発掘調査を行い、その記録保存を図り、地域社会の文化財の活用に資するものである。

2 遺跡名および所在地 上蛇沢（2）遺跡
三戸郡五戸町大字切谷内字上蛇沢48-6、外

3 発掘調査期間 平成5年7月19日から11月18日まで

4 調査対象面積 9,245平方メートル

5 調査委託者 東北電力株式会社

6 調査受託者 青森県教育委員会

7 調査担当機関 青森県埋蔵文化財調査センター

8 調査協力機関 五戸町教育委員会、三八教育事務所

9 調査参加者

調査指導員	村越 潔	弘前大学教授	(考古学)
調査協力員	三浦 敬二郎	五戸町教育委員会教育長	
調査員	小山 陽造	八戸工業高等専門学校教授	(分析化学)
	高島 成侑	八戸工業大学教授	(建築史)
	松山 力	八戸市文化財審議委員	(地質学)
	市川 金丸	元・青森県立郷土館学芸課課長補佐	(考古学)
	橋本 正信	前・青森県立八戸南高等学校教諭	(考古学)
	小林和彦	八戸市博物館主査兼学芸員	(動物考古学)

調査担当者 青森県埋蔵文化財調査センター

調査第二課長	三浦 圭介
主 事	小田川 哲彦
主 事	増尾 知彦
調査補助員	斎藤 慶吾、稲見 庸子
	三浦 昭寿、小野 みき

第2節 遺跡の位置と自然的環境

八戸市文化財審議員 松山 力

1 位置と周辺の地形

上蛇沢遺跡は、五戸川と浅水川との丘陵上、東北東方の太平洋岸からはほぼ11km、西方の五戸町中心町からはほぼ5kmの距離に位置している。

八甲田山・十和田湖・八幡平地域など、東北地方北部脊梁山脈の東方山麓地域にあたる青森県南東部には、丘陵・段丘群が広く分布する。丘陵・段丘群は北東～東北東に向かって流れ下る馬淵川・浅水川・五戸川・後藤川などと、東方へ流れ下る奥入瀬川などによって、いくつかの丘陵・段丘群に寸断され、それぞれ北東～東北東に向かって高度を低めながら馬淵川最下流部や太平洋岸に迫っている。

この地域の丘陵・段丘群は、八戸付近を標式地として、最高位の蒼前平段丘、高位の天狗岱段丘、中位の高館段丘、低位の根城段丘・長七谷地段丘・田面木段丘などの洪積段丘と、尻内段丘などの沖積段丘に区分されている。これらのうち、蒼前平段丘は馬淵川以東に顕著で、馬淵川以北にはほとんど分布しない。

天狗岱段丘は、天狗岱火山灰層とそれより上の新しい火山灰層のすべてをのせる段丘で、段丘面高度は海岸に近いところで60m以上、遺跡付近で90m以上である。

高館段丘は、高館火山灰層とそれより新しい火山灰層をのせる段丘で、段丘面高度は海岸に近接する地域で30m以上、遺跡付近で45m以上である。

根城段丘は高館火山灰層の中部とそれより新しい火山灰層を、長七谷地段丘は高館火山灰層の上部とそれより新しい火山灰層を、田面木段丘は八戸火山灰層を、それぞれにのせる段丘であるが、遺跡付近での今回の調査では、精査するまでにゆかなかったため、一括して洪積低位段丘ということにする。

遺跡をのせる丘陵・段丘群は、遺跡の西南西方およそ34kmの十和利山（標高991m）付近に源を発する五戸川と、西南西方およそ30kmの三戸町平森（標高560m）東斜面に源を発する浅水川との間を東北東にのびて太平洋岸に達する。その幅は、新郷村金ヶ沢と同村西越とを結ぶ線より東で、3～5kmで、五戸町手倉森から同町志戸岸までの間でもっとも広い。

第1図は、遺跡をほぼ中央に置いた東西5.5km、南北4kmの範囲の地形をおおまかに区分したものである。傾斜角（勾配）およそ7～8°以上の部分を急傾斜地としたが、段丘崖の崖下から段丘面縁までの比高がおおよそ10m以内の部分で、図上での幅が狭くて表現がしにくい部分は省略してある。

この地域の天狗岱段丘は、頂面高度がほぼ80m以上の段丘で、豊間内から西方地域に比較的

広い平坦面をもつほかは、開析されて起伏に富む丘陵地となっているところが多い。図の西縁（左縁）下半部から東縁（右縁）中央部へのびる尾根状地（主峰部とする）の頂部高度は、西端の豊間内付近で130m以上、東端で100m程度、というように、西から東に向かって次第に高度が低くなる。丘陵面は全体としてゆるやかに北に傾き、高度を低めて高館段丘に接する。高館段丘との間の段丘崖は、段丘崖としては傾斜がゆるい。主峰部の北側は、隣接の高館段丘を含め、多数の小河谷で削剝され、主峰部からいくつもの尾根状地が分岐して北北東～東北東にのびている。主峰部の南縁は比高70～80m程度の段丘崖で浅水川の沖積面に接するところが多く、段丘崖の傾斜角（勾配）は大部分のところで10～20°である。この地域の天狗岱段丘は、ところにより高度差10m程度の段丘崖で2段に別れるが、図示を省略した。

この地域の高館段丘は、ゆるやかに起伏する丘陵状の段丘である。その大部分の段丘面高度が50～90mであるが、緩傾斜の段丘崖（高度差10m以内）で2段に別れるところがあり、上位の段丘面高度は80～110mで、図ではこれを高館段丘高位部として区別した。高館段丘は、天狗岱段丘の北側に、東西に連続して分布するが、図の範囲内では平坦面に乏しく、緩やかに起伏する波状地となっているところが多い。

洪積低位段丘は、高館段丘の北側に接して連続的に、丘陵の南側ではところどころで天狗岱段丘下に分布する。高館段丘の北側の低位段丘は、おそらく東方の長七谷地段丘に相当するものと思われるが確認するにいたらなかった。丘陵南側の低位段丘については、長七谷地段丘、田面木段丘のいずれに相当するかは確認していない。

五戸町中心街の東方では、丘陵・段丘群を切って、それぞれ、兔内、切谷内、上市川、八戸市下河原で五戸川に合流する支流が4つあり、それぞれに幅100～200m程度の細長い沖積地といくつかの小支流をともなっている。図では、北西隅には兔内に下る支流（ホド沢）の最下流部の沖積地が、中央部には切谷内に下る支流の沖積地が、北東側には上市川に下る支流の中・上流部の沖積地が表わされている。

この丘陵・段丘群の北を流れる五戸側の沖積地（その一部が図の北西隅に見える）の幅は、五戸町中心街付近から切谷内付近までほぼ1km程度、それより下流方では1kmから急に2kmへと広がって市川低地帯に達している。

南を流れる浅水川の沖積地の幅は、志戸岸付近から八戸市下永福寺付近までが0.4～0.7km程度、それより下流方の八戸市張田付近までが0.7km前後となり、張田から先では広い馬淵川の沖積地と合して、広い長苗代低地帯をつくっている。

遺跡は、図の西縁からほぼ東縁へのびる天狗岱段丘主峰部から分岐して切谷内に向かう丘陵頂部（尾根部）から両側の斜面部に広がっているが、本年度は分岐点から数百mまでの区間が調査された。この区間の高度（標高）は105m前後で、両側斜面とも、切谷内に下る五戸川支流

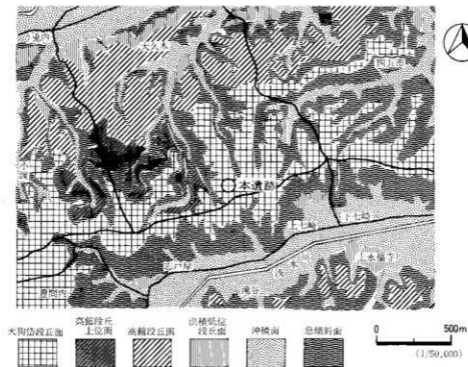
の小支谷に降りる斜面である。

2 地質の概要

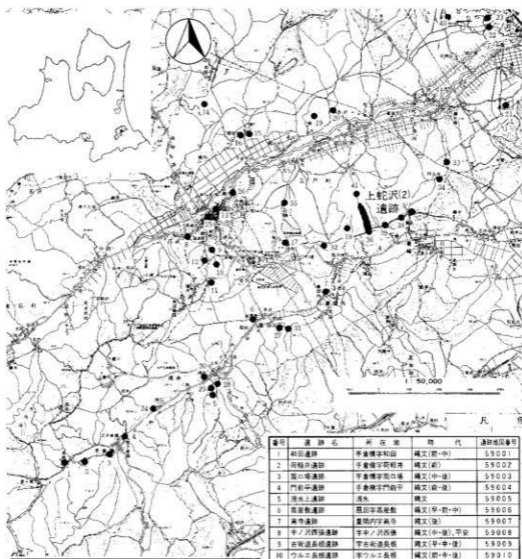
この地域の基盤は、砂岩、シルト岩、凝灰岩などを主とする第三紀鮮新世のいわゆる斗川層で、その上に礫層、砂層、泥層などで構成される段丘堆積物がのり、褐色火山灰層（ローム）を主とする火山砕屑物に被覆されている。

青森県東南部の火山砕屑物がつくる地層は、古い方から、おもに八甲田・十和田火山群に由来する先縄文時代の天狗岱火山灰層・高館火山灰層・八戸火山灰層、縄文時代草創期前後の二ノ倉火山灰層・千曳浮石層などで、これらを覆う黒色土類（腐植土）中には十和田火山に由来する南部浮石層・中掬浮石層・十和田b降下火山灰層・十和田a降下火山灰層や、朝鮮半島基部の白頭山に由来する苦小牧火山灰層などの、縄文時代以降の火山灰層が挟まれる。これらの火山砕屑物のうち、千曳浮石層の給源や分布の詳細はまだよくわかっていない。

八戸火山灰層以降の火山灰層の降下年代については、C14法による年代測定値などにより、八戸火山灰層が13000～12000年前、南部浮石層がほぼ8600年前、中掬浮石層がほぼ5500年前、十和田b降下火山灰層がほぼ2000年前の降下とされている。十和田a降下火山灰層は町田洋氏らの研究によって西暦915年の降下とされている。以上のうち、遺跡直近地域には、成層状態で残された二ノ倉火山灰層、南部浮石層、十和田b降下火山灰層は分布しない。



第1図 遺跡周辺地形区分



番号	遺跡名	所在地	時代	遺跡地区番号
15	瀬ノ下遺跡	宇都宮沢渡ノ下	縄文(前・中)	59015
16	細島沢遺跡	宇都宮沢	縄文(前)	59015
17	宮代沢遺跡	宇都宮代沢	縄文(前・中・後)	59017
18	明大沢遺跡	切谷内字明大沢	縄文(前・中)	59018
19	大久保遺跡	宇都宮大久保	縄文(前・中・後)	59019
20	外ノ沢遺跡	切谷内字外ノ沢	縄文(前・中・後)	59020
21	香赤遺跡	上野川香赤遺	縄文(後・晩), 古墳	59021
22	五戸大タルミ(1)遺跡	上野川字大タルミ	縄文(早), 平安	59022
23	五戸大タルミ(2)遺跡	上野川字大タルミ	縄文(早)	59023
24	関川遺跡	湯水字関川	縄文(後)	59024
25	三戸路跡(木村型)	宇都宮	中世	59025
26	宮前(馬内館・香赤別荘)	宇都宮	中世	59026
27	野舟城跡	扇田字野舟	中世	59027
28	湯水館跡	湯水字湯水	中世	59028
29	上野倉敷跡	湯水字佐野	中世	59029
30	湯水館跡	湯水字山向	中世	59030

番号	遺跡名	所在地	時代	遺跡地区番号
1	新田遺跡	宇都宮字新田	縄文(前・中)	59001
2	石輪井遺跡	宇都宮字石輪井	縄文(前)	59002
3	笠口遺跡	宇都宮字笠口橋	縄文(中・後)	59003
4	門前中遺跡	宇都宮字門前中	縄文(前・後)	59004
5	湯水上遺跡	湯水	縄文	59005
6	高尾敷遺跡	扇田字高尾敷	縄文(早・前・中)	59006
7	藤野遺跡	豊岡内字藤野	縄文(後)	59007
8	宇ノ沢西條遺跡	宇都宮ノ沢西條	縄文(中・後), 平安	59008
9	古街道長根遺跡	宇都宮長根	縄文(早・中・後)	59009
10	ウルミ長根遺跡	宇都宮長根	縄文(前・中・後)	59010
11	篠野谷遺跡	宇都宮篠野	縄文(後)	59011
12	池部元ノ門前遺跡	宇都宮元ノ門前	縄文(後)	59012
13	天海堂遺跡	宇都宮	縄文(中)	59013
14	扇田谷遺跡	宇都宮扇田	縄文(早・前・中・後)	59014

番号	遺跡名	所在地	時代	遺跡地区番号
31	上野川古畑遺跡	扇田字上野川	中世	59031
32	金蔵塚遺跡	豊岡内字金蔵塚	縄文	59032
33	扇田市ノ遺跡	切谷内字扇田市	縄文	59033
34	四宮市ノ遺跡	切谷内字四宮市	縄文	59034
35	小渡遺跡	宇都宮小渡	縄文	59035
36	新平遺跡	切谷内字新平	縄文	59041
37	源ヶ沢遺跡	切谷内字石丸ヶ沢	縄文	59042
38	北山遺跡	切谷内字新助沢	縄文	59043
39	松沢遺跡	切谷内字新助沢	平安	59044
40	下谷地ノ遺跡	上野川字大タルミ	縄文	59045
41	上野川ノ遺跡	上野川	平安(早・後)	59046

第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡

第3節 周辺の遺跡

遺跡の所在する五戸町は、青森県南東部に位置する。この地域は、三本木台地の南端にあたり、十和田・八甲田山系を源とする幾筋もの河川浸食により細長い丘陵地帯を形成している。さらに丘陵地には、小河川による沢地形が顕著にみられ起伏に富んでいる。

町は、北を五戸川、南を浅水川に開析された河岸段丘に沿って開けており、この沖積地には古くから水田の開発が行われていたことが、永仁五年(1297)「五戸郷検注進状」に記されている。また、馬産地としても栄えた町でもある。

本遺跡は、五戸町の中心街からおよそ5km程東の地点にある、東西を沢地で画された南北に延びる標高100m程の小丘陵地に立地しており、発掘調査地はこの丘陵の頂部にあたる。

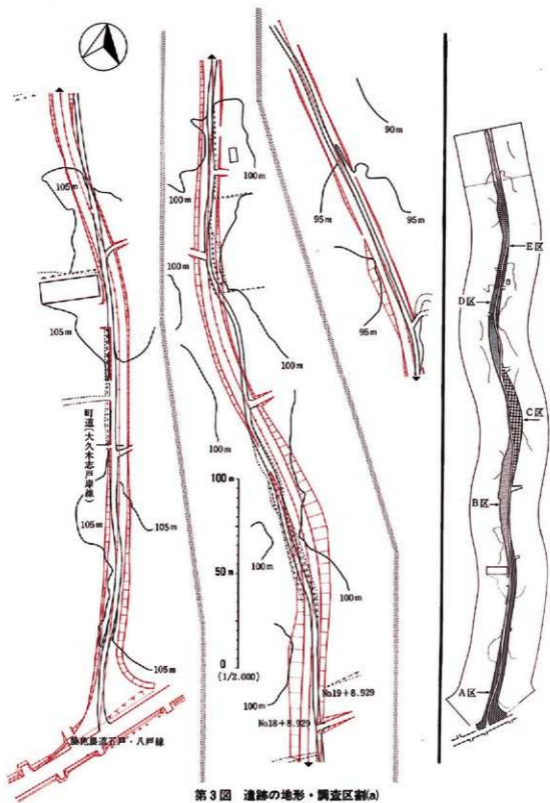
町内に所在する埋蔵文化財は、平成4年3月の段階で45遺跡が登録されており、(遺跡地区番号59036～59040近世一里塚は除外した)平成4年度の踏査により上蛇沢(1)遺跡と本遺跡が新たに加えられている。このうち、縄文時代から古代までの遺跡の大半は、五戸川と浅水川流域の標高80～100m前後の段丘上に点在しており、五戸川流域の遺跡群と浅水川流域の遺跡群に分けられる。また、今後本遺跡の様に丘陵頂部に立地する遺跡が増える可能性もあり、遺跡間の関係においても興味深い地域である。

本遺跡の周辺には、縄文時代前・中期を主体とする大規模な遺跡として知られている明夫沢遺跡が西に所在するほか、東には彦ヶ沢遺跡、池田遺跡、桜沢遺跡など縄文時代および平安時代の遺跡が連なっている。このほか町内には、奥州街道沿いに館跡が点在しているが、詳細は不明である。

五戸町に隣接する八戸市、倉石村の遺跡の多くも五戸川、浅水川両河川の流域に多く見られ、特に、倉石村の薬師前遺跡からは、縄文時代後期初頭の甕棺が3個、同一の土坑墓から発見されたことで著名である。

五戸町における発掘調査は、昭和49年に中ノ沢西張遺跡、昭和50年に古街道長根遺跡が青森県教育委員会によって調査されているほか、昭和64年に五戸町教育委員会によって苗代沢遺跡が調査されている。中ノ沢西張遺跡の調査では、竪穴住居壁面の崩落を防止するために土壁を一巡させた縄文時代後期の特徴ある住居跡1軒と、奈良時代の竪穴住居跡2軒が調査されている。古街道長根遺跡では、縄文時代早期の貝殻文土器と縄文時代後期の土器を出土したほか、落し穴と埋設土器が調査されている。両遺跡を収録した発掘調査報告書では、切谷内、苗代沢、岡谷地、ウルエ長根下などの町内から出土した縄文時代中期後葉から後期の良好な遺物が参考資料として紹介されている。苗代沢遺跡調査成果について詳細は不明である。

(小田川)



第3図 遺跡の地形・調査区割(a)

第 I 章 調査の経過と方法

第 1 節 調査の経過と方法

調査経過

本調査は、新五戸変電所建設に先立ち、建設予定地へ通じる町道の拡幅工事に伴うものである。工事路線は、広域農道五戸―八戸線から北へ折れる町道大久木―志戸岸線の入り口部分から北へおよそ900m程の長さである。

県文化課は、建設工事決定に際し平成4年度に踏査を行い、それにより路線内の数カ所の地点から遺物を採取した。

路線の南端部は、五戸町と八戸市にまたがってある前平遺跡として登録されてあったが、緊急を要する調査であり踏査時に範囲確定が明確にされなかったこともあり、遺物が採取された数地点を上蛇沢(2)遺跡と新たに登録し、前平遺跡の五戸側の一部を含み、上蛇沢(2)遺跡として調査することになった。

発掘調査においては、現町道が生活道であるため現道を確保しながら調査をすすめ、道路部分の調査が必要な場合については、町及び原因者と協議し対処する事を基本とした。

発掘調査は、7月19日から開始されたが、事前に立木の伐採とその処理作業が終了しておらず、その間調査環境を整えながら、トレンチによる遺物・遺構の確認調査を行った。これにより調査区内の所々に排土が山となり、排土処理のため重機導入の必要性が生じたが、折りしも例年にない冷夏悪天候が影響し、道路は泥土化し排土搬出にも支障を来した。そのため、現道の補修が急務となり、急きょ原因者と協議し、全面的に道路補修が行われた。補修完了は8月12日である。お盆期間の後、8月中旬以後ようやく本格的調査に入った。

当初、面的な調査は南側入り口部分から着手し、北側へ順次掘り進んでゆく予定であった。しかし、トレンチ調査により遺構・遺物がブロック的に存在することが判明したことから、調査区が長距離であることから、それらの範囲を拡張するため8月末には表土剥ぎのため重機を導入した。

9月から10月中旬まで調査は順調に進み、遺構集中地区が大きく3カ所に分けられることが判明した。特に調査区中央部では、大型の土坑が現道境界で確認されており、遺構集中地区の現道下部分の調査の必要性が指摘された。

10月下旬には、遺構精査の大部分が終了し、10月27日に空中写真撮影を実施した。また、10月30日には現地説明会を実施し調査の成果を一般公開した。約130名程の見学者が訪れ盛況であった。

11月1日～5日には、調査終了地に重機を導入し、道路の付け替え作業を行った。調査期日が迫るなか、道路下の遺構精査に急を要した。調査終盤には、大型のプラスチック状土坑や危険箇所などを埋め戻し、11月18日には無事調査を終了し器材等の撤収を行った。

工事路線面積は11,760㎡あり、当初の調査対象面積は7,000㎡であったが、現道路部分を含めた実質調査面積は9,245㎡である。

調査方法

調査対象の路線は、最大幅20m・長さ約900m程の蛇行した狭長地である。調査の基準となるグリッドの設定にあたっては、路線のほぼ中央に位置する路線工事の中心杭№18+8.929R00と№19+15.520R00の2点間を南北の基軸線とし、№18+8.929R00の杭から4m四方のグリッドを設定した。南北の基軸線は真北から西へ9°50'ほど傾いている。各グリッドの呼称については、南北線には南からアルファベットを、東西線には南端部から算用数字を付し、さらに、蛇行地のため南北線がアルファベット数を越えるため、頭にローマ数字のⅠ・Ⅱを付しⅠA1グリッドⅡB2グリッドとした。また、調査区が長距離であり、道路の左右に振れることから、その切れ目ごとで便宜的にA区からE区まで区分けした。

調査区内の標高点は、路線設計用に設置されたベンチマーク(H=102.226m)から引用し、各調査区内へ移動し用いた。

遺跡の掘り下げは、人力を主体とし表土層の厚い箇所では一部重機を使用したほか、排土の集積・搬出には重機を使用した。

遺構の精査は、4分割及び2分割し土層観察後掘り上げた。堆積土が遺構壁面や遺構底面と峻別しにくいものについては、随時サブレンチを設け掘り足りない部分が無いように留意した。また、炉跡等については、最終的には断ち割りを行って土層を観察した。

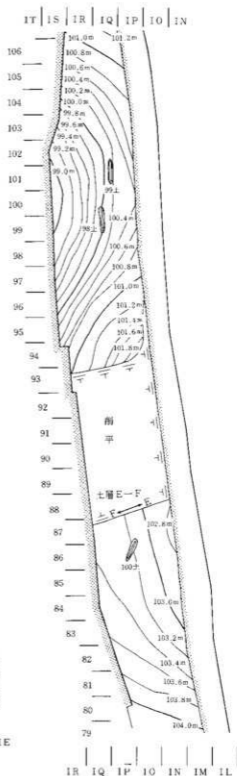
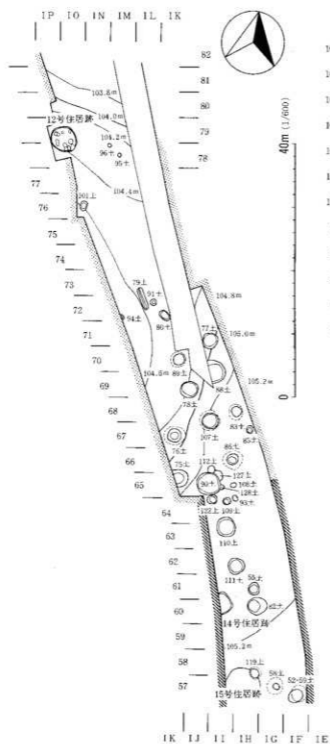
土層観察については、「新版標準土色帖」を用いて土色とマンセル記号を併記した。

写真撮影には、35mmモノクローム・カラーリバーサルフィルムを用いて、同一アングルで同一コマ数を撮影した。

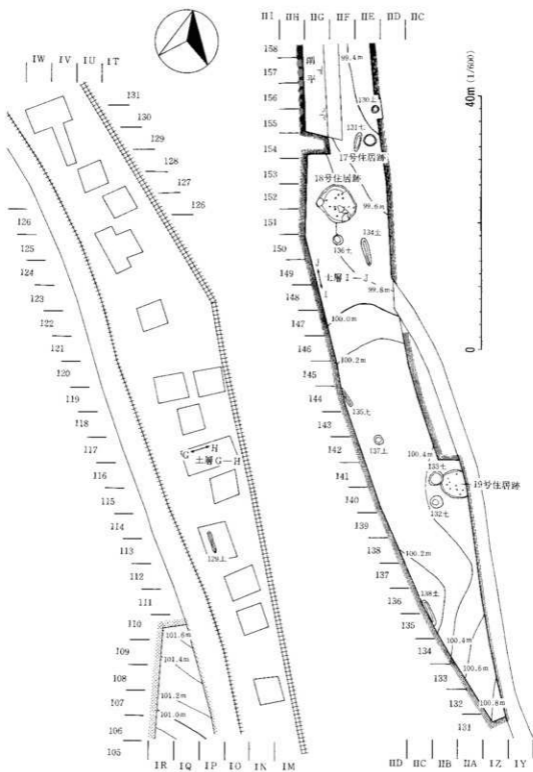
遺構の図化は、1/20を基本としたが、小型のもので土器等の遺物が出土した場合や、炉跡については必要に応じて1/10で作図した。地形図については1/100で作図した。

遺物は、遺構外の場合はグリッド単位で層ごとに、遺構内の場合は覆土及び床・底面ごとに分けて取り上げた。雨天時には、プレハブ内で水洗いを行った。

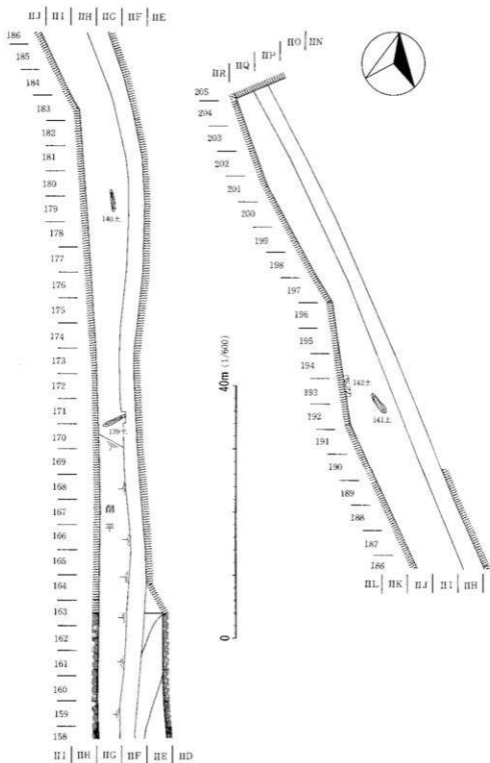
(小田川)



第5図 遺構配置(2)



第6図 遺構配置(3)



第7圖 遺構配置(4)

第2節 基本層序

遺跡内の堆積土は、I層からVI層まで分けられる。

I層は厚さ10～30cmの黒褐色（10Y R2/2～3/1）の表土層で、耕作土や腐葉土などの土層で構成される。調査区の北側に厚くみられる。

II層は厚さ2～36cmの黒色（10Y R2/1）ないし黒褐色（10Y R2/2～2/3）の土層で、ところによって褐色（10Y R4/6）の土塊が混入し、また浅黄橙色（10Y R8/4）あるいは褐灰色（10Y R6/1）の砂粒大の浮石粒が含まれる。そのほか、十和田b降下火山灰層の浮石部に由来する粒径3～5mmの堅い灰白色（10Y R8/1～8/2）浮石が散在している。なお、調査区南部で、II層の最下部に、局部的に厚さ5～10cm明黄褐色（10Y R7/6）砂質火山灰層が塊状に断続する部分がある。この火山灰層は比較的固くしまり、粒径5～30mmの黄褐色（10Y R8/6）を部分的に疎らに、また部分的に密に含んでいて、その層相から千曳浮石層と考えられる。

遺構外遺物のほとんどは、II層中からの出土であり、縄文時代前期から後期前葉までの遺物が混在して出土する。D区ではさらに土師器が混入する。各時期の生活面や遺構の掘り込み面は、II層中であると考えられるが促えることはできなかった。

III層は厚さ22～42cmの暗褐色（10Y R3/3）砂質土層で、細分される。ところどころで粒径3～8cmの黒褐色（10Y R3/1）土塊やぶい黄褐色（10Y R4/3）砂質土塊に漸移する。中部から下半部にかけては、黄褐色（10Y R8/6）の中礫浮石層（IIIc層）が断続している。黒褐色土塊やぶい黄褐色砂質土塊は、中礫浮石層と暗褐色土との混合したものである。III層は、調査A区南端からグリッド27ラインまでの間と、51ラインから80ラインまでの遺構が密集する部分では欠層している。IIIb層は、調査E区だけにみられる。また、IIIc層の中礫浮石層は、調査A区のはば中央にある谷頭部分や調査C区、E区の遺構の検出されない空白域に顕著にみられ、遺構の作られている周辺にはみられない。

IVa層は厚さ20～40cmの褐色（10Y R4/6）土層で、粒径1～10mm程度の浅黄橙色（10Y R8/4）浮石がまばらに散るように、ところによっては多量（密度10%）に混入している。また、ところにより中礫浮石層に由来する砂粒大浮石が多量に混入する。

IVb層は厚さ20～40cmの褐色（10Y R4/5）土層で、ところによっては95～105cmほどにまで厚くなる。全体に粒径3～6mm程度の粘土化した明緑灰色（10G7/1）岩片が散らばっている。下半部には、下位のV層から漸移するように、褐色（10Y R4/6）ローム層が断続的にせりあがっている。ローム層は八戸火山灰層の最上部層である。調査区南側部分では、削平によりI層直下にIV層がみられる箇所が多い。遺物では、極少数のものがIVa層上面から出土した。また、遺構の検出および精査は、すべてIVa層ないしIVb層から行った。

V層からIV層までは、土台となっている八戸火山灰層であり、無遺物層である。八戸火山灰層の内の降下碎屑物部分は、従来、大池・松山らによって上から下へVI～I層の6つに区分されてきたが、遺跡層序のI～VI層とまざらわしいので、これを上から下へVa～Vf層の6層として表わす。

Va層（八戸火山灰層VI層）は、粒径2～20mm程度の浮石が密集する厚さ8～20cmの黄褐色（10YR5/6）浮石層で、基質は褐灰色（10YR6/1）の火山灰である。粒径2～15mmの浅黄褐色（10YR8/4）浮石を多量に含むほか、粒径3～6mm程度の粘土化した明緑灰色（10G7/1）岩片が散らばる。

Vb層（八戸火山灰層V層）は、厚さ40～50cmの明黄褐色（10YR7/6）砂質火山灰層で、粒径2～10mmの浅黄褐色（10YR8/4）浮石が多量（密度10%）に混入している。固くしまっていて、層の中程に細粒の灰白色（10YR7/1）浮石が列状に挟まれている。

Vc層（八戸火山灰層IV層）は、粒径2～30mm程度の黄褐色（10YR5/6）浮石が密集する厚さ18～30cmの浅黄褐色（10YR8/3）浮石層で、浮石の間隙を粗粒砂大の黒色岩片が充填しているが、粒子間の膠結が進んでいないのでくずれやすい。

Vd層（八戸火山灰層III層）は、厚さ数cmのにおい黄色（2.5Y6/4）砂質火山灰層で、粒径2～4mmの緑灰色（10GY5/1）岩片が散らばる。

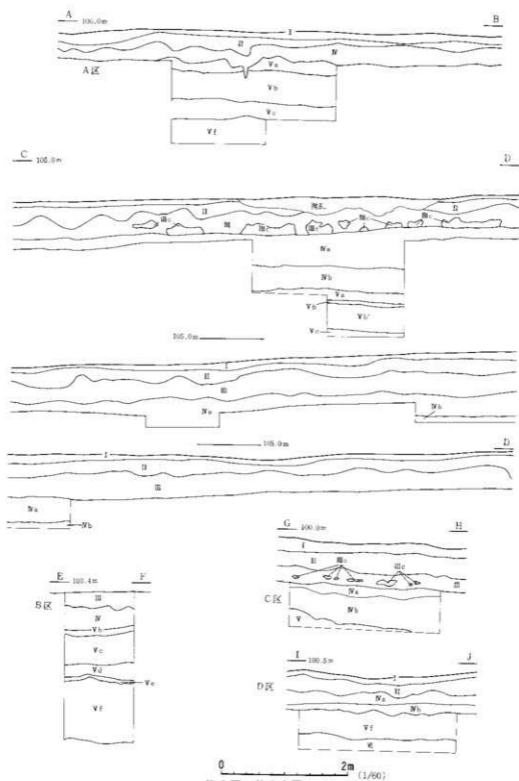
Ve層（八戸火山灰層II層）は、最大粒径25mm程度の黄褐色（10YR7/8）浮石が密集する厚さ数cmの明黄褐色（10YR6/8）浮石層で、間隔を明黄褐色（10YR6/8）の砂粒大火山灰が充填している。Vc層同様にくずれやすい。

Vf層（八戸火山灰層I層）は、厚さ90～100cmの火山灰層で、色調と粒度によって上半部と下半部に分けられる。上半部は、明黄褐色（10YR6/8）の粘性に富むシルト質砂質火山灰層である。下半部は淡黄色（2.5Y8/3）の砂質火山灰層で、脈状の灰白色（10YR8/1）粘土質火山灰を挟み、また横方向に同様の火山灰に漸移する部分がある。

VI層は橙色（7.5YR6/6）の粘土質火山灰層で、高館火山灰層に相当する。

プラスチック土坑の堆積土のなかには、これらV層・VI層の火山灰が多量にみられるものが多い。

（松山 力・小田川）



第8图 基本土層

第II章 遺構と遺物

第1節 竪穴住居跡

概要

本調査で検出された竪穴住居跡は、調査A区で16軒、調査B区で1軒、調査D区で3軒の総数20軒であり、住居番号は、調査の都合上検出順に付した。

調査区が狭長地であるため、調査区外へ延びる第7号・8号・14号・19号住居跡の全容は把握できない。また、町道及び農免農道建設の際に大きく破壊されているものも多く、焼土や小穴だけのものも、あり方や状況から住居跡の可能性があることから含めてある。

調査された住居跡の大半は、調査A区の南側と北側にまとまって作られている傾向にある。各住居跡の時期は、縄文時代中期から縄文時代後期初頭に比定されるもので、以下に各住居跡の特長を記述する。

第1号住居跡（第9・10図）

【位置と確認】 調査A区南端部、1E・F-7・8グリッドに位置する。第IV層上面黒色土の円形プランを確認した。本住居跡の周辺には、西側に第2号、4号住居跡が存在し北東方向には第5号住居跡が位置する。

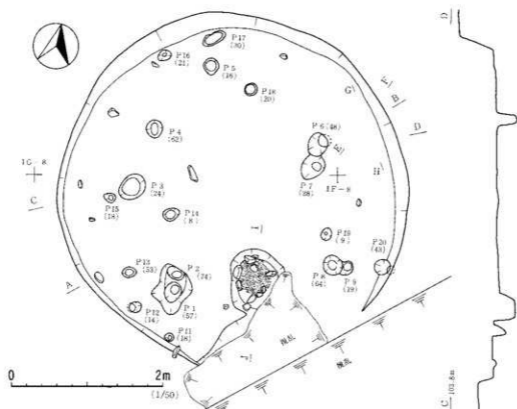
【平面形・規模】 直径約4.6m程の円形である。本住居跡南側の一部は、調査区域南側を走る農免道路建設の際に削平されている。

【堆積土】 住居内堆積土は、6層に細分された。4層上面に、廃棄されたと思われる焼土と数点の土器片が認められることから、堆積段階で使用されているものと考えられる。焼土層以外は、自然堆積によるものと考えている。

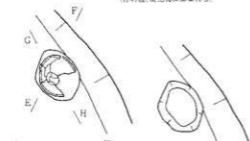
【壁・床】 第IV層を掘り込んで壁面としている。削平及び攪乱を受けた南壁以外は、約60～70度の角度で立ち上がる。各壁の壁高は東壁45cm、西壁25cm、北壁40cmである。床面はほぼ平坦であり、踏み締まり等の硬化面は特に認められない。

【柱穴】 本住居跡内からは、20個の小穴を検出した。これらのうち、主柱穴と考えられるものはP1～3、P5～9、P17である。P1～3、P6～9は、炉を挟んで対象形に位置する。P1・2、P6・7、P8・9は重複していることから、建て替えられているものと思われるが、新旧関係は不明である。P12・20は壁際に斜めに掘り込まれており、配置からP1・2及びP8・9の補助的柱であったと考えられる。

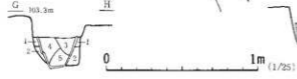
【炉】 重複して2基の炉を確認した。新炉は石囲炉であり、礫が幾分散乱した状態で検出さ



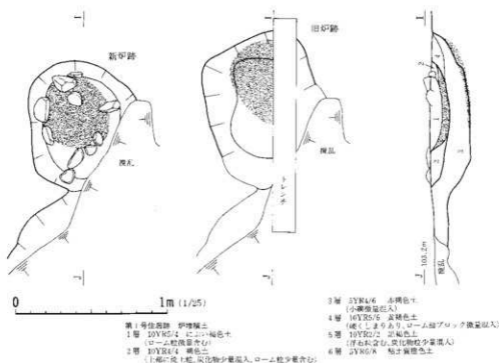
- 第1号住居跡 埋積土
- 1層 10YR3/2/1 黒色土
(微少量のローム粒、浮石粒を含む)
 - 2層 10YR3/4 暗褐色土
(ローム粒微量、褐色土を含む)
 - 3層 10YR5/2 黒褐色土
(浮石粒、炭化物微量を含む)
 - 4層 10YR4/6 褐色土
(浮石粒を含む、黄褐色土と黄褐色粘土をコア下部に混入)
 - 5層 10YR6/6 黄褐色粘土
(褐色土混入)
 - 6層 10YR4/4 褐色土
(浮石粒を含む)
- 附1 7.5YR4/6 褐色土
(浮石粒微量を含む、炭化物微量)



- 第1号住居内 埋設土器埋積土
- 1層 10YR3/4 暗褐色土
(灰白色土粒と少量の混入)
 - 2層 10YR5/8 黄褐色土粒土
(ローム粒微量を含む)
 - 3層 10YR3/2 暗褐色土
(ローム微量、ローム粒少量含む)
 - 4層 10YR6/6 黄褐色粘土
(黄褐色粘土がコア下部に混入)
 - 5層 10YR3/4 暗褐色土
(ローム粒少量含む)



第9図 第1号住居跡



第10図 第1号住居跡・同炉

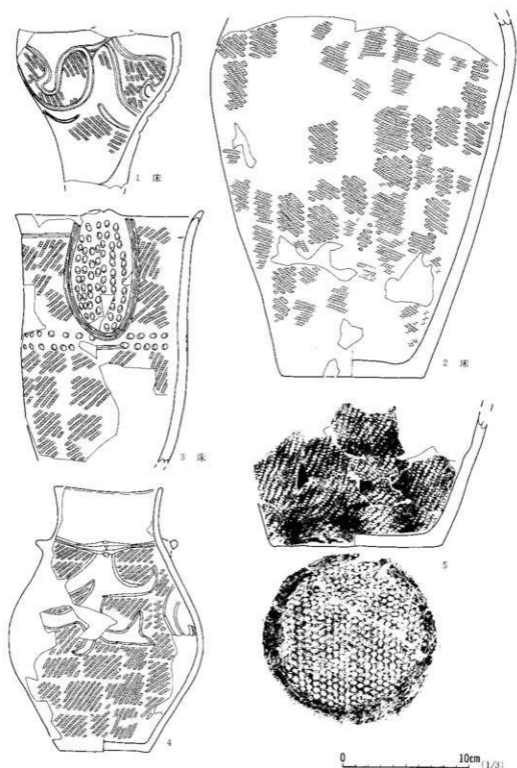
れた。この炉を精査中に焼土面の下に黒褐色土が存在することから、断割りを行ったところ、炉跡火熱面下で更に熟土を検出した。黒褐色土除去後焼土が面としてひろがることから旧炉跡とした。新炉は、攪乱により一部壊されているが、不正楕円形の掘形に円礫を配した石囲炉である。旧炉は攪乱により大きく壊されているが、炉底面の連続性から前庭部を有した炉であったものと考えられる。

【その他の施設】本住居跡内北東壁際に、埋設された土器（第11図2）を検出した。土器は胴部上半を欠損するもので、床面から30cm程の深さに正位に埋められている。

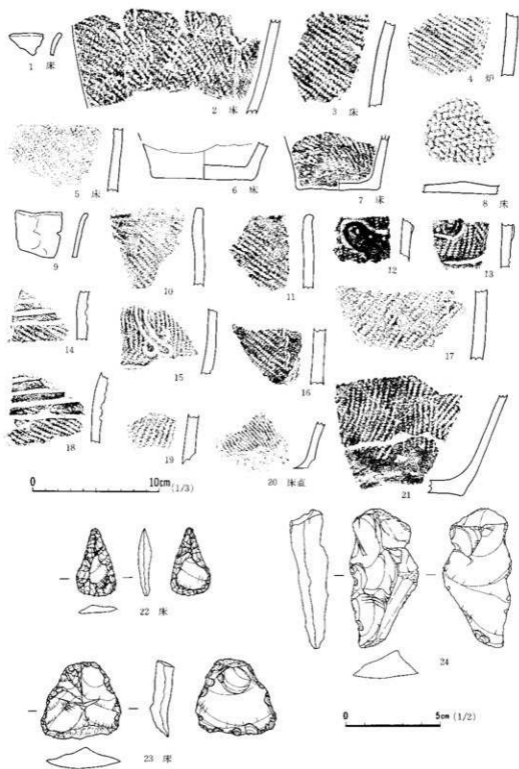
【出土遺物】（第11～13図）床面及び堆積土中から320点の土器、石器、剥片が出土した。第11図1は地文縄文に沈線を施し磨消がなされる。欠損しているが緩い波状口縁になる。3は楕円形沈線文の中に刺突が充填される。4の壺形土器は1と同様であるが沈線は稚拙である。

【小結】本遺構は、石囲炉を有する竪穴住居跡である。竪穴そのものの重複は認められなかったが、小穴及び炉跡の重複から建て替えが行われた住居跡と判断される。本住居の構築年代は、床面遺物と住居内埋設土器から、縄文中期末葉大木10式期と考えられる。堆積土内出土遺物から同時期には廃絶している。

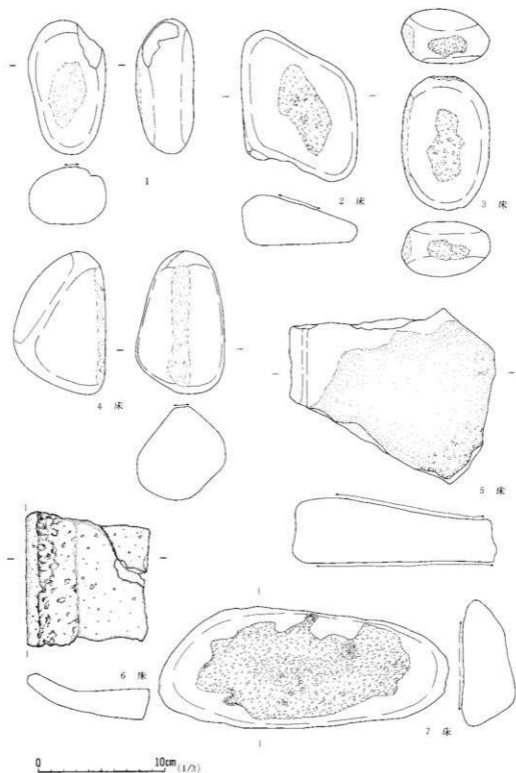
(増 尾)



第11图 第1号住居跡 出土遺物(1)



第12圖 第1号住居跡 出土遺物(2)



第13圖 第1号住居跡 出土遺物(3)

第2号住居跡 (第14図)

【位置と確認】 調査A区南端部、IG・H-6・7グリッドに位置する。本住居跡は、表土除去後、IV層面に不整なプランで検出した。本住居跡の南側と西側は、農免農道と町道建設の際に削平されたらしく、南西部は検出時から床面が確認された。本跡の東側には、第1号、4号住居跡が、西側には第3号住居跡が位置する。

【平面形・規模】 削平により判然としなが、検出した炉と穴等から、長軸約4.5m、単軸約3.5m程の楕円形と推定される。

【堆積土】 住居内堆積土は3層に分けられる。1層・2層中に炭化物を多量に含み、2層中には、炭化した板状のものが検出された。自然堆積によるものか人為堆積か判断しかねる。

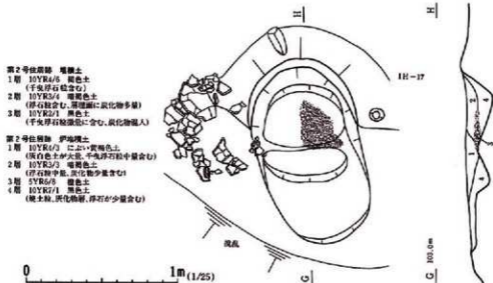
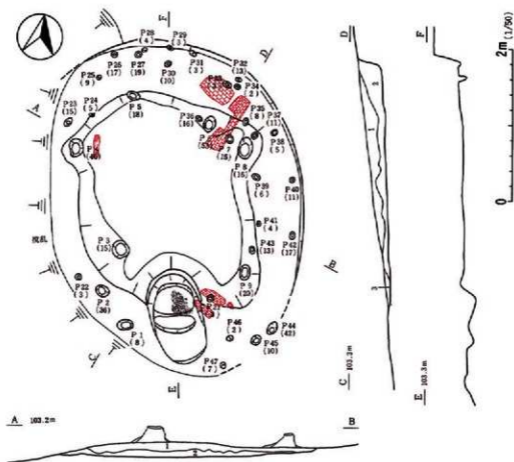
【壁・床】 壁は北側から東側にかけて遺存している。残存する壁のうち北東部分で約30cmの高さである。床は、壁直下から幅約50～60cm程の狭い平坦な面を有し、この平坦面は弧状に巡る。この面から僅かな段差をもって中央部分は、不整な四角形状に凹んでいる。この中央の凹んだ部分は、周囲の平坦面より強く硬化が認められる。

【柱穴】 本住居跡内からは、47個の小穴を検出した。小穴の径は、大きいもので約20～25cm小さいもので約5cm程である。深さは最大53cm、浅いもので3cmである。これらのうち、柱穴と考えられるものはP1～P9であるが、炉を中軸線に対象に配置されていることと、深さからみてP2、P4、P6、P9が支柱穴であったと考える。その他小穴については、いわゆる壁柱穴として捉えている。

【炉】 住居の南側に楕円形のプランとして検出した。炉の北側は、床面となるローム土を掘り残して、弧状に高まりを作り出している。炉堆積土は4層に分けられた。3層は焼土であり、面的に捉えられたが、断面では浮いた状態であった。炉の作り替えを想定したが、確証は得られなかった。また、炉底となるローム面でも明確な焼成を確認できなかった。炉内部は、三つに仕切るように掘り込まれており、前庭部と考えられる南側の浅い部分が特に硬化していた。

【出土遺物】 (第15・16図) 床面及び堆積土中から294点の土器、石器、剥片が出土した。第15図1と2、第16図1は炉脇から出土した。LR縄文が施文される。第16図6は波状口縁の波頭部を意図的に凹ませており、口縁部無文帯下に沈線で区画した中に付加縄文を充填施文している。同図7・16は鏝状隆起を有する。同図9は波状口縁の破片である。垂下する隆帯上にLR縄文が施文される。

【結】 本住居跡は、堆積土中の炭化物から消失住居の可能性が指摘される。本住居の炉跡は、床面を掘り残した周堤炉であり、床面は緩やかで微高ではあるが、段差により区画されている特徴がある。住居の構築時期は、床面遺物から縄文中期末葉に比定される。堆積土中に後期初頭の遺物も混在しているが、おおむね大木10期の範疇で捉えられる。(小田川)



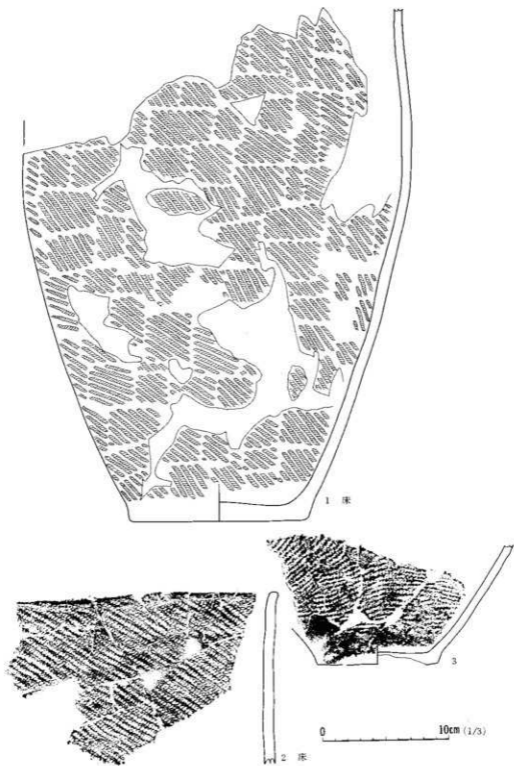
第2号住居跡 埋藏土

- 1期 10YR6/5 褐色土
(千丸浮石少量含む)
- 2期 10YR3/4 暗褐色土
(浮石を含む、基壇面に炭化物多量)
- 3期 10YR2/1 黒色土
(千丸浮石殻遺体を含む、炭化物混入)

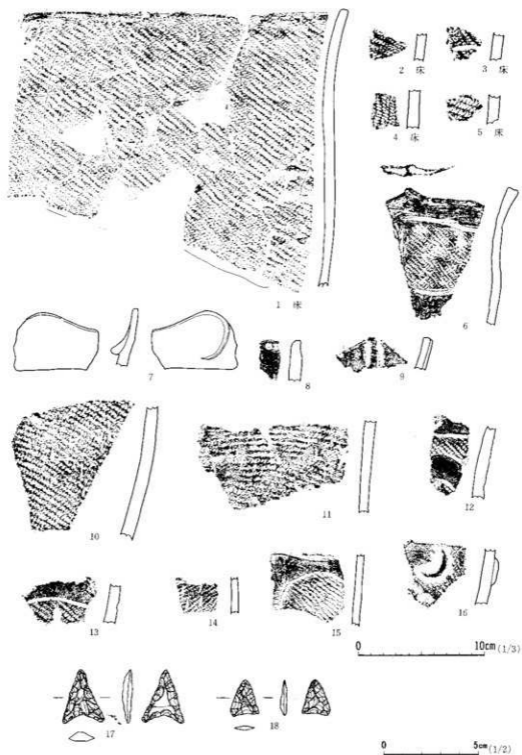
第2号住居跡 炉地埋土

- 1期 10YR6/3 に近い黄褐色土
(赤白色土が少量、千丸浮石粒中量含む)
- 2期 10YR3/3 暗褐色土
(浮石粒少量、炭化物少量含む)
- 3期 5YR6/6 褐色土
- 4期 10YR2/1 黒色土
(粘土質、炭化物多量、浮石が少量含む)

第14図 第2号住居跡・同炉



第15図 第2号住居跡 出土遺物(1)



第16圖 第2号住居跡 出土遺物(2)

第3号住居跡（第17図）

【位置と確認】 調査A区I J - 6グリッドに位置する。東側に町道を挟んで第1号、2号、4号住居跡が位置する。表土を10cm程除去後に暗褐色の円形プランで検出した。本プラン上には、黒色の溝状プランが重複していたが、町道建設に付随する攪乱と判明した。

【平面形・規模】 長軸4m・短軸3.6m程のほぼ円形である。本遺跡内では中型の規模の住居跡である。

【堆積土】 住居内堆積土は6層に細分したが、5層、6層は炉内に堆積した土ものである。各層には、多量の炭化物がロームブロックと共に検出された。層理面も明確ではなく、ロームブロックも多量に混入させていることから、人為堆積の可能性が高いものとする。

【壁】 第IV層を壁面としている。削平によるものか、壁の遺存状態は良好ではなく、東壁と西壁の一部が壊されている。各壁の壁高は東壁11cm、西壁11cm、南壁7cm、北壁6cm程である。

【床面】 壁直下に幅約60cm程の平坦面を有し、平坦面は弧状に巡る。この内側は、3cm～5cm程の段差をもち隅丸形状に凹んでいる。また、床面から多量の炭化材が検出された。

【柱穴】 住居内からは、11個の小穴を検出した。このうち、主柱穴と考えられるものはP2～5で、住居中央の隅丸形状に凹んだほぼコーナーに配列されている。これらを補助する可能性が高いものとして、P1、P6、P7が考えられる。

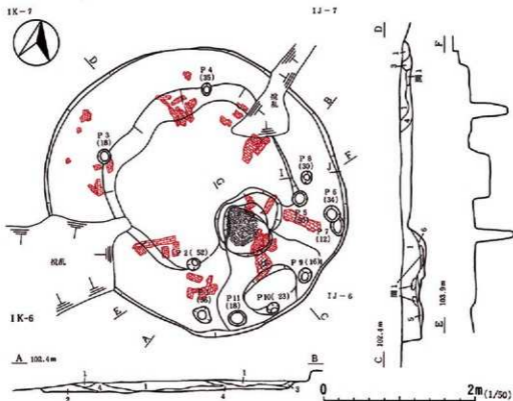
【炉】 住居中央よりやや南側に検出した。炉の北側は、第2号住居跡と同様にローム土を掘り残して弧状の高まりを作り出している。これに連続して南側には、扇形に広がる前庭部が作られている。炉の燃焼部は、ほぼ円形に掘られており、炉底にも加熱面が強く認められる。特徴的なことは、炉底から北側の部分に横穴を掘り、その内部に土器を横位にはめ込む様に埋設している。この土器内堆積土にも多量の焼土、炭化物が混入しており、土器上部の壁面の加熱も顕著である。

【その他の施設】 炉前庭部中央部分は、楕円形に浅く掘られており、その中に斜めに掘られたP10を中心に左右に作られた小穴は、前庭部を含め、出入口施設として想定される。

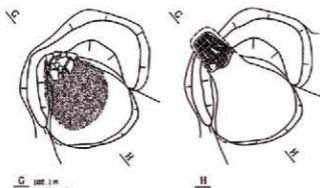
【出土遺物】（第18・19図）床面及び堆積土中から154点の土器、石器、剥片が出土した。第18図1と4は、東壁際の床面より2個体が潰れた状態で出土した。1は沈線文を施した後に、LR縄文を充填施文している。胴部上半を欠くが沈線はおそらくJ字状文であろう、末端には鱗状隆帯が付けられる。その他、床面から粗製土器片が出土している。

【小結】 本住居跡は、炉内部に横穴を掘り土器を横位に埋設する特殊な炉を有する。形態的には多少異なるが、土器埋設部—燃焼部—前庭部と分けられている点で複式炉といえる物であろう。住居の構築時期は、遺物から大木10式期と判断される。また、床面の多量の炭化物から焼失住居であったと判断される。

（増尾）



- 第3号住居跡 地味土
- 1層 10YR3/4 黄褐色土
(浮石粒、炭化物散見含む)
 - 2層 10YR5/6 黄褐色土
(浮石粒、炭化物散見含む)
 - 3層 10YR3/4 黄褐色土
(千枚片石散見含む)
 - 4層 炭化物、暗褐色土、黄褐色土混在
 - 5層 10YR4/4 黄褐色土
(焼土、炭化物、ロームブロック多量含む)
 - 6層 10YR5/6 黄褐色土
(暗褐色土混在、ローム繊維ブロック含む)
- 間1 ロームブロック



第3号住居跡 伊勢障土器地味土

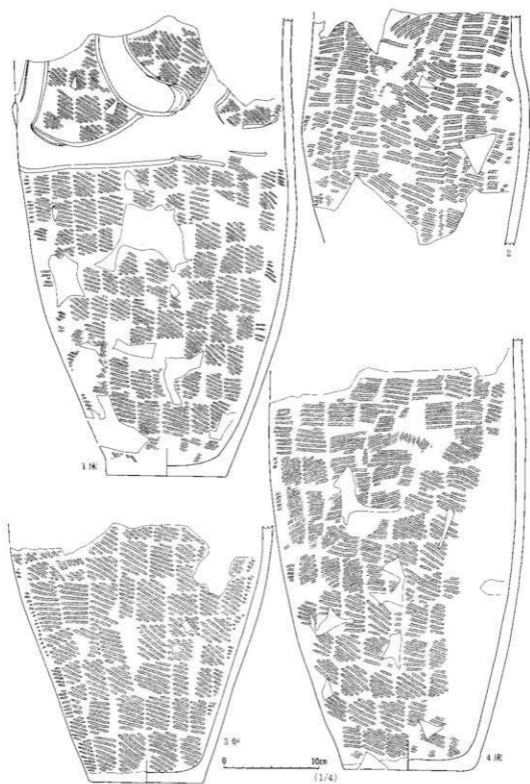
- 1層 10YR2/2 赤褐色土
(ローム粒散見含む)
- 2層 10YR3/4 黄褐色土
(焼土粒散見含む)
- 3層 10YR3/4 暗褐色土
(焼土粒、炭化物多量)
- 4層 7.5YR5/6 暗褐色土
(焼土粒、炭化物多量)

第3号住居跡 伊勢障土

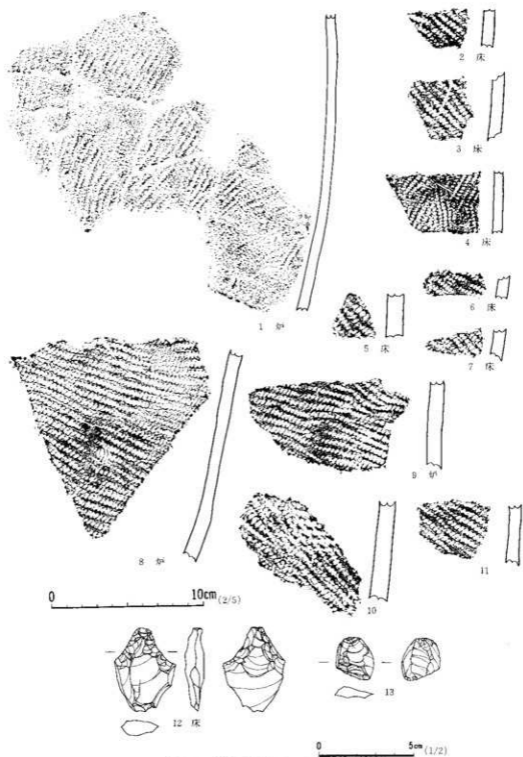
- 1層 10YR2/3 赤褐色土
(焼土粒散見、ローム粒多量含む)
- 3層 10YR3/4 黄褐色土
(ローム粒少量、焼土粒、炭化物散見含む)
- 2層 7.5YR5/6 暗褐色土
(炭化物)

0 1m (1/25)

第17図 第3号住居跡・同伊



第18图 第3号住居跡 出土遺物1)



第19图 第3号住居跡 出土遺物(2)

第4号住居跡（第20図）

【位置と確認】 調査A区I G～9グリッドに位置し、東から西への緩やかな傾斜地に作られている。南側に第1号、第2号住居跡がある。IV層面で黒褐色の円形のプランで検出した。

【平面形・規模】 平面形はほぼ円形で、規模は直径約3.5mである。

【堆積土】 住居内堆積土は、5層に細分される。第3層と5層は黄褐色のローム土で、壁の崩落土と考えられ、本来、検出した以上に壁高があったものと判断される。第1層中に炭化物が含まれるが、浮石粒と同様な自然流入と考えられるため、自然堆積と判断する。

【壁】 遺存している周壁は、緩傾斜のため西側の壁が他の壁と比べて低い。各壁高は、東壁で約30cm、西壁18cm、南壁21cm、北壁30cmである。床面からの立ち上がりは緩やかである。

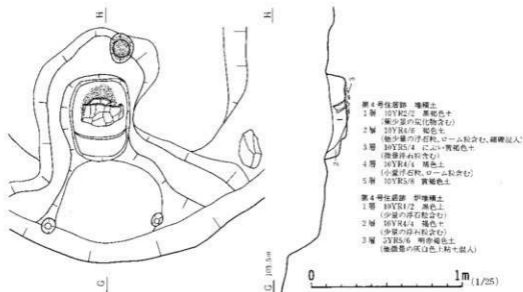
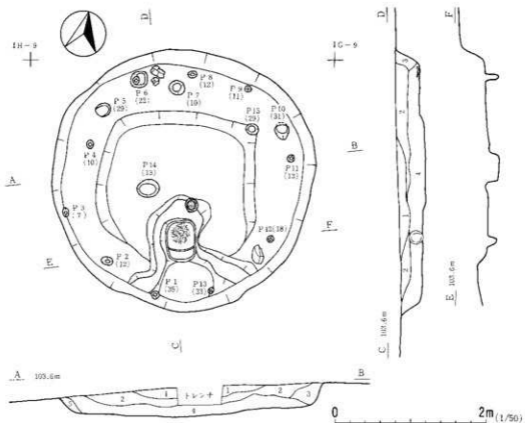
【床面】 第2号、3号住居跡と同様に床面に巡る平坦面を有する。壁直下の、この平坦面は最大幅60cm、炉付近で約40cmである。平坦面の内側は、約3cm～6cmの緩い段差をもって直径180cm程の隅丸形状に掘り凹められており、この部分はかなり強く硬化している。

【柱穴】 本住居内からは、15個の小穴を検出した。小穴の規模は、P14の径が最大で30cmを計るが、ほかは概して小さく約10cm程～20cm位である。第2号、3号住居跡の様に、住居中央の一段低い部分に炉を挟み対象に配列される柱穴は検出されなかった。これらの小穴のうち、支柱穴として機能したと考えられるものは、配置からP2、P5、P7、P15、P12があげられる。深さ的にP6、P10は補助的な機能を持ったものと考えられる。

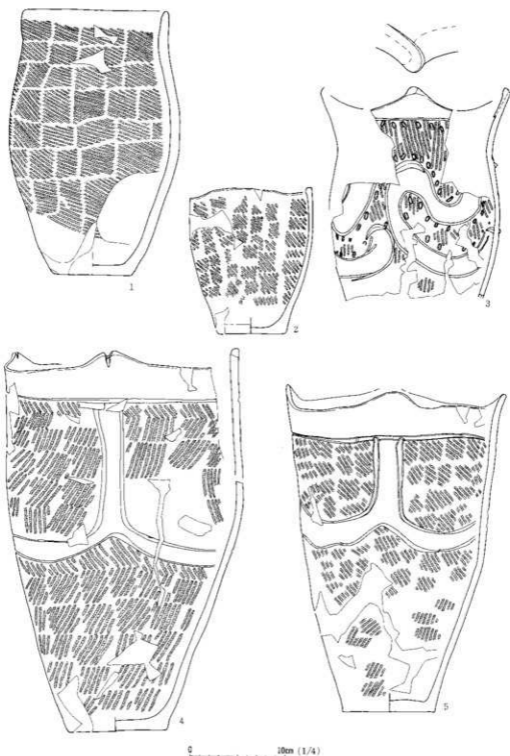
【炉】 第1号～3号住居跡同様、南側に前庭部を有する炉である。炉の周囲の掘り残しは、高さ3～6cmで、前述の住居跡のものとはほとんど差はないが、前庭部部分まで及んでいる点で異なる。炉の掘形は隅丸方形で二段に掘られている。炉底は強く焼けており、底部破片が出土した。炉堆積土1層上面で出土した土器は、床面と同一レベルにあるが、炉堆積土を介しているため、炉に伴うものとは考えにくく、流入時に偶然位置したものと解釈する。

【出土遺物】（第21・22図）総数281点の土器、石器類が出土した。覆土2層中からもっとも多く出土した。第21図1は炉直上より出土した。LR縄文が施文される。同図3は住居北壁際より出土した。沈線によるJ字状文を施文した後、鱗状降帯を貼付し、縄文を充填施文している。縄文施文後、刺突がなされる。同図4、5は覆土2層より出土した。器形と文様施文等が同様である。波状口縁で、浅い沈線による区画文が施された後、RL縄文が充填される。4の波頂部には刻みが入れている。第22図1は炉底面から出土した。他に縄文施文後、綾絡文を施文するものが出土している。第22図11はP15内より出土した石匙で、先端部を欠損している。

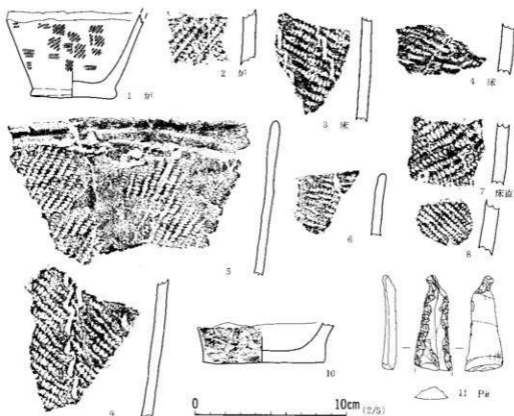
【小結】 住居内の堆積は自然堆積の状態をであり、覆土2層中からまとまって遺物が出土していることから、堆積の段階で凹地を一時使用（廃棄場等で）している可能性が考えられる。堆積土中と床面遺物に時間的差異はなく、大木10式期の構築、廃絶と促えられる。（小田川）



第20図 第4号住居跡・同炉



第21図 第4号住居跡 出土遺物(1)



第22図 第4号住居跡 出土遺物(2)

第5号住居跡 (第23図)

【位置と確認】 調査A区のIE-9グリッドを中心に位置する。南側は、農免農道側溝の法面であり、北側は調査区外となる。西側には、第1号、第4号住居跡がある。この部分は、表土層が薄く表土下がローム面となる。おそらく農道建設の際に広く削平されたと思われる。検出した19個の小穴は、配置が円形に見えることから住居跡の可能性があるものとして調査した。

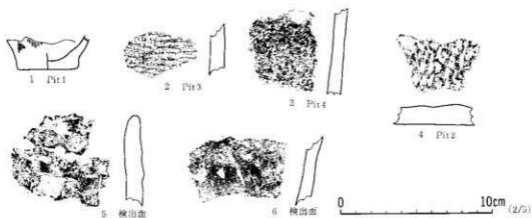
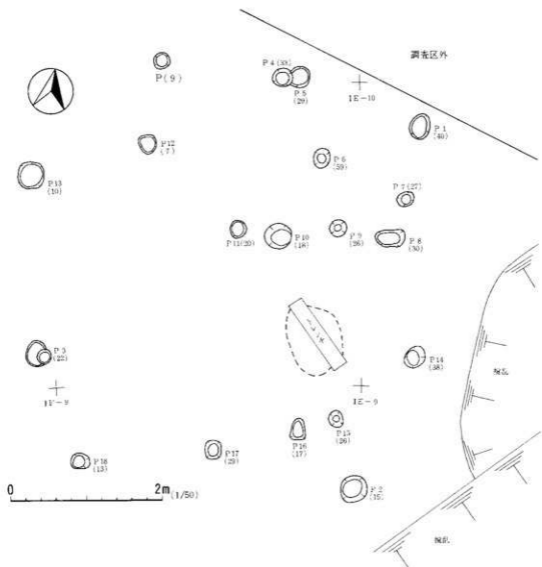
【平面形・規模】 小穴間の距離は、P2からP19までとP1からP3までが約6mある。

【床面・炉】 小穴の周辺で特に硬化した面は確認できなかったが、P14とP8の間からP11とP17の間の範囲に、堅めのローム塊がめくれ上がった状態で確認された。この範囲には、褐色土の楕円形プランも検出されたことから、(波線で表示) 炉の可能性があるとみて精査したが、壁は明確でなく、断割りを行ったが焼成等は確認できなかった。

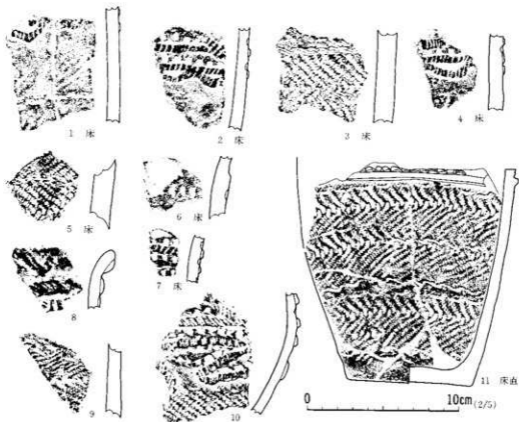
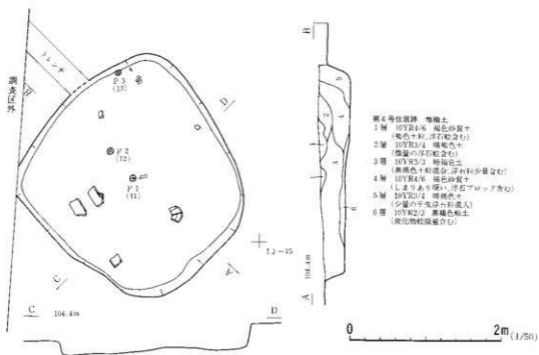
【柱穴】 深さと配置からP1、P3、P4、P5、P9、P14、P19、が柱穴であった可能性がある。小穴の規模は、径が20cm～40cm程、深さは7cm～40cmである。

【出土遺物】 (第23図) 小穴の覆土上位と、炉跡と思われた部分から土器が出土した。

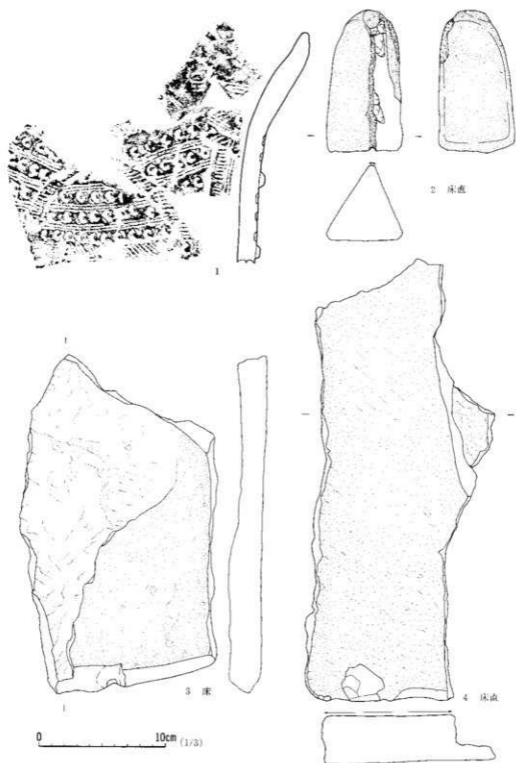
【小結】 小穴だけで断定はできないが、周辺に同様な小穴が見られないことから、削平を受けた住居跡と判断した。小穴内出土遺物から、縄文中期末葉のものと思われる。(小田川)



第23图 第5号住居跡・出土遺物



第24図 第6号住居跡 出土遺物(1)



第25图 第6号住居跡 出土遺物(2)

第6号住居跡(第24図)

【位置と確認】 調査A区I J-15グリッドに位置する。北側に第7号住居跡が近接してある。表土除去後、周辺から多数の遺物が出土したが、プランが明確に掘めずV層ローム面で検出した。本住居の西隅が一部調査区外にかかる。

【平面形・規模】 隅丸の台形状である。規模は北辺と東西辺で約2.5m、南辺で2mである。

【堆積土】 堆積土は6層に細分される。3層は黒褐色土が斑に混合し、4層では中気浮石のブロックの混入が顕著である。6層は黒褐色の粘質土で、有機質の混合土とも考えられる。堆積状態から、人為堆積によるものと考えている。

【壁】 精査時に、北西壁の立上りを捉えきれず、部分的に掘りとばしてしまった。壁高は、北壁及び西側に深く、約40cmを計る。南東壁で約30cm、南西壁で約20cmである。

【床面・柱穴】 床面は極微細な起伏を有する。土層観察ベルトC-Dを境に、北西側が緩やかに一段低くなっている。南東側を中心に硬化面が認められる。柱穴は検出されない。小穴が3個検出されただけである。規模は径が10cm、深さは10cmをわずかに越える程度のものである。

【炉】 検出されない。

【出土遺物】 (第24・25図) 堆積土及び床面から89点の土器、石器、剥片が出土した。全て、円筒上層C式期の土器片である。第24図11は床面より3cm程浮いた状態で出土した。第25図2は磨石である。同図3、4は板状節理に割れた台石である。共に床面遺物である。

【小結】 炉と柱穴が検出されず、住居跡より作業的な竪穴とみたほうが適切かもしれないが、とりあえず住居跡として扱う。遺物から、円筒上層C式期に比定される。(小田川)

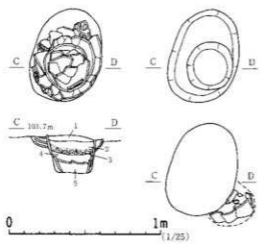
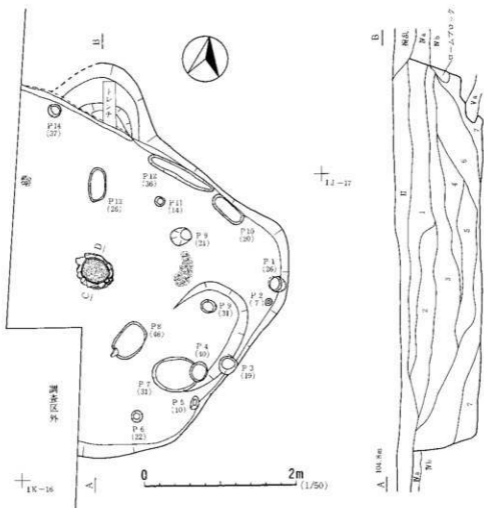
第7号住居跡(第26図)

【位置と確認】 調査A区I J・K-16・17グリッドに位置する。南に第6号住居跡が近接する。II層中に、本地点と周辺にはかなり遺物が出土したが、プランが不明瞭で捉えることができなかったため、V層面まで掘り下げ検出した。プランは不整な三角形で、西側の調査区外へと延びている。精査の段階で、炉跡と施設と思われるものが境界に検出されたため、一部調査区の外を拡張して調査を行った。

【重複】 第97号溝状土坑と、本住居の東コーナー部分が重複しており、本住居が新しい。

【平面形・規模】 住居西側が調査区外へ延びるため、全体形は不明である。検出した部分から推定すると、北側に張り出しを有する、隅丸な方形ないしは長方形になるものと思われる。検出した部分の東辺で、およそ3mを計る。

【堆積土】 住居内堆積土は7層に細分される。1層から6層までは、多量の遺物が出土する。1層は褐色土を主に黒褐色土を混合する。416点の遺物が出土した。2層は黄褐色土のロームを主に、褐色土と黒色土を混合する。77点の遺物が出土した。3層は暗褐色土で、533点の遺物が



- 第7号住居跡
- 1層 10YR2/5 褐色土
[赤褐色土粒混入、浮石散見含む]
 - 2層 10YR7/8 黄褐色土
[黄褐色土と褐色土、赤褐色土混入]
 - 3層 10YR3/1 暗褐色土
[赤石多量含む]
 - 4層 10YR4/3 に近い黄褐色土
[黄褐色土の薄層を挟み中に炭化物含む、浮石含む]
 - 5層 10YR2/1 白色土
[赤褐色土粒混入、浮石、炭化物散見含む]
 - 6層 10YR5/8 黄褐色土
[赤褐色土粒混入、浮石含む]
 - 7層 10YR2/3 黄褐色土
[黄褐色土粒混入、浮石含む]
- 第7号住居跡跡 炉跡跡土
- 1層 10YR5/8 黄褐色土
 - 2層 10YR3/3 暗褐色土
 - 3層 2.5YR4/6 赤褐色土
 - 4層 10YR5/2 黄褐色土
[焼土粒、炭化物多量、黑色土混入多]
 - 5層 10YR7/1 灰白色粘土
[ローム副アロック混入]

第26図 第7号住居跡・同埋設土器炉

出土した。4層は黄褐色土を主に黒色土と黒褐色を混合し、黒褐色の薄い層中に炭化物を多量に含む、251点の遺物が出土した。5層は黒色土で、156点の遺物が出土した。6層は黄褐色土を主に黒褐色土を多量に混合する。70点の遺物が出土する。7層黒褐色土で、遺物は出土しなかった。これらの堆積土は、自然堆積の状態を示すが、他の遺構と比べ堆積土中の遺物量が極端に多く、全て自然流入とは考えられない。2層は明らかに、掘り上げ土の廃棄であり、6層も土質から廃棄土の可能性高い。1層及び3層、4層、5層も堆積段階での土及び遺物の集中廃棄と判断される。純然たる自然堆積土は7層だけで、1層から6層は人為堆積と判断する。

〔壁〕 断面観察より、遺構の掘り込み面はIV層上面であることが確認された。各壁の壁高は、北壁と南壁で約100cm、東壁は床面からV層面までで約50cm程である。

〔床面〕 図示できなかったが、東側から西側に向かって緩やかに傾斜している。炉周辺と東壁直下では、およそ10cmの差がある。炉周辺以外に、硬化は認められない。

〔柱穴〕 住居内からは、15個の小穴を検出した。平面形は円形、楕円形、長楕円形であり、深さは、7cm～48cmである。主柱穴は見いだせない。P10、P12は形状的に溝の可能性があるほか、P15は住居内土坑としたほうがよいかもかもしれない。

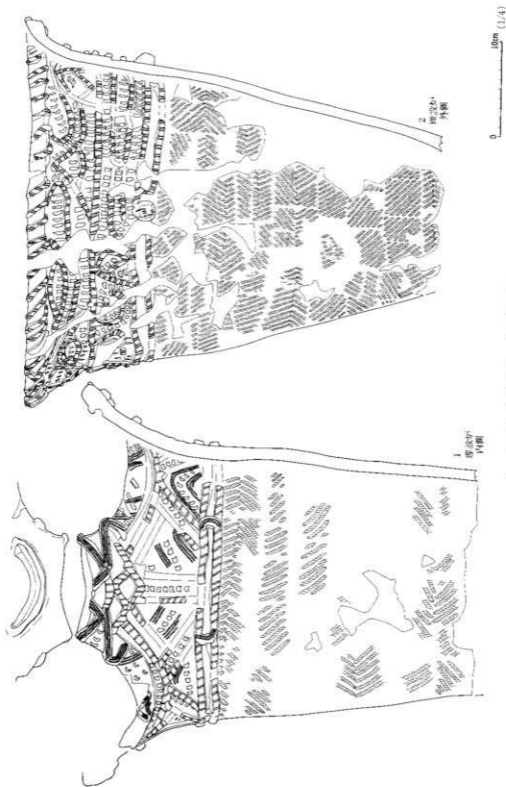
〔炉〕 土器埋設炉である。東壁より約2.5m、北壁より約2mの所に作られており、住居のほぼ中央に位置するものと考えられる。土器は、二段に作られた掘形内に、二個体の土器が埋設される。円形の深い部分には、第27図1の土器が埋められる。土器設置後、土器内に掘形底面より15cm程の厚さで灰白粘土を埋め、その上に同じ土器の口縁部破片が敷設される。更に、楕円形の浅い部分には、同図2の土器が1の土器を囲むように、敷設されている。また、この掘形北側に横穴掘られており、1の土器の底部が埋め込まれていた。

〔その他の施設〕 住居北側に半円状に張り出すものである。当初、土坑との重複を想定したが、土層断面で住居と一連のものと判断した。断面形は、緩い二段のステップ状である。

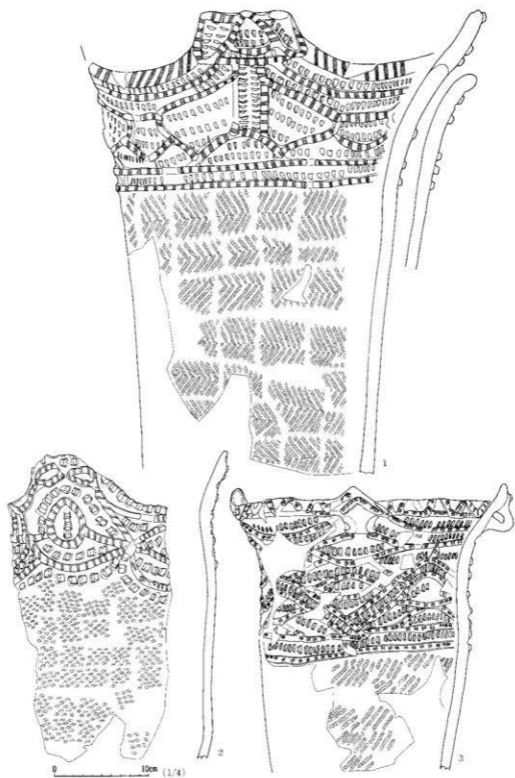
〔出土遺物〕 (第27～36図) 総数1931点の土器、石器、剥片が出土した。前述したが、堆積土中から廃棄された遺物が多量に出土した。そのほとんどが、円筒上層C・d式の土器で、僅かに円筒上層b式が混じる。第33図8と9は大木7b式に比定される土器で、上層C・d式と共に出土した。床面からは、胴部細片が多く出土した。また、P8の堆積土から剥片がまとめて出土した他、P14脇からも数点の剥片が出土した。

〔小結〕 本遺構は、調査区外へ延びるため全容は不明であるが、土器埋設炉と舌状に張り出す施設を有する住居跡である。住居跡の年代は、炉埋設土器から円筒上層C式期に比定される。また、住居埋没段階で、廃棄場として使用されており、遺物から上記の時期には埋没しているものと考えられる。

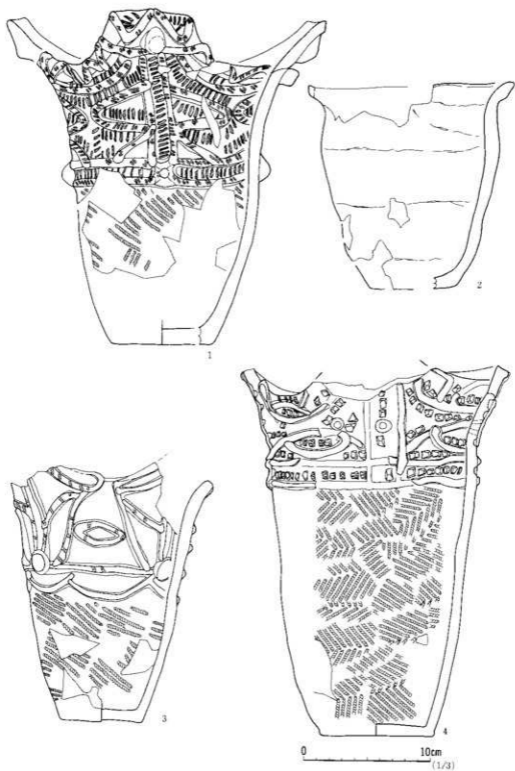
(小田川)



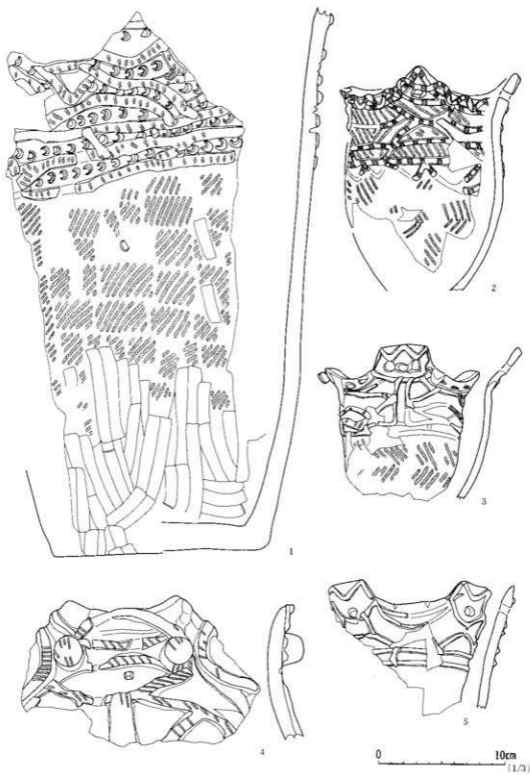
第27图 第7号住居跡 出土遺物1)



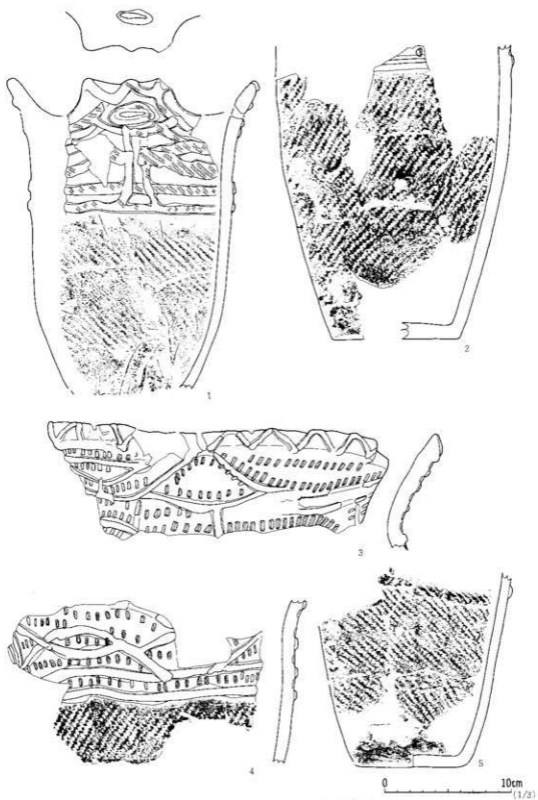
第28図 第7号住居跡 出土遺物(2)



第29图 第7号住居跡 出土遺物(3)

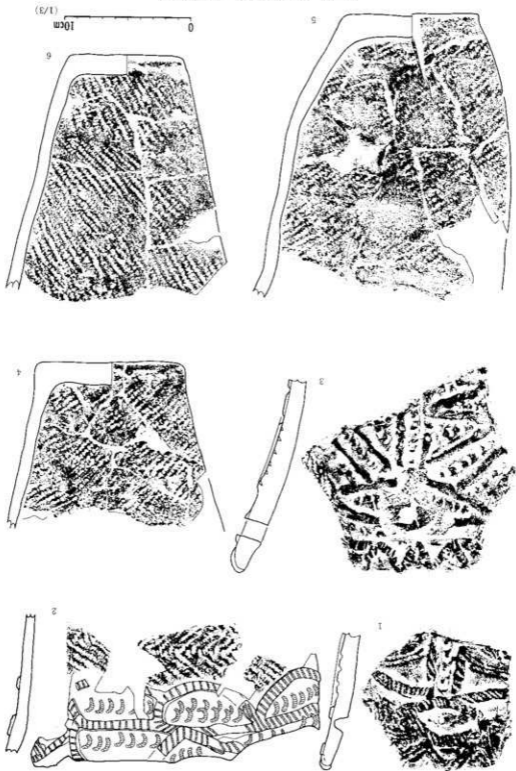


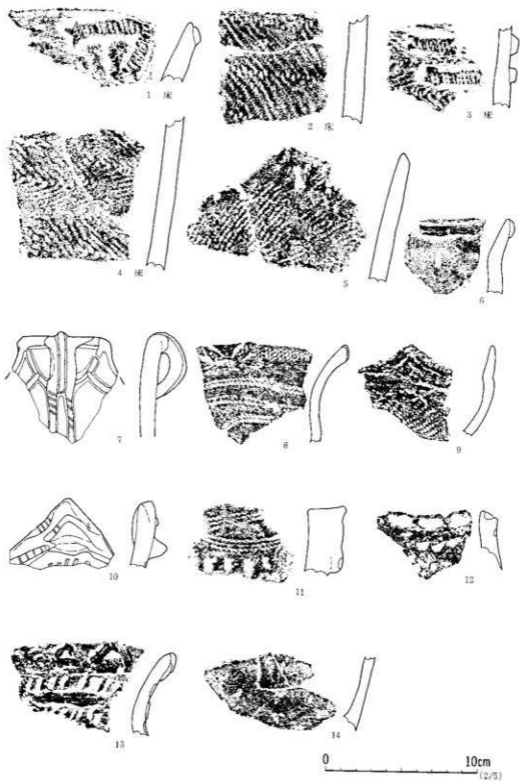
第30图 第7号住居跡 出土遺物(4)



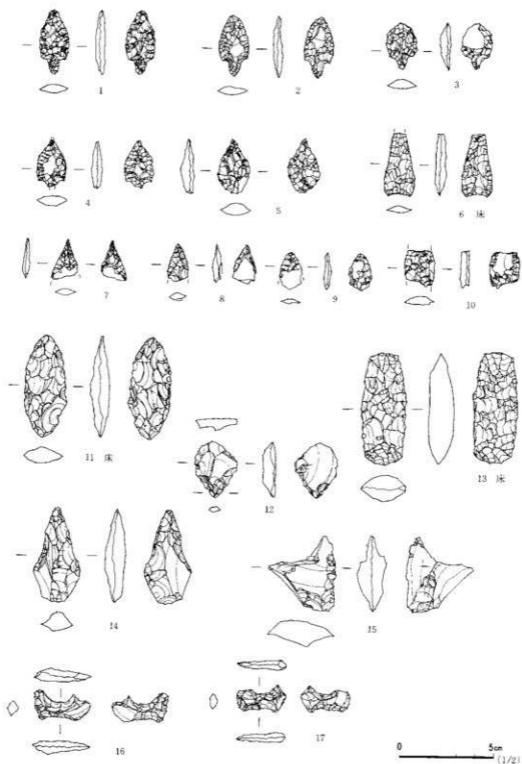
第31图 第7号住居跡 出土遺物(5)

第32号 第7号住居跡 出土遺物(6)

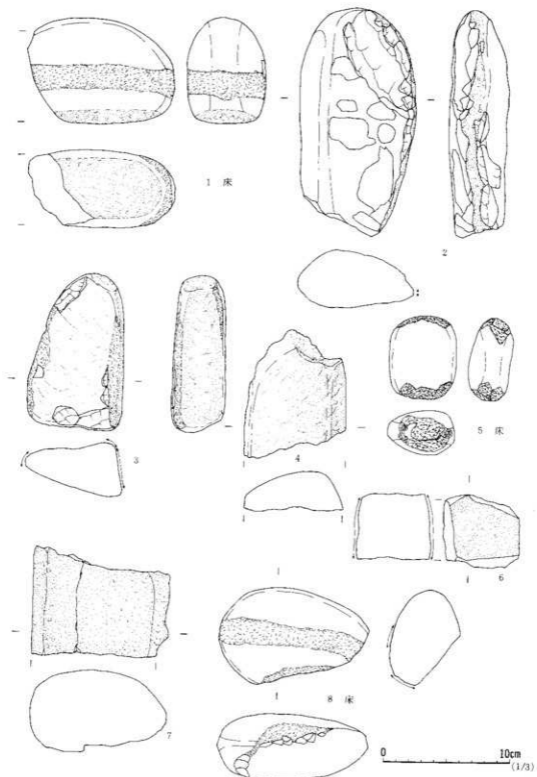




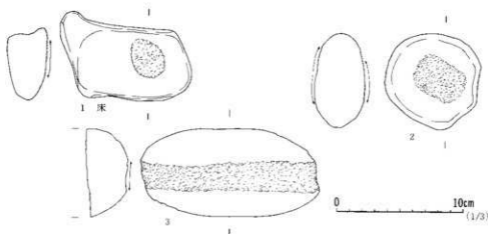
第33图 第7号住居跡 出土遺物(7)



第34图 第7号住居跡 出土遺物(8)



第35图 第7号住居跡 出土遺物(9)



第36図 第7号住居跡 出土遺物⑩

第8号住居跡 (第37図)

【位置と確認】 調査A区のほぼ中央、I E-29・30グリッドに位置する。遺跡の立地する丘陵のなかでも、比較的高い地点に作られている。約10m程離れて、南に第26号土坑が、西に第102号土坑と第64号、68号墓坑がある。周辺からの出土遺物は少なく、IV a層上面で落ち込みを確認したが、IV b層上面まで掘り下げ三角形のプランで検出した。

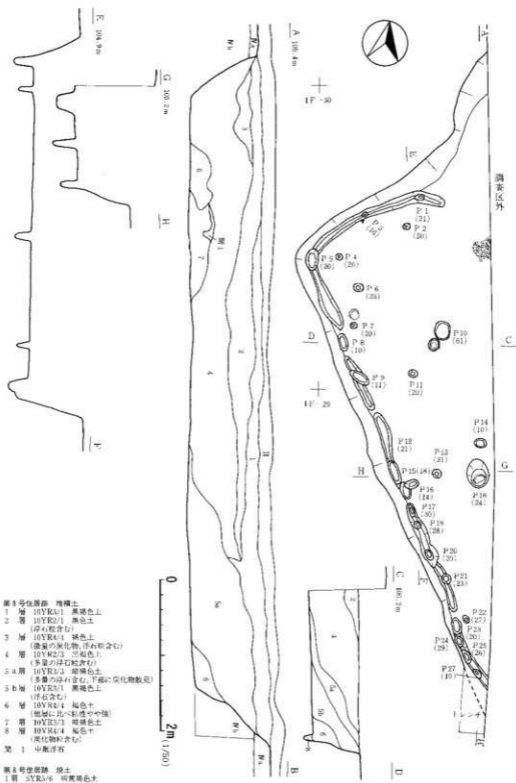
【平面形・規模】 検出したのは、住居の西側部分だけで全体形は不明である。検出した部分から推定すると、鋭角なコーナーからほぼ直角に住居の縁が折れることから、方形ないしは長方形になるものと思われる。検出した部分の西辺で約7.5m、北辺で約4mを計る。

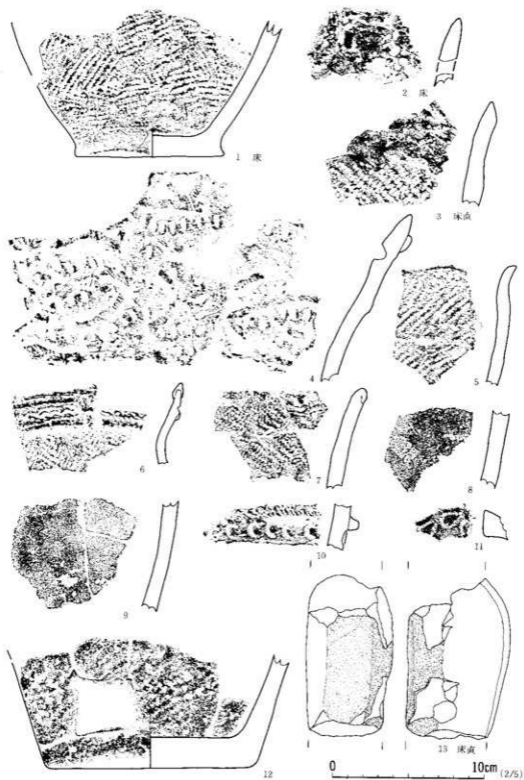
【堆積土】 住居内堆積土は9層に分けられる。各層は、褐色土を主体に黒色土粒と浮石混合する。2層は、北側部分でII層と判別が困難である。自然堆積土と考える。5層は、土層断面C-Dの部分で5 a層中に土層の傾斜に沿って遺物が出土し、その部分で炭化物が確認されたため細分した。人為堆積の可能性もある。6層はIV b層に似た土質で、土層観察面の狭い範囲と西壁際に見られ、壁の崩落土の可能性もある。7層と、その上面の間1とした中振浮石のブロックは、この部分だけにみられた。1層、3層、4層、7層は人為堆積の疑いがある。

【壁】 土層断面より、遺構の掘り込みはIV a層上面である可能性がある。各壁の壁高は、北壁と南壁で約100cmある。土層図南側のラインの屈曲から、崩落しているものと考えられる。

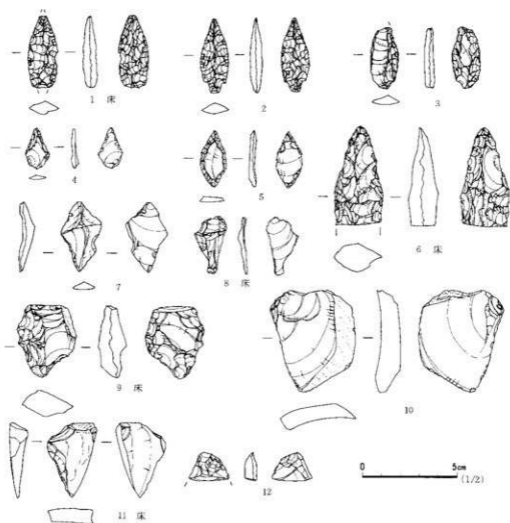
【床面】 ほぼ平坦である。特に硬化は認められない。

【柱穴・周溝】 住居内から、26個の小穴と周溝を検出した。小穴の多くは、周溝内に作られており、深さは10cm～40cm程である。平面形は円形、楕円形で、小型なものには打ち込まれた杭の可能性もある。P10は深さ的に柱穴として機能した可能性がある。周溝は、幅10～25cmで、深さは平均で20cmある。壁直下に小穴を挟み作られており、P5のあるコーナー部分に作られているものは、北壁に沿って2m程延び、末端は住居の内側に50cm程入り込んで止まる。





第38图 第8号住居跡 出土遺物(1)



第39図 第8号住居跡 出土遺物(2)

【炉】 境界部分に25×30cmの不整な焼土面を検出したが、焼土は薄く掘形もない。本住居の炉としては考えられない。

【その他の施設】 住居北側に、第7号住居跡と類似する張り出しを有する。

【出土遺物】 (第38・39図) 堆積土及び床面から328点の土器、石器、剥片が出土した。大半が5 a層から出土した。円筒上層C式の土器が多い。第39図2～5までの石鏃も5 a層からまとめて出土した。4層からも十数点の土器が出土している。第38図6は大木系の土器に比定される。床面から第38図1と3の土器が出土した。

【小結】 本住居跡の大半は、東側調査区外にあるため全容は不明である。検出した部分から、北側に張り出しをもつ、方形ないし長方形の比較的大型の住居と推定される。年代は、円筒上層C式期と考えられる。

(小田川)

第9号住居跡（第40図）

【位置と確認】 調査A区北側IG-55グリッドに位置する。周辺には第10号、15号、13号、16号住居跡がある。また、大型のフラスコ状土坑も本住居の北側には多数作られてある。本住居は、表土を除去した時点で、多数の遺物を包含したほぼ円形のプランで検出した。周辺からの出土遺物も多く、プランが明確に確認できるIVb層上面から精査を行うつもりで掘り下げたが、住居そのものの構築が浅く、住居の南側を掘りとばす結果となった。残った部分についても、木根による攪乱の影響を強く受けている。

【平面形・規模】 残存する床面の長さは、最大3mである。わずかな壁と遺存した炉から推定して、およそ4m前後の住居跡になると思われる。

【堆積土】 住居内堆積土は、わずかに4～6cm程の厚さである。堆積土は、2層に分層される。1層、2層ともに微量であるが炭化粒が混入している。

【壁】 住居の北側と東側に、僅かに残存する。残存する壁の高さは、北壁および東壁で5～10cmである。周囲に攪乱が多く見られるが、プラン内の遺物に動いている状態はほとんど見られないことと、調査区東側境界面の土層にも削平の痕跡がみられないことから、本来からきわめて浅い掘形による構築であったと考えている。

【床面】 第IVa層上面を床面としている。部分的に途切れるものの、壁際近くまで貼床が施されている。貼床は、第IVa層と土色が類似しているが、非常に堅く踏み締められているため手触りからは容易に範囲を捉えることができた。貼床の厚さは2～3cmである。

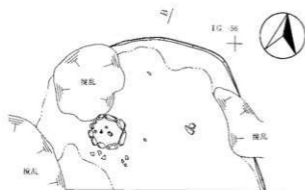
【柱穴】 住居跡に伴う小穴は、検出することができなかった。

【炉】 石囲炉を検出した。住居跡のやや西側よりに位置したものと推測される。炉の遺存状態は良い。ほぼ円形に掘られた、掘形の周壁に、円礫と角礫を円形に配置している。これらの石は、被熱により赤化している。炉の底面硬く焼けており、炉底のロームも深さ10cm程の焼成がみられる。

【出土遺物】（第40・41図）総数278点の土器、石器、剥片が出土した。前述のとおり、表土直下で遺物が出土し、堆積土も薄く、ほとんどが床面および床面直上出土の状態である。周辺からも、多数の遺物が出土しているが、とりわけプラン内に集中していることから、遺物が廃棄されている可能性が考えられる。第40図1は、口縁部と胴部を指頭圧痕をもつ隆帯で区画する土器である。口縁部は無文帯となり、緩い波状口縁の波長部から垂下するノ字状の隆帯に区画される。胴部は、縦位の指頭圧痕をもつ隆帯で区画され、その間に蛇行する浅い沈線が施され、沈線間にRL縄文が充填される。第41図6は、口縁部に縄の圧痕が施される。

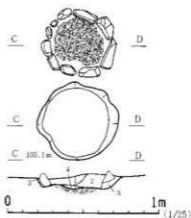
【小結】 出土遺物から、本住居跡の年代は、縄文時代中期末葉から後期初頭のものと思われる。

（増 尾）

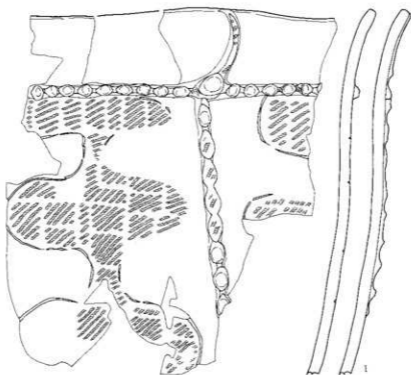


第9号住居跡 埋藏土

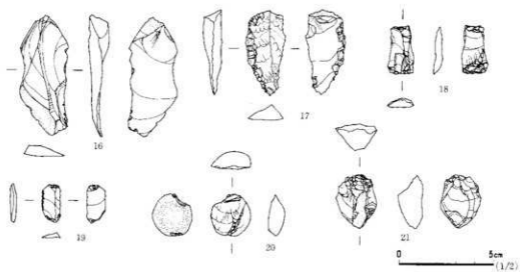
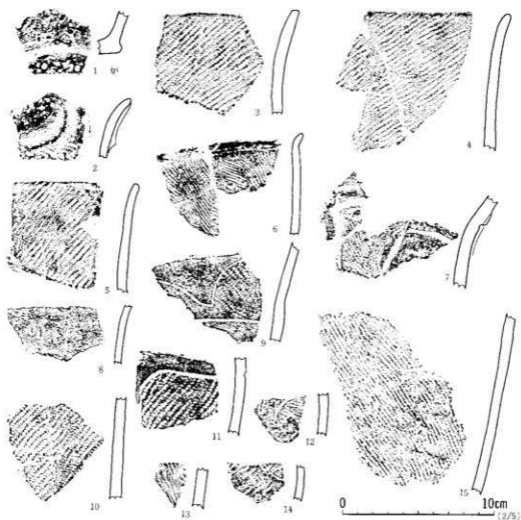
- 1層 10YR2/3 黒褐色土
 (炭化粒少量, 白色浮石粒含む)
 2層 10YR4/4 褐色土
 (炭化粒少量, 浮石粒含む)



- 第9号住居跡 埋藏土
 1層 10YR5/3 砂褐色土
 (炭化物少量, 粘土粘着層含む)
 2層 10YR3/4 暗褐色土
 (粘土粘着層)
 3層 10YR4/5 褐色土
 (白色浮石含む)
 4層 7.5YR6/6 棕色土
 (塊状した白色粘土, 砂粒)
 5層 5YR5/8 暗赤褐色土



第40図 第9号住居跡・出土遺物(1)



第41图 第9号住居跡 出土遺物(2)

第10号住居跡（第42図）

【位置と確認】 調査A区北側 I F・G-54・55に位置する。本住居周辺には、多数の遺構が作られてある。IV a層面で、不整な楕円形のプランを確認し、IV b層まで掘り下げた時点で、土坑との重複であることを確認し、精査を行った。

【重複】 第9号住居跡、第56号、第57号土坑と重複する。本住居跡の北側に作られてある、第9号住居跡は、前述のとおり掘形の浅い住居で、状況的に本住居跡の方が古い。第56号土坑は本住居より新しく、住居の南端部に作られている。第57号土坑は本住居の北西隅に作られてあり、堆積土中に住居周溝と柱穴 P 4 と P 6 が重複することから本跡が新しいと判断する。

【平面形・規模】 住居跡の南側の一部を第56号土坑によって切られているが、長軸は4.5m、短軸 3.4m程の北側が扁平な楕円形である。また、住居内に検出した小穴と周溝から、本住居跡は拡張されている可能性がある。

【堆積土】 3層に分層した。1層は廃棄のロームであり、暗褐色土と混合する。このローム土は、周辺のフラスコ状土坑構築の際に本住居跡に廃棄された土の可能性が有る。第3層には炭化物の混入が認められ、土質から人為堆積の疑いがある。

【壁】 第56号土坑によって切られる南壁以外は残存状態もよく、壁高は東壁48cm、西壁50cm、北壁52cmである。床面からは約75度前後で立ち上がる。

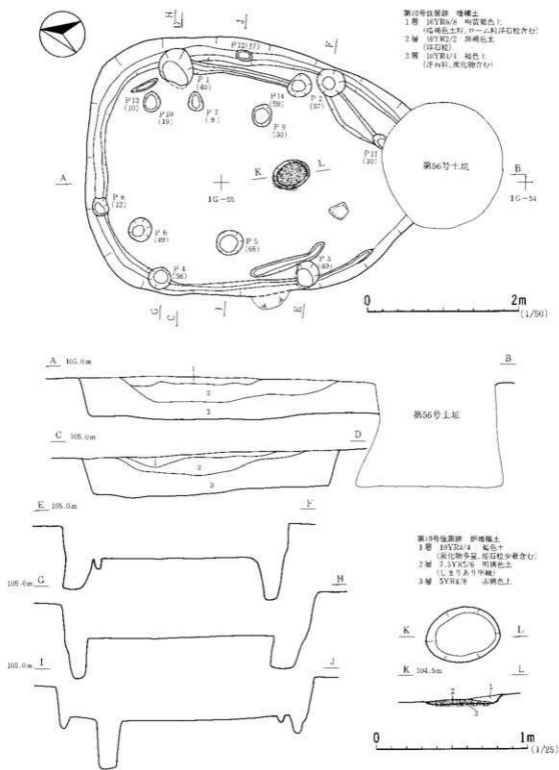
【床面】 床面は、若干の起伏は認められるものの概ね平坦である。第57号土坑のある、住居北西部分は部分的に軟弱である。貼床等は確認されなかった。

【柱穴・周溝】 住居内から、14個の小穴と周溝を検出した。周溝は、住居周壁を巡るものと、その内側に断片的に巡るものがある。両溝とも、深さは均一でなく底面には起伏が認められる。深さでは周壁に巡る方が深い。小穴は、周壁に巡る溝上に作られているものとその内側に作られているものがあり、深さは浅いもので10cm、深いもので66cmある。本住居の主柱穴となるものは、配置と深さから P 1～4 と想定される。これらは、周溝との関わりから住居の拡張による新しい柱穴の可能性が有る。

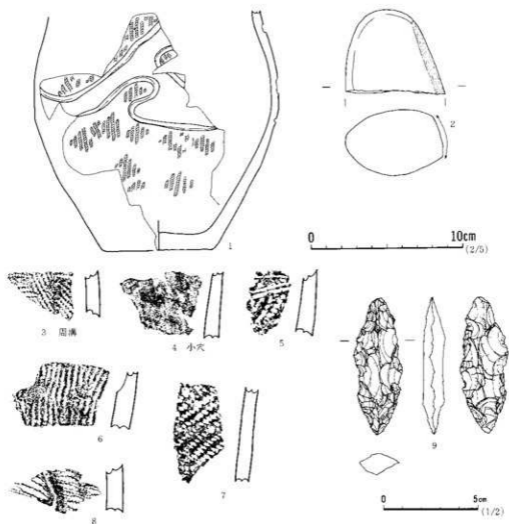
【炉】 床面を浅く楕円形に掘り込んだ地床炉で、住居中央よりやや南側にある。炉堆積土第2層は堅緻な焼土塊である。他に、焼土が確認されないことから、住居の拡張を想定すれば、改築後も同一の炉を使用していたものと考えられる。

【出土遺物】（第43図）遺物は極めて少なく総数24点の土器と石器類が出土した。床面より台石1点のほか、小穴より7点の土器細片と剝片1点が出土した。第43図1は堆積土中からの出土で、大木10式に比定される。

【小結】 断定はできないが、本住居は周溝の在り方から住居の拡張が想定される。住居の時期は、堆積土内出土遺物から大木10式期か、それ以前に比定される。 （増 尾）



第42図 第10号住居跡・同炉



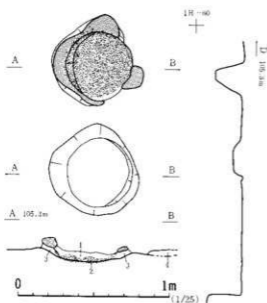
第43図 第10号住居跡 出土遺物

第11号住居跡 (第44図)

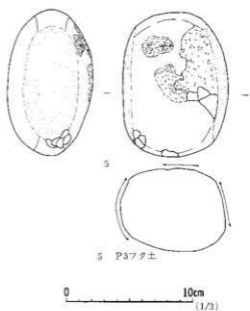
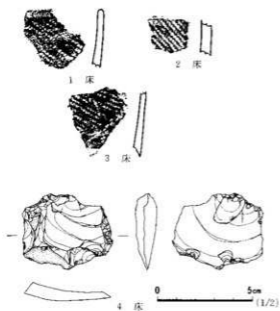
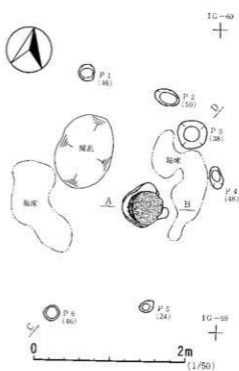
【位置と確認】 調査A区北側I G-59グリッドに位置する。周辺には第14・15号住居跡が存在する他、本住居の北側にはフラスコ状土坑群がある。本住居は、表土を除去した時点で焼土と、硬化した面を確認した。同一レベルで精査を行ったところ、焼土を囲む様に小穴を検出したことから、住居跡として調査した。

【平面形・規模】 厚さ20cm程の表土直下で、すでに貼床と思われる硬化面を検出している。周囲には、攪乱が随所に見受けられることから削平されているものと思われる。削平により壁が存在しないため正確な規模と形態は把握できないが、検出した貼床と小穴から直径4m程の円形ないし楕円形の住居と思われる。

【床面】 炉の東側と西側に、約50×150cmの範囲で褐色土の貼床が認められた。貼床の厚さは、



- 第11号住居跡 伊豫焼土
- 1層 10YR4/1 褐色土
 - 2層 2.5YR6/8 褐色土
 - 3層 10YR4/6 褐色土
 - 4層 10YR4/4 褐色土
- (浮石・砂少量含む)



第44図 第11号住居跡 出土遺物

およそ5cmから10cmである。

【柱穴】 総数6個の小穴が検出された。径が20cmから30cmの円形及び楕円形である。深さは浅いもので24cm、深いもので50cmある。炉を中心に半円状に配置されている。西側には検出できなかったが、おそらく円形に配置されていたものとする。

【炉】 周堤炉である。床となるロームを、浅く円形に掘込んだ後に、灰白色粘土と褐色土を混合したものを掘形周縁に張り付けている。

【出土遺物】 (第44図1～5) 床面から3点の土器細片と8点の剥片が出土した。また、P3からスリ石が出土した。出土土器は、斜行縄文が施され縄文時代中期中葉以降に比定される。

【小結】 本住居跡は、削平により判然としないが、遺物から上記年代に比定されるものと考えられる。 (増尾)

第12号住居跡 (第45図)

【位置と確認】 調査B区のI O・P-78・79に位置する。第II層除去後に暗褐色土の弧状の落ち込みを確認した。プランが調査区外へ延びるため、調査区を拡張しIV a層上面で円形のプランで検出した。周辺は本住居跡の以外、他に遺構は希薄である。

【平面形・規模】 直径約5m程のやや不整な円形である。

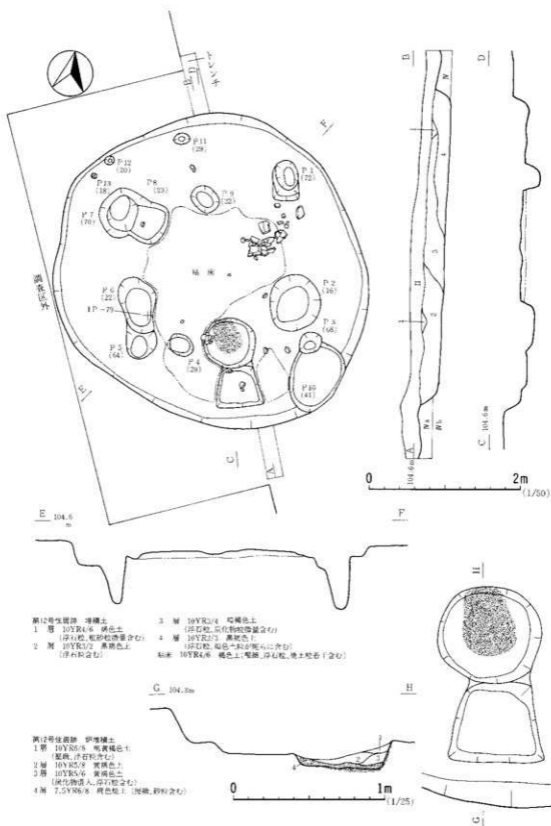
【堆積土】 住居内堆積土は4層に分けられる。1層に見られる砂粒は中振起源の浮石が飛砂状に堆積した可能性が高い。3層中からは微量の炭化物が検出された。1層は自然堆積であるが、2層から4層まで自然堆積か人為堆積か判断し兼ねるが、堆積状況から人為堆積の可能性のあるものと考えられる。

【壁】 第IV a層のロームを壁として、緩やかな立ち上がりである。壁高は、東壁23cm、西壁30cm、南壁23cm、北壁24cmである。

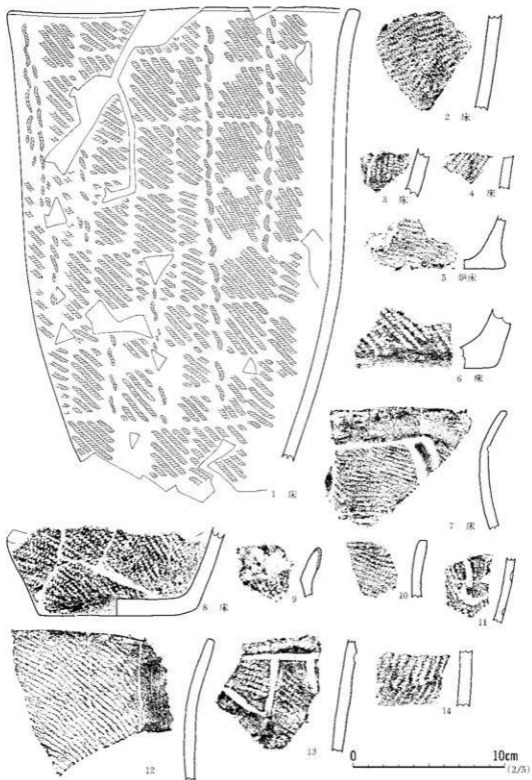
【床面】 第IV b層を床面としている。住居跡内中央部に、非常に堅緻な褐色土の貼床が敷設されており、この部分は周囲よりやや高まっている。貼床の厚さは約10cm程である。全体的に小さな起伏が認められる。

【柱穴】 本住居内からは、総数13個の小穴を検出した。形状はほぼ楕円形であり、大きさ及び深さにはバラツキがある。このうち、住居の支柱穴として機能したものは、配置と深さから、P1、P3、P5、P7と考える。これらのうち、P1とP7の掘形断面は片側が階段状であることと、P7はP8とP5はP6と重複し、また径が他のものより大きいことから、P6とP8は柱の抜き取り痕と考えられ、支柱穴の据え替えが想定される。炉の東側に存在するP10は、規模と深さから貯蔵穴等の特殊施設の可能性も考えられる。

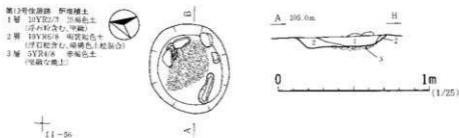
【炉】 前庭部を有する炉で、住居の南側に位置する。前庭部は、約1.5m×1.2mのほぼ方形で床面よりおよそ10cm低い。燃焼部は、円形で北側床面より最大50cmの深さに作られてある。



第45図 第12号住居跡・同炉



第46图 第12号住居跡 出土遺物



第47図 第13号住居跡 炉

炉底の中央から北側の壁部分が堅緻で、特に強く焼けた痕跡が残る。

【出土遺物】(第46図)総数175点の土器、石器が出土した。大半が堆積土中からの出土である。住居床面から相当数の礫、小礫を出土したが明確な使用痕跡は認められなかった。第46図1はほぼ床面中央より出土した。平口縁で地文にL R 縄文を施文した後に結束回転文を施している。同図8は1の底部の可能性もある。同図7、9～13は大木10式期に比定される。

【小結】本住居跡は、前庭部を有する炉をもつものである。検出した柱穴の状態から柱の据え替えが行われた可能性がある。床面出土遺物から、本住居跡の構築時期は縄文時代中期末葉に比定されるものとする。(増尾)

第13号住居跡(第47図)

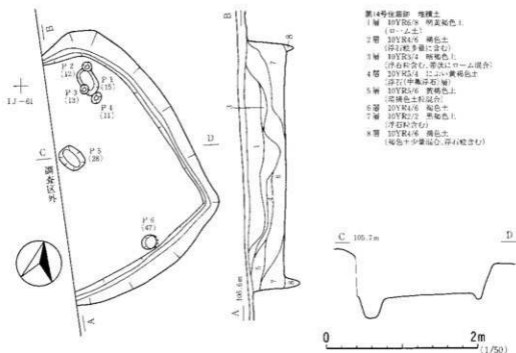
【位置と確認】調査A区IH-55グリッドにあり、第113号土坑と第114号土坑の中間に位置する。調査終盤に行った町道付替により検出された。本遺構の周辺は、他の住居や土坑が密集する地点であるが、ほとんどのものが表土撤去時点で検出されるといった、削平の影響を強く受けている地点でもある。本遺構も町道撤去時に直下で検出され、第9号や第11号住居跡と同様に住居の炉跡として精査を行った。

【平面形・規模等】調査区外に極めて近いことと、規模を推定できる柱穴や壁の痕跡などをまったく確認できなかったため、平面形及び規模については不明である。

【床面】炉の周囲に、踏み縮まりと思える堅い面が若干認められた。

【炉】礫を配した石囲炉であったと考えられる。直径約70cmほどの円形に、第IV a 層を掘り込み、その東側内側に8cmから15cm程の礫を4個配置していた。本来は円形に配置されていたものと思われるが、抜き取りの痕跡は確認できなかった。炉底は、焼成により堅緻である。

【小結】第9号住居跡の炉との類似性から、屋外炉と見るよりは住居炉跡の可能性が高い。出土遺物が無く時期は不明である。(増尾)



第48図 第14号住居跡

第14号住居跡 (第48図)

【位置と確認】 調査区A区 I i - 60・61グリッドに位置する。本遺構の北側には、プラスチック状土坑群がある。町道撤去時に、直下の第IV a層面で不整な三角形のプランで検出した。西側の調査区外へ延びているが、調査区外が作業場となっているため、拡張して調査を行えなかった。

【平面形・規模】 調査区外へ延びるため全体形は不明であるが、検出した部分から推定すると、隅丸な方形になるものと思われる。検出した部分の東辺で、およそ3.4mを計る。

【堆積土】 住居内堆積土は8層に分けられる。1層を除き、全体に褐色土を主体にする。1層は明黄褐色のロームで廃棄土である。3層から5層までは、褐色土を主にロームと黒色土を混合し、1層と同様な廃棄土と考えられる。6層以下は、土質及び堆積状況から自然堆積と判断する。2層については判断としないが、自然堆積と考えておく。

【壁・床面】 壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁高は、東壁で55cm、南壁で50cm程である。床面はほとんど平坦である。特に硬化は認められない。

【柱穴・周溝】 住居内から、6個の小穴を検出した。主柱穴は見いだせない。周壁直下に、深さ20cm程の溝が巡る。

【炉】 調査範囲内に炉は存在しない。

【小結】 本住居の3分1程が調査区外にあり全体は不明である。形状及び規模的には、第6住居跡と類似する。出土遺物が無く時期についても不明である。 (小田川)

第15号住居跡（第49・50図）

【位置と確認】 調査A区IH-57グリッドを中心に位置する。周囲には、多くの遺構が作られてある。町道撤去時に、直下に多くの遺物を包含した黒色の円形プランで検出した。検出面は第IVa層面である。

【重複】 住居北側で第119号土坑と重複しており、本住居が古い。また、住居床下で第120号土坑と第145号土坑と重複し、本住居が新しい。第145号土坑は、炉の断割りによって判明した。

【平面形・規模】 一部調査区外にかかるが、6.5m程のほぼ円形である。

【堆積土】 町道建設の際に削平を受けたためか、堆積土は薄く20cm～25cm程の厚さである。3層に分けられた。1層の黒色土と、2層の黒色土と褐色土の混合層からは相当数の遺物が混在して出土しており、人為堆積の可能性がある。3層は壁の崩落土と思われる。

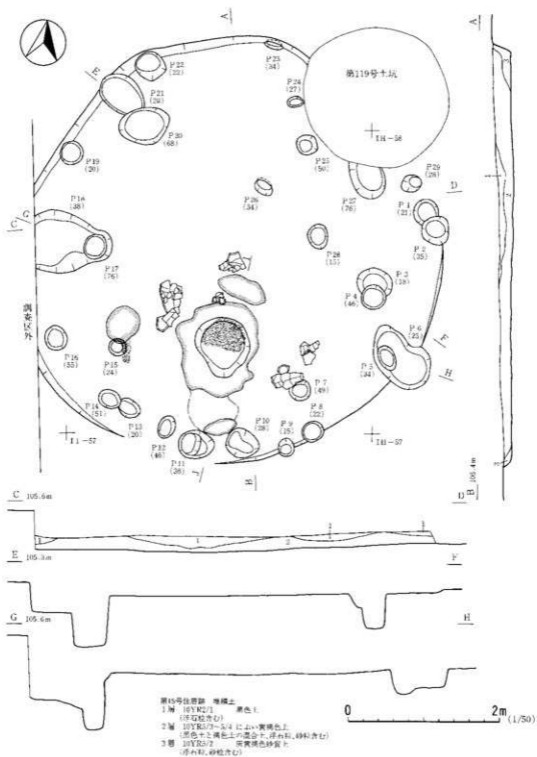
【壁】 壁の遺存状態は悪く、北壁から西壁にかけて約30cm程の高さで残っている。南側は最高10cm程が部分的に残っているだけである。町道建設の際に、大きく削平を受けたと思われる。

【床面】 床面はほとんど平坦である。炉周辺から住居中央にかけて、やや硬く締まっているように感じられたが、範囲を捉えるまでには至らなかった。

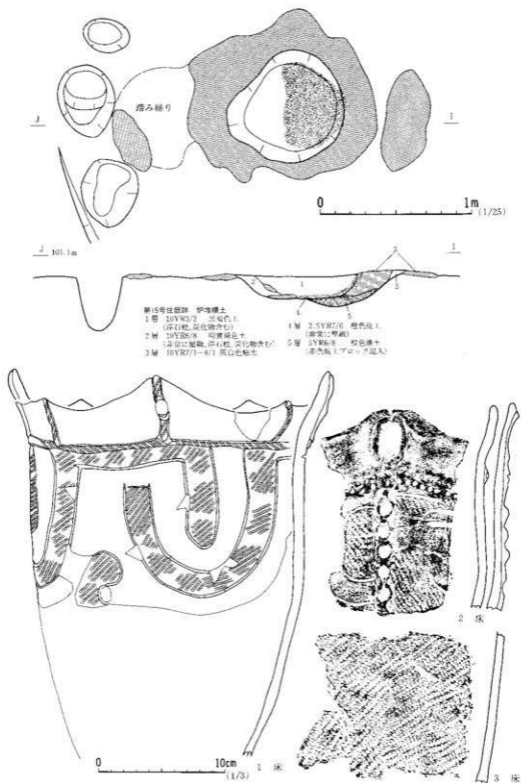
【柱穴】 本住居内からは、29個の小穴を検出した。小穴の径は、大きいものでP6、P18の100cmからP20、P21の80cmまでである。小さいものでは20cm～25cm程である。深さは最大76cm、浅いもので15cmである。これらのうち、配置と深さから柱穴として機能したと考えられるものは、P1、P4、P5、P7、P8、P11、P14、P15、P16、P17、P19、P20、P22、P23、P29があげられる。炉の南北を中軸線に、P27とP20、P4とP17、P8とP14、P11とP23は対象に配置されているほか、周壁直下のものについてもある程度、規則的な間隔で作られている様に見受けられる。

【炉】 住居南側に偏在して作られてある。精査最後の断割りによって、炉が重複していることを確認した。新炉は、長軸約90cm、深さ約15cmの不整円形に掘り込んだもので、炉の周辺に白色粘土が20cm～50cmの幅で貼られている。おそらく白色粘土は周堤状に盛り上がっていたものと考えられる。焼成は、炉中央から北側に強く、貼付された粘土の4～5cmまで及んでいる。旧炉は、炉断面図（第50図）堆積土5層にあたる。新炉の北側に貼付された、白色粘土の直下に厚さ10cm程で強く焼成した痕跡が確認されたことから判断した。旧炉の規模については、この時点で、さらに、第145号土坑と重複していることが判明したため調査の時間的都合により掘りとはしてしまっただけ不明である。また、新炉の南側に50cm×80cmの規模で、硬く踏みしめられた範囲がある。

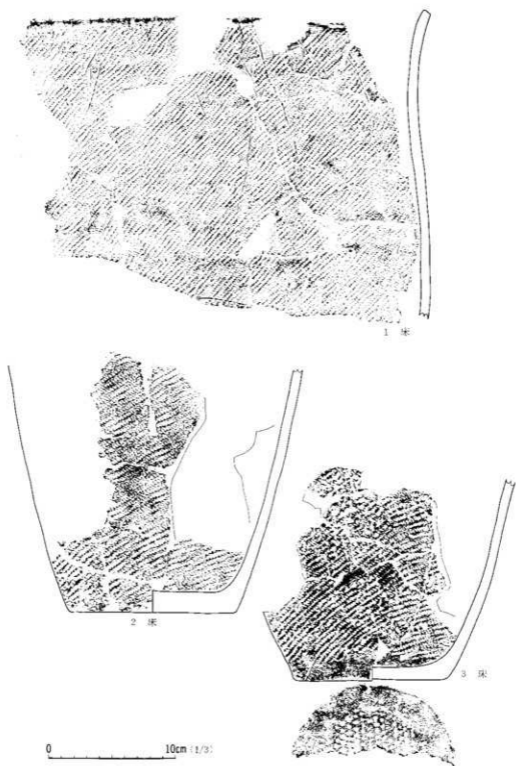
【その他の施設】 住居南側の壁直下に、小穴が密に作られてある。このP8からP14までの間にある、P9、P10、P12、P13は他の柱穴と考えられるものより間隔が狭く、断言できな



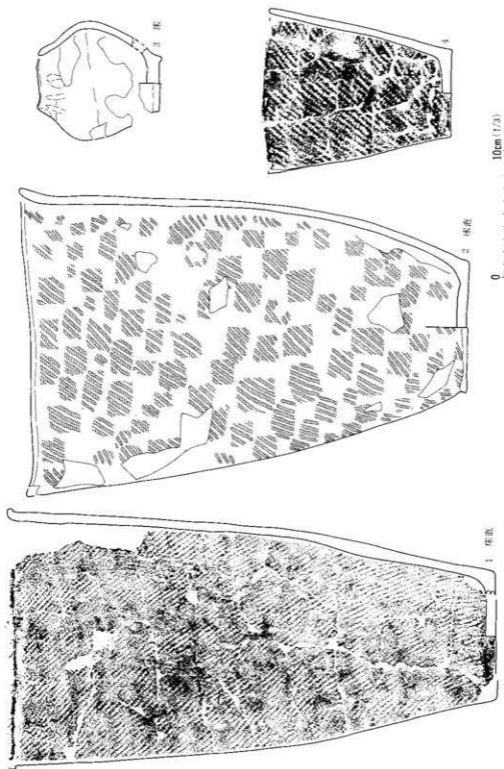
第49图 第15号住居跡



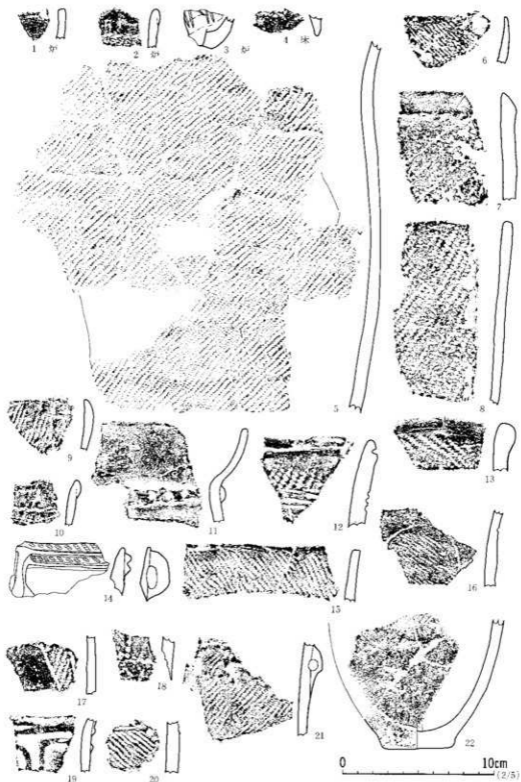
第50図 第15号住居跡 炉・出土遺物(1)



第51图 第15号住居跡 出土遺物2)



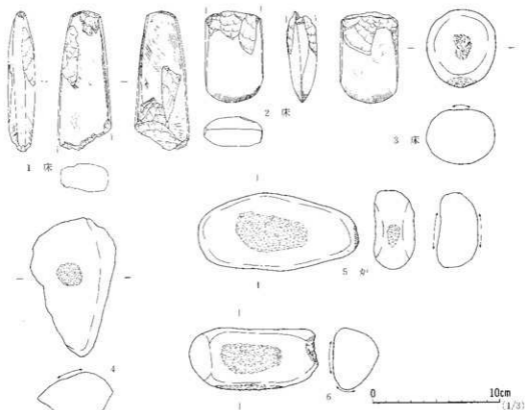
第52圖 第15号住居跡 出土遺物3



第53图 第15号住居跡 出土遺物(4)



第54图 第15号住居跡 出土遺物(5)

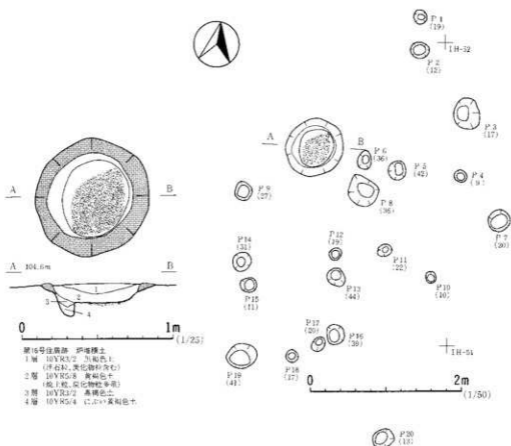


第55図 第15号住居跡 出土遺物(6)

いが出入口等の施設があった可能性がある。このほか、新炉の北側に30cm×80cm、南側に20cm×50cmの範囲で硬く白色粘土張られている。P15の上面では、50cm×55cmの範囲で白色粘土と焼土を検出したが、これらの性格については不明である。

【出土遺物】(第50図～55図) 総数およそ600点の土器、石器類が出土した。本住居検出時には、プランの外から、十数点の遺物が出土しただけである。薄い堆積土中に、遺物が散在していた。床面及び床面直上の遺物は、炉の周辺と、住居西側のP15からP17の間と北側のP23からP25の間に集中して見られた。第50図1は、口頭部と波状口縁の頂部から垂下する隆帯を有し、胴部上半には磨消しによるG字状文、胴部中央に波頭文をもつ。波頭文のくびれの部分には、鱗状隆帯をもつ。同図2は、波状口縁の頂部に刻みを有し、口縁部には縄の押捺で縁取られた楕円形隆帯を有する。口頭部隆帯上に連続した刻み、その直上に連続刺突が施される。胴部上半は垂下する隆帯で区画されている様で、隆帯上には指頭圧痕状の大きな刻みがほどこされる。沈線を施文後に縄文が充填される。

【小結】 周堤炉有する住居で、炉の作り替えが行われている。周辺を含めた遺物出土状況から、住居埋没段階で廃棄場とされていると考えられる。その時期は、床面及び堆積内遺物から縄文時代後期初頭の範囲で促えられる。(小田川)



第56図 第16号住居跡・同炉

第16号住居跡 (第56図)

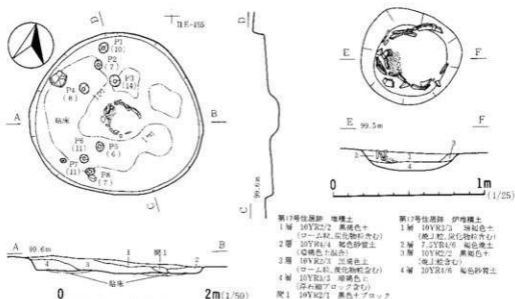
【位置と確認】 調査A区IH-51グリッドに位置する。北側には、多くの住居及び土坑が存在するが、南側にはおよそ70m程遺構は存在せず、遺構密集範囲の南端に位置する。町道の付け替え作業を行った際に、多数の小穴と共に炉を検出した。

【平面形・規模】 町道建設の際に大きく削平されたと思われる。近接する調査区境界壁面にも住居の痕跡を確認することができないため、規模は不明である。

【床面・柱穴】 炉の周辺に若干の踏み締まりが観察できたが範囲の特定はできなかった。総数20個の小穴を検出した。柱穴を特定することはできない。

【炉】 ロームのIV a層を、直径約90cmの浅い円形に掘り込んだもので、炉の周辺に白色粘土が15cm～20cmの幅で貼られている。焼成は強く、炉底となるローム下の約5cmまで及んでいる。

【小結】 周辺には、同様に削平を受けたと考えられる住居跡が多く、炉とその周囲の小穴の在り方から住居跡と判断した。遺構に伴う遺物は無く時期は不明であるが、第15号住居跡の炉は本炉とほとんど同じ作りであることから、同様な時期と考える。 (増尾)



第57図 第17号住居跡・同炉

第17号住居跡 (第57図)

【位置と確認】 調査D区ⅡE-154グリッドに位置する。本遺構の西側に、第131号溝状土坑が近接する。南側には第18号住居跡がある。第Ⅳa層面で円形のプランで検出した。

【平面形・規模】 直径2.5m程のほぼ円形である。規模的に小型の住居である。

【堆積土】 住居内堆積土は4層に分けられる。全体に黒褐色土を主体にし、ロームと炭化物を多く混合する。自然堆積か人為堆積か判断しかねる。

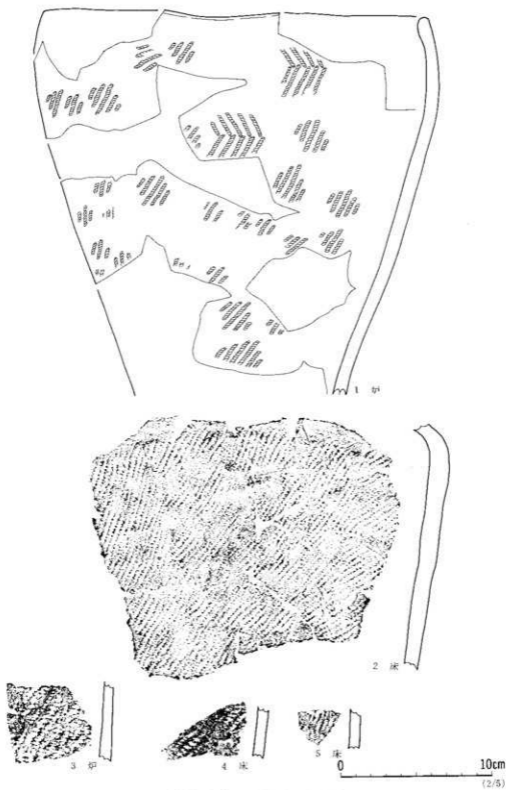
【壁・床面】 周壁は、およそ10cm～20cmの高さをもち、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は、やや起伏があり、炉の周囲と周壁直下を除き帯状に貼床が敷設されている。

【柱穴】 住居内から、8個の小穴を検出した。規模は5cmから15cm程のほぼ円形で、深さは7cmから14cmと浅い。支柱穴を特定することはできない。

【炉】 土器片囲炉で、住居のほぼ中央に作られてある。大きき約70cm、深さ約20cmの円形の掘形をもち、掘りあげた後に砂質土で8cm程の厚さで埋めている。その後、割られた土器片をコの字状に二重に敷設している。土器は同一個体である。焼成は弱く、小範囲で認められた。

【出土遺物】 (第58図) 炉敷設土器を含め、5点と極めて少ない。すべて床面から出土したもので、粗製の胴部破片である。第58図1は、炉に使用されていたもので、頸部から口縁部が内湾する。同図2は、北西壁直下より出土したもので、頸部が強く屈曲するものである。

【小結】 本住居跡は、土器片囲炉を有する小型住居である。住居の構築時期は、炉に使用されていた土器および床面出土土器から、縄文時代後期初頭に比定される。(小田川)



第58图 第17号住居跡 出土遺物

第18号住居跡（第59・60図）

【位置と確認】 調査D区ⅡF、ⅡG-151、152グリッドにまたがって位置する。北側に第17号住居跡のほか、溝状土坑が作られてあるが概して遺構は少ない。本遺構の上には、町道が通っていたが、破壊からは免れている。第IV層のローム上面で方形のプランで検出した。プランの南側、第Ⅱ層中から土師器片が集中して出土していたことから、当初は平安期の竪穴を想定していた。

【平面形・規模】 北西方向に長軸をとる、約6.8m×5.8mの隅丸方形である。

【堆積土】 住居内堆積土は2層に分けられる。1層は黒褐色土でローム粒が多い。2層は暗褐色土で、多量の炭化物和下位からは炭化材が散在して出土することから焼失家屋と考えられる。土層そのものについては、自然堆積と考えている。

【壁】 検出面から床面までの深さは、40cm～50cm程で、壁の立ち上がりは南東側から南側にかけて緩やかである。壁高は、北東壁30cm、南東壁35cm、北西壁45cm、南西壁50cmである。

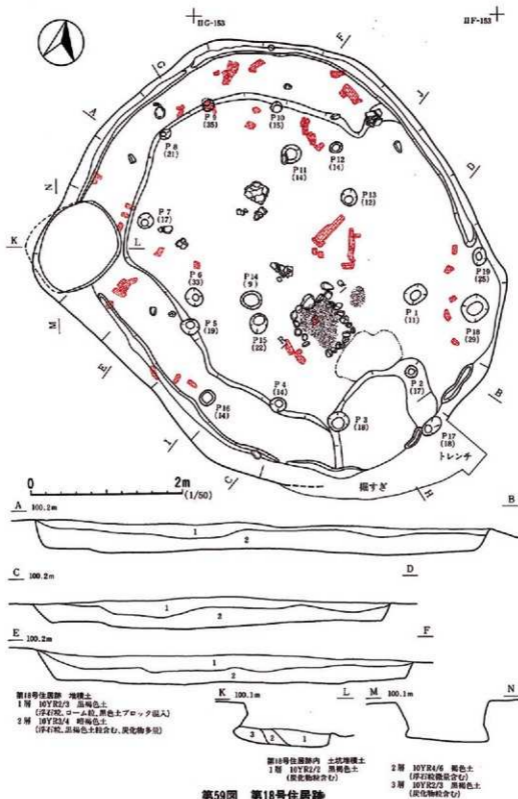
【床面】 床面は、段状施設を有する二段構造となっている。段状施設は、北東壁のほぼ中央から南東壁のP3の部分まで、壁際から70cm～50cmの幅をもってC字状に作られてある。炉を含む内部の床面は、段状施設から緩やかな傾斜で8cm～10cm程低く作られている。段状施設は、おおむね平坦で、内部にやや起伏が認められる。特別、硬度の差は認められない。

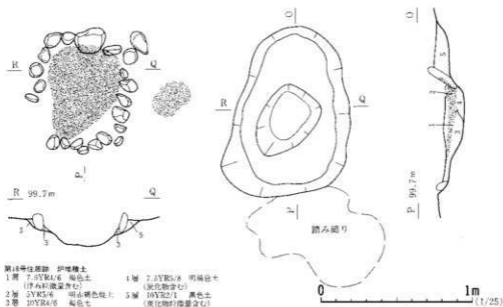
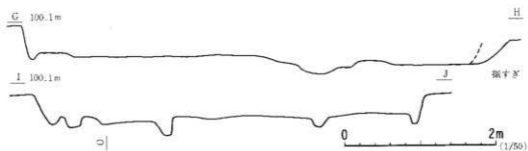
【周溝】 周壁直下に、約10cm～20cmの幅で溝が巡る。深さは、10cm程である。南西と北東のコーナ部分で途切れるほか、南東側では部分的に作られてある。

【柱穴】 住居内から、19個の小穴を検出した。小穴の形状は円形及び楕円形で、径は最大40cm～15cmである。深さは、35cm～9cmで、住居の大きさと比べ浅い。このうち、柱穴として機能したと考えられるものは、P1～P10とP13である。これらは、およそ八角形に形成され、炉の長軸を中心に対象に配置されている。

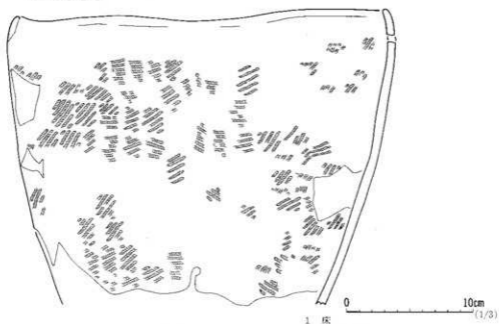
【炉】 石囲炉であり、住居中央よりやや南東寄りに作られてある。床面を、大小二段の不整形楕円状に掘り込んだ、掘形内部に21個の礫をほぼ方形に配置して、褐色土と黒色土（炉堆積土3層と5層）で止めている。一部、礫が途切れているが、抜き取りの痕跡は認められず、意図的に間をあけているものと考えられる。用いられる礫は、12cm～5cm大の円礫であるが、北西辺の炉中軸上にある1点だけ、大きめな扁平は礫を用いている。焼成面は、炉堆積土の3層及び4層上面であり、掘形を一度埋め戻してから使用している。焼土層も厚く、中央の礫も強く被熱している。炉の南東側床面は、約60cm×1mの範囲で硬く踏み締まっている。

【その他の施設】 住居南西コーナーに、土坑が作られている。大きさは、約1.3m×1.4mで、深さは、床面から約20cmである。貯蔵穴等の可能性が考えられる。ほかに、南東壁際の段状施設が切れるところに、浅く不整形に掘り窪まれた部分がある。炉との間に踏み締まりがあり、

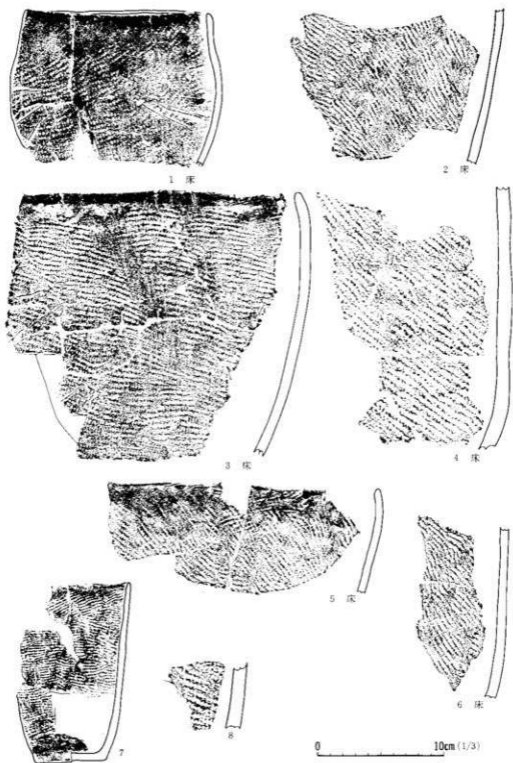




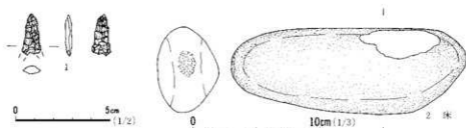
- 第18号住居跡 炉跡出土
- | | |
|--------------------------------|------------------------------|
| 1層 7.5YR5/6 褐色土
(浮灰・炭屑含む) | 4層 7.5YR5/8 明褐色土
(炭化物含む) |
| 2層 5YR5/6 明赤褐色土 | 5層 10YR2/1 黒色土
(炭化物・炭屑含む) |
| 3層 10YR4/6 褐色土
(粘土和、炭化物粒含む) | |



第60図(下) 第18号住居跡 炉・出土遺物(1)



第61图 第18号住居跡 出土遺物(2)



第62図 第18号住居跡 出土遺物3)

他の住居の様な炉の前庭部とは考えにくい。それ以外の機能を想定したい。

【出土遺物】 (第60図～62図) 本住居から出土した遺物は、総数30点と少ない。ほとんどが床面出土で、土器は縄文だけの粗製土器である。口縁部が内湾するものが多く、縄文施文後に、口縁だけ磨り消す特徴を有する。縄文原体は、0段多条の単節L.R、単節R.Lで、斜めおよび縦回される。施文そのものは雑である。

【小結】 本遺構は、石囲炉を有する床面二段構造の住居である。堆積土内の炭化材の出土から焼失家屋と判断される。構築及び廃絶は、出土遺物から縄文時代中期末葉から後期初頭に比定される。

(小田川)

第19号住居跡 (第63図)

【位置と確認】 調査D区ⅡA・B-140・141グリッドにまたがって位置する。本遺構の西側には、第132号土坑と第133号土坑があるが、周囲には、比較的遺構は少ない。第Ⅳa層上面で不整な円形のプランで検出した。東側の調査区外へ延びているが、町道を付け替えてできなかったため、拡張して調査を行えなかった。

【平面形・規模】 全体形は不明であるが、検出した部分から推定すると、不整な円形ないし楕円形になると思われる。推定される径は、5m～6mである。

【堆積土】 住居内堆積土は4層に分けられる。1層は黄褐色のロームで廃棄土である。3層もロームと黒色土を混合し1層と同様な廃棄土と考えられる。2層については判然としなが、自然堆積と考えておく。

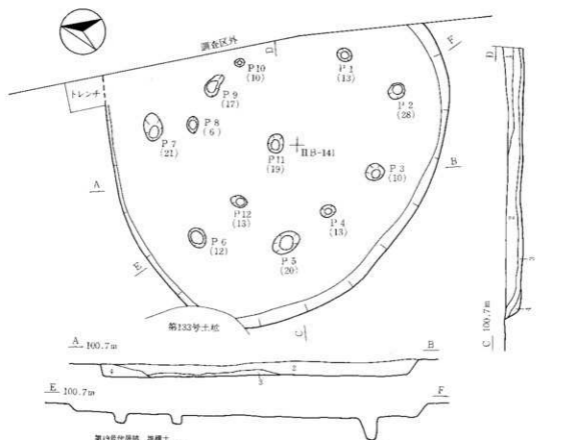
【壁・床面】 壁高は、北壁で20cm、南壁で25cm、西壁で20cm程である。床面はほとんど平坦である。特に硬化は認められない。

【柱穴】 住居内から、12個の小穴を検出した。ほぼ楕円形で、規模は径が20cm～40cm、深さは、10cm～28cmである。柱穴としては、P2～P7までが該当するものと考えられる。

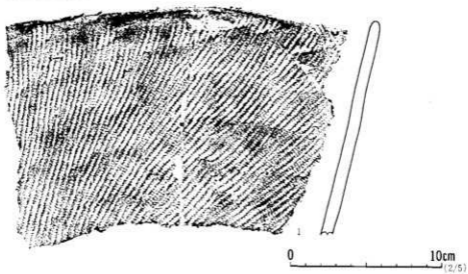
【炉】 住居内に炉は存在しない。

【出土遺物】 (第63図1) 堆積土内より1点出土した。

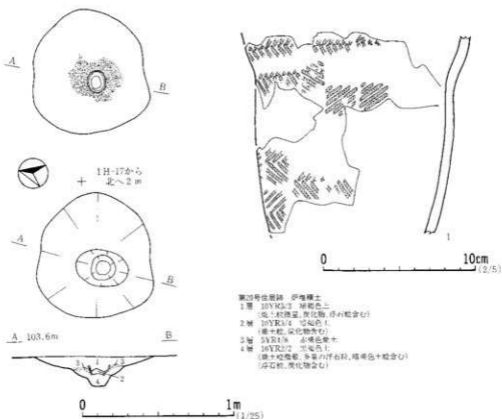
【小結】 炉を検出できなかったが、小穴及び規模から住居跡とした。堆積土から、埋められているものと判断され、時期的には縄文時代中期末葉～後期初頭のものとする。(小田川)



- 第19号住居跡 堆積土
- 1層 10YR5/6 黄褐色土
 - (砂・砂殻・黒褐色土粒混在)
 - 2層 10YR2/3 黄褐色土
 - (炭化物・磁器片混在)
 - 3層 10YR5/4 黄褐色土
 - (黒褐色土粒混在)
 - 4層 10YR4/4 褐色土



第63図 第19号住居跡・出土遺物



第64図 第20号住居跡 炉・埋設土器

第20号住居跡 (第64図)

【位置と確認】 調査A区IH-17グリッドに位置する。東側に第6号土坑と小土坑B列がある。調査終盤時の町道付替により、町道直下で検出した。暗褐色の不整なプランであり、規模的に土坑として捉えたが、精査により、削平された住居の炉だけが遺存したものと判断した。

【平面形・規模等】 柱穴や掘形等の痕跡をまったく確認できなかったため不明である。

【炉】 第V層のロームを、大きさ約85cm程、深さ8cm程の浅く不整な円形に掘り込み、さらに、底面のほぼ中央を12cm程の深さで、大小二段に掘り込んでいる。断面形が、階段状に掘られた掘形の中位には、土器が埋設されている。埋設される土器は、堆積土4層目で止められている。土層断面から、土器の設置するために埋めた4層上面を炉底として使用している。炉底は、焼成により堅緻で、3層の焼土は5cmの厚さで確認された。

【出土遺物】 炉に埋設された土器だけである。口縁部と底部が割られている。円筒上層式期のもので、胴部径は15cmである。

【小結】 遺構の造りから炉と判断する。削平により住居そのものは破壊されたものとする。炉の時期は、埋設土器から円筒上層式期に比定される。(小田川)

第2節 土坑

概要

本調査で検出された土坑は、総数137基である。土坑番号は検出順に付けたが、精査時に攪乱と判断されたものも多く、これらの土坑番号については欠番とした。欠番としたものは、番号5・21・60・67・70・71・72・73・74・87・117・143・144の13基である。また、精査途中に重複と判明したが、同時に掘り上げてしまったものには、同一番号にa・bと付して分けた。

本節では、竪穴住居跡以外の意図して作られた穴について、平面形及び断面形状、規模の大小、特異な配列をなすもの等から、フラスコ状土坑・土坑墓・溝状土坑・小土坑列・これらに属さない土坑に分けて記述する。上記の土坑名称については、形態・遺物出土状況等から一般に用いられている名称を使用した。

土坑内出土遺物については、上記の各土坑別に分けて一括して掲載した。

1) フラスコ状土坑

フラスコ状土坑は、総数38基検出した。調査D区で検出された2基を除き、他は調査A区とB区に作られてある。調査A区のグリッド52から調査B区のグリッド71までの範囲に集中している。特に調査B区のもの規模も大型で、フラスコ状土坑群を形成している。しかし、一定の範囲に集中して作られているものの、フラスコ状土坑自体の重複はほとんど見られない。これに対して、調査A区南半部のフラスコ状土坑は、ほぼ同位置に重複して作られていることが留意される。

以下に、各フラスコ状土坑について報告する。

第1号フラスコ状土坑 (第65図)

調査A区南I F-10グリッドに位置する。規模は、開口部が1.93m×1.7m、底面が2.15×2.10m、深さ1.06mである。平面は不整な円形で、開口部位置より底面が北側にずれている。

堆積土は7層に分けられる。第3層から7層まではロームのブロックを多量に含んでおり、人為堆積の様相が強い。第1、2層は自然堆積と思われる。遺物は、第2層中より縄文時代中期末から後期に比定される土器片が出土した。

第9a号フラスコ状土坑 (第65図)

調査A区I I・J-11グリッドに位置する。町道の西側に半円状のプランで検出し、町道撤去後の精査時に、西側の壁の状態から重複しているものと判断し、第9a号、第9b号に分けた。開口部の規模は、第9b号との重複により判然としませんが、およそ1.65m×1.50m、底面

は2.65m×2.3m、深さ1.18mである。底面は東西に長い楕円形である。土層観察より、第9b号フラスコ状土坑より新しと判断されるが、第106b号フラスコ状土坑との関係は不明である。

堆積土は9層に分けられる。第1、2、4層と第9層は自然堆積土と思われる。第3層及び第5層から第8層は、周壁の崩落土と黒色土の混合したもので、自然か人為か判断しかねる。遺物は、堆積土上位より円筒上層式に比定されるものが数点出土した。

第9b号フラスコ状土坑 (第65図)

調査A区I J-11グリッドに位置する。第9a号フラスコ状土坑と重複し、本遺構の東側は大きく破壊されている。規模については不明である。前述のとおり、第9a号フラスコ状土坑精査時に第9a号の西側壁に段差を確認し、底面周縁にも歪みが認められることから二つのフラスコ状土坑の重複と判断した。第9a号フラスコ状土坑より浅い作りで、規模も小さいものと思われる。残存する堆積土は4層に分層できた。遺物は出土しなかった。

第24号フラスコ状土坑 (第65図)

調査A区I E-23・24グリッドに位置する。調査区外へ伸びるため断定はできないが、検出した部分から推定される規模は、開口部1.9m×0.90m、底面1.45m×0.75m、深さは第IVa層上面から1.14mある。平面形は隅丸方形と推察される。

堆積土は10層に分けられる。3層以下は堆積土内にローム及び基本層第IV層相当の土がブロック状に混入することから人為的堆積と判断した。遺物は出土しなかった。

第26号フラスコ状土坑 (第66図)

調査A区I E・F-25・26グリッドに跨って位置する。規模は、開口部2.40m×2m、底面2.60m×2.25mで、深さは1.60mある。平面形は、開口部と底面共に楕円形である。断面形はくノ字のフラスコ状であるが、北側の屈曲する部分でさらにオーバーハングする段を有する。東側の中段にも同様な袂を持つ。

堆積土は9層に分けられた。全層を通じて第IV層の黄褐色ロームを含んでいるほか、黄褐色粘土塊が底面に投げ込まれた様に堆積しており、人為堆積と考えられる。土層面からは、第1層の堆積の状態が不自然に感じられ、本遺構埋没後、新たに土坑が作られた可能性も考えられるが確認は得られなかった。第1層から4層までの堆積土中から、椀林式と最花式に比定される多数の土器片と石器類が出土した。

第53号フラスコ状土坑 (第66図)

調査A区I F・G-55・56グリッドに位置する。第IV層面に、黒褐色と暗褐色のドーナツ状のプランで検出した。規模は、開口部が2.50m×2.30m、底面が2.30m×2.20mと底面径がやや小さい。深さは1.90mある。平面形は不整な円形で、底面は開口部より東側に僅かにずれている。

堆積土は18層に分けられた。第1層は、第VI層起源のロームで廃棄土である。他に第5層以下の層中、6層と11層も廃棄土と考えられる。5層、7層、9層、10層、14層、15層は壁の崩落土と判断されるほか、5層以下の堆積土には周壁と同質のロームがブロックで混入するが、自然崩落での混入なのか人為作用によるものか判断しかねる。第2、3層は自然堆積土と判断される。壁の立ち上がりは湾曲したピーカー状であるが、壁が崩落した結果であり、本来は断面形状がくの字状に強く屈曲したものであった可能性がある。遺物は、第2層中と底面から縄文時代中期に比定される土器片が出土した。

第54号フラスコ状土坑（第67図）

調査A区IG-56グリッドに位置する。第IV層面に円形のプランで検出した。規模は、開口部と底面がほぼ同じ、2.10m×2m程のほぼ円形である。深さは1.70m程で、底面は底開口部よりやや北西にずれている。底部に深さ8cm程の不整形な掘込みが認められた。開口部の南側を、第92号フラスコ状土坑と重複しているが、新旧は不明である。

堆積土は、15層に分けられる。第1層から3層までは、自然堆積土。第4層は崩落土と考えられる。第5層以下は、黄褐色粘土がブロックで混入することから、壁の崩落土ないし人為的堆積と判断した。遺物は、出土しなかった。

第55号フラスコ状土坑（第67図）

調査A区IG・H-61グリッドに跨って位置する。規模は、開口部が2.10m×1.95m、底面は1.80m×1.70mの不整な円形で、深さはおよそ2mある。中段の南東壁に、突出するように掘り込まれた部分がある。

堆積土は9層に分けられた。第1層は黄褐色の浮石ブロック層で廃棄土である。第7層以下は、自然堆積土と判断されるが、第2層から6層までは自然堆積か人為堆積か判断しかねる。遺物は、堆積土中より縄文時代中期末葉に比定される波状口縁を有する土器が出土した。

第56号フラスコ状土坑（第67図）

調査A区IF・G-54グリッドに位置する。第10号住居跡と重複しており、本遺構が新しい。規模は、開口部が1.60m×1.50mの円形、底面がほぼ2mの不整な円形である。深さはおよそ1.40mで、断面形は台形状である。

堆積土は9層に分けられる。第1層から第6層まで自然堆積土、第7層以下は人為堆積土と判断される。遺物は、堆積土中より縄文時代後期初頭に比定される土器片と、台石の破片が出土した。

第57号フラスコ状土坑（第68図）

調査A区IF・G-54・55グリッドに位置する。第10号住居跡の北西隅に作られており、本遺構が古い。規模は、開口部が1.95m×1.40m、底面2.50m×2mの、南北方向に長いほぼ楕

円形である。深さは、第10号住居跡床面から約1mある。

堆積土は12層に分層した。第2層以下は、ロームをブロック状に含む人為堆積土と判断される。遺物は出土しなかった。

第58号プラスチック状土坑（第68図）

調査A区IG-57グリッドに位置する。第IV層面に小型な円形のプランで検出した。規模は、開口部が1.10m×1m、底面は2.70m×2.55mであり、深さは約1.70mある。開口部に比べ底面が極端に大きく、最狭部と底部の直径比は1：5ある。

堆積土は13層に分けられる。第2層以下にはロームの細ブロックと地山浮石を混入させた土が主体であり、人為堆積土と思われる。第3層は壁が崩落したブロックで、第4層、5層も崩落土と判断される。第1層についても人為堆積の可能性が強い。遺物は出土しなかった。

第59号プラスチック状土坑（第66図）

調査A区IF-57グリッドに位置する。暗褐色の不整な楕円形プランで検出し、土層断面で重複していることを確認した。当初のプランを第52号土坑とし、オーバーハングして掘り込まれているものを本遺構とした。本遺構は、第52号土坑により大きく破壊されており、底面と北側の周壁だけが遺存していた。規模は、底面が2.70m×2.50mのほぼ円形である。開口部については不明であるが、第52号土坑の北壁の一部にその痕跡が伺える。深さは1.45mある。

堆積土は9層に分けられる。第3層のぶい黄褐色粘土と第7層の明褐色の浮石土は廃棄土であるほか、各層にロームのブロックを含んでいることから、人為堆積土判断される。遺物は出土しなかった。

第61号プラスチック状土坑（第74図）

調査A区IF-53グリッドに位置する。規模は、開口部が1.10m×0.80m、底面が0.90m×0.75mあり、共に隅丸長方形である。深さは0.60mで、断面は緩いくの字状である。

堆積土は7層に分けられる。第4・7層は砂質土としたが、中稜浮石の可能性がある。全体に褐色土を主体にした上で、堆積状況から人為堆積の可能性が強い。断面形状にオーバーハングが認められることからプラスチック状土坑としたが、明らかに他のものとは形状で異なり、開口部、底面、深さとも小規模で、土坑墓またはその他の土坑の範疇に属する可能性も考えられる。遺物は出土しなかった。

第75号プラスチック状土坑（第68図）

調査B区IJ・K-65グリッドに位置する。本遺構の3分の1程は、西側調査区外へ延びているため全体形は明確にできないが、検出した部分から開口部と底面共にほぼ楕円形になると推察される。開口部に最大幅を有し、最小幅は開口部直下にみられる。規模は検出下部分で、開口部がおよそ2.8m×2.6m、底面が2.6m×2m、深さは第IV層上面から2.15mある。

堆積土は13層に分けられる。第6層、11層、12層は壁の崩落土の可能性があるほか、第1層を除き、すべて人為堆積と判断する。遺物は、堆積土中より縄文時代中期に比定される土器片と、台石に使われたと思われる礫石器が出土した。

第76号フラスコ状土坑（第69図）

調査B区I J・K-67グリッドに位置する。第IV a層上面で黒色土の円形プランで検出した。規模は、開口部が2.40m×2.25mの円形、底面が3.45m×2.80mの東西に長い楕円形である。深さは、2.30mある。壁は、底部からほぼ垂直に60cm～70cm程立ち上がった後、急角度に内反し、開口部に向けて外反する。

堆積土は、20層に分けられる。第7層以下は、第IV層のロームを主体にした土で、黒色土および黒褐色土の薄層と交互に堆積する。第5層は、第IV層の大きなローム塊で厚さは50cmを越える。周壁に崩れはなく廃棄された土と判断する。この第5層と第7層の層理面に黒色土の堆積が見られないことから、第5層以下の土は人為に廃棄されたものと考えている。第6層は、第5層の塊の隙間に流れ込んだ土であるが、人為か自然作用によるものか判断しかねる。第1層から4層までの土についても明確にできない。遺物は、堆積土1層中より礫石器が1点出土した。

第77号フラスコ状土坑（第69図）

調査B区I I・J-70・71グリッドに位置する。規模は、開口部が2.60m×2.50mの不整形円形、底面が2.35×1.95mのほぼ楕円形である。深さは1.60mある。

堆積土は9層に分けられる。第2層以下の層中、第3層は第IV層の褐色土で壁の崩落土の可能性があり、第7層、8層は第V層のロームで廃棄の土である。他の層もロームの混入が目立つことから人為的堆積と思われ、壁を崩しながら埋めた可能性がある。遺物は出土しなかった。

第78号フラスコ状土坑（第69図）

調査B区I J・K-68・69グリッドに位置する。規模は、開口部が2.90m×2.60m、底面が3.10m×3mと、共にほぼ円形である。深さは2.10mある。東側の壁面中位に、幅50cm、長さ40cm程の横穴が掘られてあるが性格については不明である。

堆積土は18層に分けられる。第2層は、第V層の浮石塊で廃棄の土と判断される。第10層以下は、第V、VI層のロームを主体とした土で、廃棄土と考える。第5層、6層、9層は壁際から流れる様に入り込んでおり、壁の崩落土と思われる。また、第4層中には中礫浮石粒と炭化物の混入がみられるが、自然堆積の状態を示しており、上位の人為堆積層と下位の人為堆積層の間に時間差があったものと考えている。遺物出土しなかった。

第82号フラスコ状土坑（第70図）

調査A区I G・H-60・61グリッドに位置する。当初、町道との境に褐色土の不整なプラン

で検出し、擾乱と判断したが、道路の付け替えによって町道下部分が遺存していたことが判明した。底部からの立ち上がりが若干オーバーハングしていることからフラスコ状土坑として扱った。遺存している部分で、開口部径が2.45m、底面径が約2mある。深さは約1mである。平面形は共に円形であったと思われる。

堆積土は4層に分けられる。第2層以下に、第IV相当の褐色土と第VI層ロームをブロック状に含むことから人為的堆積と判断する。遺物は出土しなかった。

第83号フラスコ状土坑（第70図）

調査B区IH・I-68グリッドに位置する。第IV層上面で検出した。開口部北側の一部が擾乱によって破壊されている。規模は、開口部で1.70m×1.60mのほぼ円形、底面は2.50m×2.15mの南北に長い楕円形である。深さは1.55mある。

堆積土は8層に分けられる。第1層としたものは、第VI層起源のロームで、厚さは1mをこえる。蓋をするような状態で一気に埋められている。最下層の第8層は、土質から自然堆積の可能性もあるが、他はすべて人為堆積と判断される。遺物は出土しなかった。

第86号フラスコ状土坑（第70図）

調査B区IH・I-66グリッドに位置する。規模は、開口部が1.90m×1.70m、底面が3.20m×3mでともに平面形は不整形である。深さは1.65m程である。

堆積土は8層に分けられる。第3層、6層、8層は明褐色のロームでほぼ板状の塊であり、本遺構の北西側部分だけに見られた。おそらく壁の崩落したもので、断面形で、頸部にあたる部分の形状が異なっているのは、このためと考えられる。第1層から5層までは、褐色土を主体にした土層で、分層したがかなり近似した土である。人為堆積と考える。第7層は、第VI層のロームをブロック状に含んでおり、人為堆積と思われる。最下層の第9層についても、層厚から人為によるものと考えている。遺物は出土しなかった。

第88号フラスコ状土坑（第71図）

調査B区II・J-69・70グリッドに跨って位置する。町道部分にあり、道路の付け替えができず全体を把握する事ができなかった。規模は検出した部分だけで、開口部径が3.70m、底部径が3.15m、深さは2.20mある。平面形は、共に円形になるものと思われる。

堆積土は11層に分けられる。第1層は廃棄土で、第V層の明黄褐色のローム土が最大60の厚さで埋められている。第2層は、黒褐色土中に第IV層のローム土が砕けた状態で混入しており、第1層と同様に廃棄と考える。下位の第10層、11層は土質から自然堆積と判断した。第9層は、明黄褐色土中に第1層白色粘質土が極めて薄い層で、互層をなすように堆積していた。周壁の崩落と考えている。第3層、5層、7層は壁の崩落土と流入土の混合土と考えている。遺物は、堆積土第2層中より粗製土器の破片と礫石器が出土した。

第89号フラスコ状土坑 (第71図)

調査B区 I J・K-70 グリッドに位置する。町道境界のIV層面で、半円状のプランで検出した。調査区を拡張し掘り下げたが、指示不足により開口部の大部分を掘りとはしてしまっただ。規模は、底面が2.50m×2.30mのほぼ円形。深さは約2mある。開口部もプランからほぼ円形であったものと思われる。

堆積土は16層に分けられる。第2層と3層はかなり近似した層であり、第V層の廃棄土である。第7層以下の層は、周壁となる第VI層の薄層と黒褐色を主体にした土が、各層中に互層に入り込んでいる。自然作用によるものか、人為的ものか判断しかねる。遺物は出土しなかった。

第90号フラスコ状土坑 (第72図)

調査B区 I I・J-65・66グリッドに跨って位置する。本遺構は、第112号土坑、第127号土坑、第128号土坑と重複しており、第112号土坑より古い、他の2基の土坑との関係は捉えることができなかった。規模は、開口部が4.00m×3.90m、底面が3.90m×3.60m、深さは2.20mある最大規模の土坑である。平面形は、共に不整な円形で、底面の北東側は歪んでいる。また、北側の底面から15cm程上の壁に、30cm程の横穴が掘られてある。

堆積土は17層に分けられる。褐色土を主体にした土と、第IV層及び第V層起源の土に大別される。第3層の黄褐色土は、層厚はないが廃棄土と考える。第7層以下の層のうち、壁際から流れ込むように入り込んでいる土は、周壁の基本層と同質の土であり、中央部に堆積している土が薄層で部分的に鋸歯状に入り込んでいる。これらが、自然作用によるものか、人為的ものか判断しかねる。最下層の第17層は、初期堆積土と思われるほか、第5層、6層も自然堆積と考える。第4層からは、多数の遺物が出土しており人為堆積の可能性はある。

遺物は、第4層から榎林式期に比定されるの土器と礫石器が出土した。

第92号フラスコ状土坑 (第67図)

調査A区 I G・H-56グリッドに位置する。町道撤去後に、第IV層面で検出した。第54号フラスコ状土坑と北側の部分が重複しているが、新旧関係は不明である。道路建設の際に削平されたものか、開口部は、南側部分だけが遺存している。規模は、底面が2m×1.95mのほぼ円形で、深さは1.40mある。

堆積土は11層に分けられる。第1層から第5層までは、黒褐色土を主体にした土で、第V層起源の浮石粒を多量に含む。人為堆積か自然堆積か判断しかねる。第6層から第10層までは、第V層のロームが砕けたブロック状に堆積している。人為堆積の可能性はある。堆積土上部より数点の土器が出土した。

第102号フラスコ状土坑 (第71図)

調査A区 I F・G-30・31グリッドに位置する。規模は、開口部が2.40m×2.10m、底面が

2.20×1.80mでともに不整な楕円形である。深さは1.50mある。

堆積土は6層に分けられる。第4層以下に基本層第IV、VI層の褐色土とロームをブロック状ないしは綺状に堆積される。人為堆積の可能性がある。第1層から3層までは、自然堆積か人為堆積か明確にできない。遺物は出土しなかった。

第104a号フラスコ状土坑（第73図）

調査A区IH-14グリッドに位置する。町道撤去後、第V層面で暗褐色の不整なプランで検出した。土層面観察によって、重複しているものと判断し、第104a号と第104b号に分けた。本遺構は、道路建設の際に大きく削平されたと思われる、底面付近だけが遺存している。規模は、底面径が2.20m×2m程のほぼ円形である。深さは、検出面から約40cm程である。底面は西側に傾斜している。

堆積土は4層に分けられる。第2層は、第V層のロームの黒色土が斑に混入する。人為堆積と判断する。遺物は出土しなかった。

第104b号フラスコ状土坑（第73図）

調査A区IH-14グリッドに位置する。第104a号フラスコ状土坑と重複し、本遺構の上部は破壊されており、底面付近だけが遺存している。規模は、底面径が2.40m×2.30m程のほぼ円形である。深さは、検出面から約80cm程ある。

堆積土は5層に分けられる。黒色土を主体にした土に、第V層のロームの細ブロックが斑状に混入する。第3層は砂質土であり中乗浮石の可能性がある。人為堆積と判断する。遺物は、第4層から円筒上層式に比定される土器片が出土した。

第105a号フラスコ状土坑（第73図）

調査A区IH-12・13グリッドに位置する。町道撤去後、第V層面で黒褐色の円形プランで検出した。第104a号同b号フラスコ状土坑と同様に、土層面観察によって重複していることを確認し、第105a号と第105b号に分けた。本遺構も、道路建設の際に大きく削平されたと思われる、遺存している部分は底面付近だけである。底面径は1.30m、検出面からの深さは35cm程である。また、東側の壁は、第105b号のものと共有しており、第105b号を利用して作られたものと考えられる。

堆積土は、黒褐色土の単層で炭化物が微量に混入する。遺物は、堆積土内から円筒上層式に比定される土器が出土しているが、本遺構からなのか、第105b号からなのか確認しなかった。

第105b号フラスコ状土坑（第73図）

調査A区IH-12・13グリッドに位置する。第105a号フラスコ状土坑と重複し、本遺構の上部は破壊されている。底面の規模は、2.50m×2.10mのほぼ楕円形で、深さは検出面から約80cmある。開口部は失われているが、遺存している東側壁から、底面に比べ開口部はかなり狭い

もので、開口部と底面をずらして作られたものと推察される。

堆積土は2層に分けられる。第1層は、黒褐色土で第105a号の堆積土と近似した土で、炭化物、ローム粒の混入が多く見られた。第2層は、第V層のロームである。堆積状態から人為堆積と考えている。遺物は、堆積土内から円筒上層式に比定される土器が出土しているが、本遺構からなのか、第105a号からなのか確認しなかった。

第106b号フラスコ状土坑 (第65図)

調査A区I I-11・12グリッドに位置する。町道撤去後、第V層面で黒褐色の円形プランで検出した。検出時に小土坑と重複していることを確認したが、まとめて掘り下げ、第106a号と第106b号フラスコ状土坑とに分けた。また、底面で第9a号フラスコ状土坑と重複しているが、新山関係は不明である。本遺構も、道路建設の際に大きく削平されたと思われる、開口部は失われている。規模は、遺存している開口部分の径が約80cm、底面は長軸が3.20mの楕円形になるものと思われる。深さは検出面から70cm程である。

堆積土は12層に分けられる。黒色土と黒褐色土を主体に堆積している。第5層は赤褐色焼土層であり、精査時に30cm程掘り下げた時点で、不整な形で広範囲な焼面で検出した。壁面も焼成を受けた痕跡が残ることからこの面で火を使用したものと判断される。本遺構の断面形状を見ると、第104a・b号、第105a・b号と同様であり、第7層以下の堆積土は、重複する別の遺構の可能性もあるが、明確にできなかった。

本遺構は、堆積土の状態からみて、第5層上面のラインで1基、第6層までのラインで1基、第7層以下の堆積土で1基の、計3基の土坑の重複であった可能性も考えられる。遺物は、第5層面からやや浮いた状態で円筒上層c式の土器が出土した。

第107号フラスコ状土坑 (第72図)

調査B区I I・J-67・68グリッドに位置する。町道撤去後、第IV層面で検出した。規模は、開口部が2.70m×2.60m、底面径が3.20mのほぼ円形である。深さは2.20mある。底面から立ち上がるラインに特徴がある。

堆積土は21層に分けられる。第1層から6層と8層は、第V層および第VI層の廃棄土で、一気に埋められた状態である。間に、第7層の暗褐色土が薄層で入り込んでいる。第10層、11層、14層、18層、19層、21層は周壁の第V層及び第VI層のロームで崩落土と判断される。他の層については、自然堆積か人為堆積か判断しかねるが、第9層以下の堆積土と第1層から8層までの堆積土では堆積状態がことなることから、上位の廃棄土までの間に時間幅があるものとする。遺物は、礫石器が廃棄土より出土している。

第110号フラスコ状土坑 (第73図)

調査A区I H・I-63・64グリッドに位置する。規模は、開口部が3.25m×3.15m、底面が

3.30m×2.80mで共に不整な円形である。深さは2.20mある。

堆積土は14層に分けられる。第3層は、第IV層の黄褐色ロームで廃棄されたもの考える。第8層、11層、13層は、第V層のローム土で壁の崩落土と考えられる。他の層は、黒褐色土を主体にした土で炭化物を含むが、自然堆積か人為堆積か判断し得ない。遺物は、第6層中より縄文時代中期後葉から後期初頭に比定される土器が出土した。

第111号フラスコ状土坑 (第72図)

調査A区IH・I-62グリッドに位置する。町道撤去後、第IV層面で検出した。規模は、開口部が2.75m×2.65m、底面が2.30m×2.20mの不整な円形である。深さは2.10mある。

堆積土は14層に分けられる。第1層と3層は、第IV層及び第V層のロームで廃棄土である。第8層と10層は周壁からの崩落土と考えられる。第4層から7層と9層は、褐色土を主体にし、炭化物の混入が見られ、ほぼ同一色の土が急傾斜で堆積していることから、人為的に埋められているものと考えたい。第11層と12層については、自然堆積か人為堆積か判断し得ない。第1層から4層までの上位層と第5層以下では、堆積状態が異なることから、埋没までに時間差があるものとする。遺物は、堆積土中より椀林式に比定される土器が出土した。

第115号フラスコ状土坑 (第74図)

調査A区IH-52グリッドに位置する。町道撤去後、第IV層面で検出した。プラン南側が把握できず、開口部の一部を掘りすぎた。規模は、開口部の南北辺が1.20m程、東西辺が0.60m、底面が1.40m×1.20mの方形である。深さは0.90mである。周壁の立ち上がりは直線的である。

堆積土は9層に分けられる。第2層と3層、5層、7層、9層は第VI層のローム層で、第4層、6層、8層は暗褐色土と黒褐色土である。これらが互層に堆積していることから、人為的に埋められたものと判断される。本遺構は、小型で形態的にも他のフラスコ状土坑とは異なることから、用途も特別なものであった可能性がある。遺物は、土器片が1点出土した。

第119号フラスコ状土坑 (第74図)

調査A区IG・H-57・58グリッドに位置する。町道撤去後に第IV層面で検出した。第15号住居跡と重複し、本遺構が新しい。規模は、開口部が2m×1.90m、底面が2.15m×2mのほぼ円形である。深は1.60mある。

堆積土は、11層に分けられる。褐色土を主体に堆積しており、第4層、6層、7層、9層は第IV層の褐色土で周壁の崩落土と判断する。最下層の第11層は、自然堆積土と思われるが、他の層については自然堆積か人為堆積か判断しかねる。遺物は、後期初頭に比定される土器片と剥片が第2層中より出土した。

第121号フラスコ状土坑 (第73図)

調査A区IH-52・53グリッドに位置する。町道撤去後に第IV層面で検出した。第116号土坑と重複し、本遺構が古い。また、本遺構の周辺は木根等による攪乱が著しく、本遺構の開口部北側は大きく破壊されている。開口部の規模は不明であるが、およそ楕円形であったものと思われる。底面は、2.40m×2.20mの不整な円形である。深さは、およそ1.50mある。開口部より底面が、北側に広がる、断面形が靴型状の特異な形態である。

堆積土は、8層に分けられる。褐色土を主体に堆積する。第1層は、第IV層の埋土であり、第3層以下は第VI層のロームブロックの混入が顕著であることから人為的堆積と判断した。第2層の黒褐色土は自然堆積の可能性があり、第1層と、第3層以下の堆積には時間差があるものと考えている。遺物は、堆積土中より中期中葉から後期に比定される土器片が出土した。

第132号フラスコ状土坑 (第74図)

調査D区IIB・C-140グリッドに位置する。第IV層上面で検出した。規模は、開口部2.15m×1.90m、底面1.85m×1.65mのほぼ円形である。深さは0.95mある。断面形状と底面が僅かにオーバーハングしていることから本類に含めた。

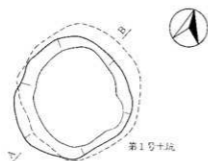
堆積土は、10層に分けられる。全て褐色土を主体にする堆積土であり、第2層以下は、第IV層のロームの混入が顕著であり、細分はしたが近似した土で、第4層から7層と10層は周壁からの崩落土の可能性ある。本遺構の東側には段差が認められ、重複の可能性も考えられたが明確に捉える事ができなかった。また、底面には、1m×0.8m程の楕円形の浅い掘り込みが認められた。遺物は出土しなかった。

第133号フラスコ状土坑 (第74図)

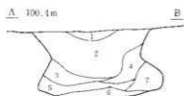
調査D区IIB・C-141グリッドに位置する。第IV層上面で検出した。本遺構の東側は、第19号住居跡と重複しているが、新旧関係は不明である。規模は、開口部が2.30m×2m、底面が2.20m×2mの楕円形である。深さは1.50mある。

堆積土は、13層に分けられる。第1層から第3層までは、黒色土主体の上で、自然堆積と思われる。第4層から第11層までは、第VI層のロームを主体にした土で人為的堆積と判断される。第132号土坑と同様に、東壁中位に段を有している。堆積土の状態から、重複ではなく単一の土坑と判断した。遺物は、土器片が1点出土した。

(小田川・増尾)



第1号土坑

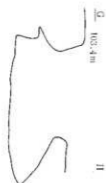


- 第1号土坑 堆積土
- | | |
|-----------------|------------------|
| 1層 10YR2/7 赤褐色土 | 5層 10YR3/3 暗褐色土 |
| 2層 10YR3/2 赤褐色土 | 6層 10YR3/4 暗褐色土 |
| 3層 10YR5/6 黄褐色土 | 7層 10YR5/1 灰白色粘土 |
| 4層 10YR6/4 紅褐色土 | |

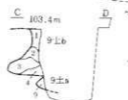


第24号土坑

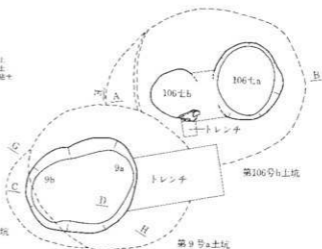
- 第24号土坑 堆積土
- | | |
|------------------|------------------|
| 1層 10YR2/7 赤褐色土 | 6層 10YR1/7/1 赤色土 |
| 2層 10YR2/1 暗褐色土 | 7層 10YR3/3 暗褐色土 |
| 3層 10YR2/3 暗褐色土 | 8層 10YR4/6 暗褐色土 |
| 4層 10YR1/7/1 赤色土 | 9層 10YR3/3 暗褐色土 |
| 5層 10YR5/6 黄褐色土 | 10層 10YR4/6 暗褐色土 |



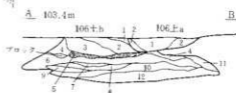
第9号b土坑



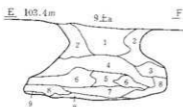
- 第9号b土坑 堆積土
- | |
|-----------------|
| 1層 10YR5/4 紅褐色土 |
| 2層 10YR5/4 紅褐色土 |
| 3層 10YR5/6 黄褐色土 |
| 4層 10YR6/4 黄褐色土 |



第9号a土坑



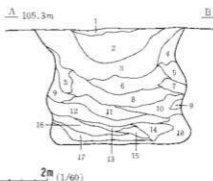
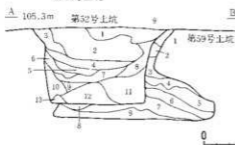
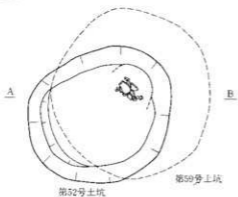
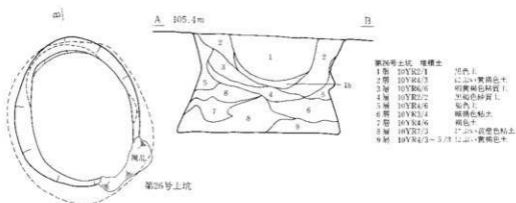
- 第9号a土坑 堆積土
- | | |
|------------------|-------------------------|
| 1層 10YR3/3 暗褐色土 | 8層 7.5YR2/2 黄褐色土 |
| 2層 10YR4/4 暗褐色土 | 9層 7.5YR4/4 暗褐色土 |
| 3層 10YR3/1 暗褐色土 | 10層 10YR2/1 赤色土 |
| 4層 10YR2/3 暗褐色土 | 11層 7.5YR2/1 赤色土 |
| 5層 8YR4/6 赤褐色土 | 12層 10YR2/1 赤色土 |
| 6層 7.5YR2/2 暗褐色土 | 13層 7.5YR3/3 暗褐色土粘土ブローフ |
| 7層 7.5YR4/1 暗褐色土 | |



- 第9号a土坑 堆積土
- | | |
|-----------------|-----------------|
| 1層 10YR3/2 暗褐色土 | 6層 10YR6/4 紅褐色土 |
| 2層 10YR4/1 暗褐色土 | 7層 10YR4/2 暗褐色土 |
| 3層 10YR5/6 黄褐色土 | 8層 10YR7/2 紅褐色土 |
| 4層 10YR2/3 暗褐色土 | 9層 10YR3/1 暗褐色土 |
| 5層 10YR4/4 暗褐色土 | |

0 2m (1/60)

第65図 プラスコ状土坑(1) 第1-24・9a・b・106b号

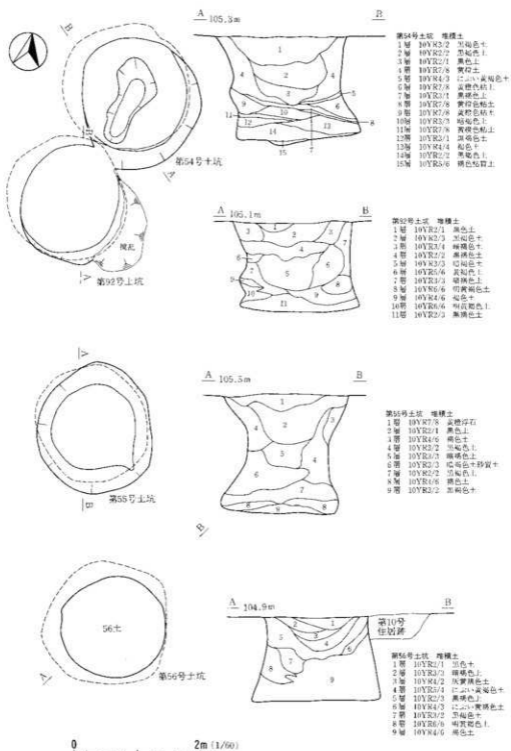


第52号土坑 堆積土	
1層	10YR2/3 暗褐色土
2層	10YR6/8 明黄褐色粘土
3層	10YR4/6 褐色土
4層	10YR2/1 褐色土
5層	10YR7/3 褐色土
6層	10YR4/6 褐色土
7層	10YR2/3 暗褐色土
8層	10YR2/2 暗褐色土
9層	10YR3/3 暗褐色土
10層	10YR6/8 明黄褐色土
11層	10YR2/3 暗褐色土
12層	10YR2/2 暗褐色土
13層	10YR5/6 黄褐色粘土

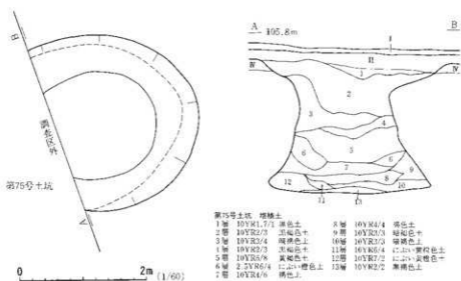
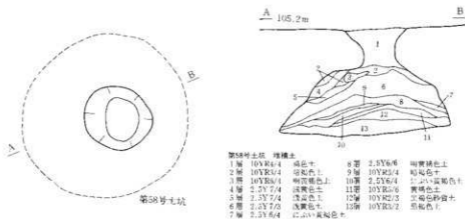
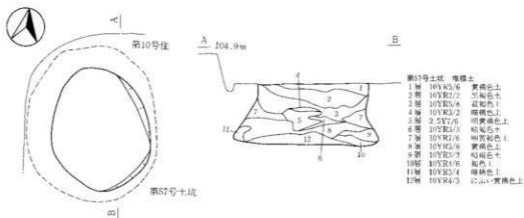
第59号土坑 堆積土	
1層	10YR2/2 暗褐色土
2層	10YR4/6 褐色土
3層	10YR4/3 棕色土
4層	10YR3/3 暗褐色土
5層	10YR7/6 明黄褐色土
6層	10YR3/3 暗褐色土
7層	10YR7/6 明黄褐色土
8層	10YR6/3 棕色土
9層	10YR2/2 暗褐色土

第53号土坑 堆積土	
1層	10YR5/4 黄褐色土
2層	10YR2/2 暗褐色土
3層	10YR3/3 暗褐色土
4層	10YR4/4 褐色土
5層	10YR4/6 褐色土
6層	10YR2/2 暗褐色土
7層	10YR2/8 暗褐色土
8層	10YR4/3 棕色土
9層	10YR1/6 黄褐色土
10層	10YR7/3 棕色土
11層	10YR4/1 褐色土
12層	10YR6/4 明黄褐色土
13層	10YR3/4 暗褐色土
14層	10YR7/4 暗褐色土
15層	10YR6/4 明黄褐色土
16層	10YR6/3 明黄褐色土
17層	10YR4/6 褐色土
18層	10YR3/3 暗褐色土

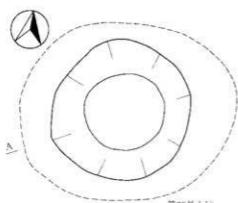
第66图 フラスコ状土坑② 第26・52・53・59号



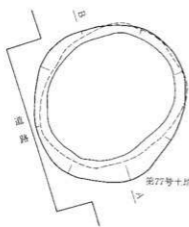
第67図 フラスコ状土坑(3) 第54・55・56・92号



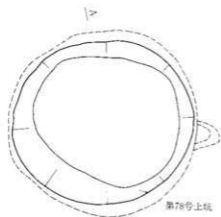
第68図 フラスコ状土坑(4) 第57・58・75号



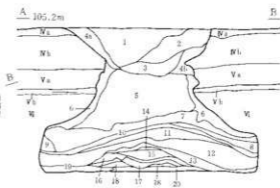
第76号土坑



第77号土坑

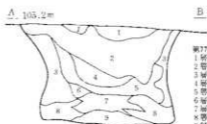


第78号土坑



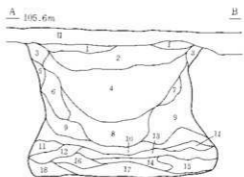
第76号土坑 埋藏土

1層	10YR2/1	棕色土	11層	10YR2/2	暗棕色土
2層	10YR2/2	暗棕色土	12層	10YR7/4	12.2a・黄褐色土
3層	10YR2/3	黄褐色土	13層	10YR4/4	褐色土
4層	10YR4/4	褐色土	14層	10YR2/3	暗棕色土
4層	10YR2/3	暗棕色土	15層	10YR2/2	暗棕色土
5層	7.5YR5-6	黄褐色灰土	16層	10YR2/2	暗棕色土
6層	10YR2/3	暗棕色土	17層	10YR2/1	棕色土
7層	10YR7/2	12.2a・黄褐色土	18層	10YR4/6	棕色土
8層	10YR7/3	12.2a・黄褐色土	19層	10YR6/3	12.2a・黄褐色土
9層	10YR5/4	12.2a・黄褐色土	20層	10YR2/2	暗棕色土
10層	10YR6/3	暗黄褐色土			



第77号土坑 埋藏土

1層	10YR6/8	暗黄褐色土
2層	10YR2/2	暗棕色土
3層	10YR4/6	棕色土
4層	10YR4/2	黄褐色土
5層	10YR3/2	暗棕色土
6層	10YR4/4	棕色土
7層	10YR6/3	黄褐色土
8層	10YR7/6	暗黄褐色土
9層	10YR2/2	暗棕色土

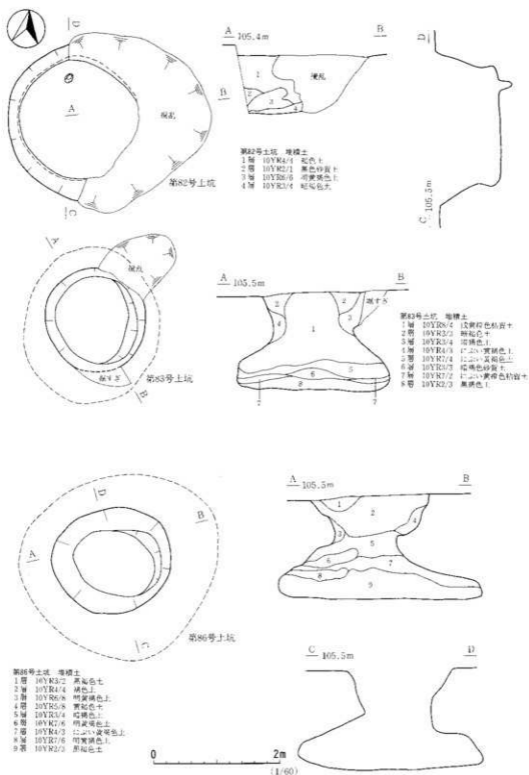


第78号土坑 埋藏土

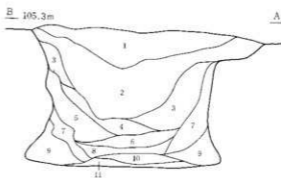
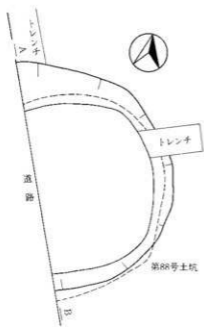
1層	10YR5/3	12.2a・黄褐色土	10層	10YR6/6	暗黄褐色土
2層	10YR6/8	暗黄褐色土	11層	10YR2/3	12.2a・黄褐色土
3層	10YR4/3	12.2a・黄褐色土	12層	10YR6/4	12.2a・黄褐色土
4層	10YR2/2	暗棕色土	13層	10YR3/3	暗棕色土
5層	10YR5/8	黄褐色土	14層	10YR3/4	暗棕色土
6層	10YR4/2	黄褐色土	15層	10YR6/1	灰白色砂質土
7層	10YR4/3	12.2a・黄褐色土	16層	10YR5/8	暗黄褐色土
8層	10YR2/3	暗棕色土	17層	10YR2/3	暗棕色土
9層	10YR6/8	暗黄褐色土	18層	10YR2/1	灰白色砂土

0 2m (1/60)

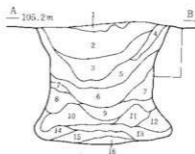
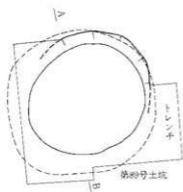
第69図 フラスコ状土坑(5) 第76・77・78号



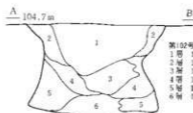
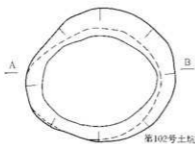
第70図 フラスコ状土坑(6) 第82・83・86号



- 第88号土坑 堆積土
- | | | |
|-----|---------|-------|
| 1層 | 10YR6/6 | 明黄褐色土 |
| 2層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 |
| 3層 | 10YR5/6 | 黄褐色土 |
| 4層 | 10YR4/4 | 紅色土 |
| 5層 | 10YR2/3 | 黄褐色土 |
| 6層 | 10YR2/3 | 暗褐色土 |
| 7層 | 10YR5/8 | 暗褐色土 |
| 8層 | 10YR2/3 | 暗褐色土 |
| 9層 | 10YR6/6 | 明黄褐色土 |
| 10層 | 10YR2/2 | 暗褐色土 |
| 11層 | 10YR3/2 | 黒褐色土 |



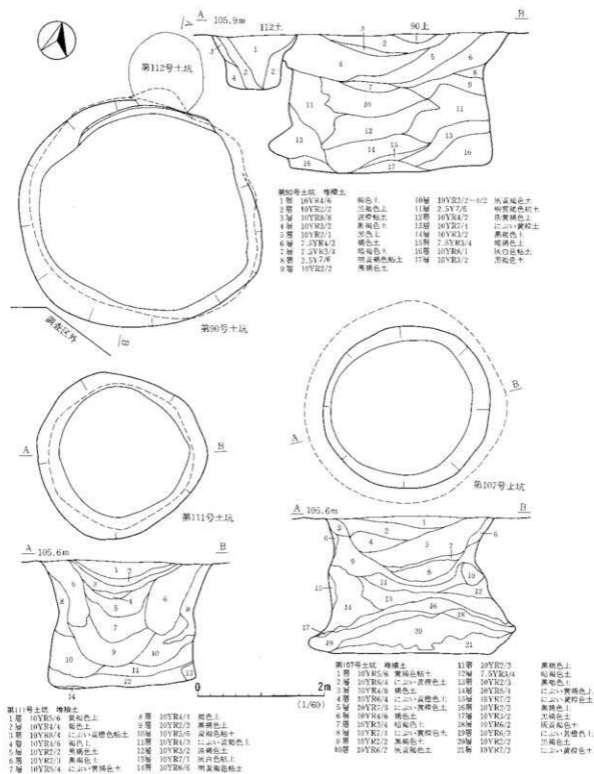
- 第89号土坑 堆積土
- | | | |
|-----|---------|-------|
| 1層 | 10YR2/3 | 暗褐色土 |
| 2層 | 10YR6/6 | 明黄褐色土 |
| 3層 | 10YR6/8 | 明黄褐色土 |
| 4層 | 10YR2/4 | 暗褐色土 |
| 5層 | 10YR2/3 | 暗褐色土 |
| 6層 | 10YR2/3 | 暗褐色土 |
| 7層 | 10YR2/3 | 暗褐色土 |
| 8層 | 10YR2/3 | 暗褐色土 |
| 9層 | 10YR2/2 | 暗褐色土 |
| 10層 | 10YR1/4 | 暗褐色土 |
| 11層 | 10YR1/4 | 暗褐色土 |
| 12層 | 10YR4/6 | 褐色土 |
| 13層 | 10YR2/2 | 暗褐色土 |
| 14層 | 10YR4/4 | 黄褐色土 |
| 15層 | 10YR5/8 | 黄褐色土 |
| 16層 | 10YR2/3 | 暗褐色土 |



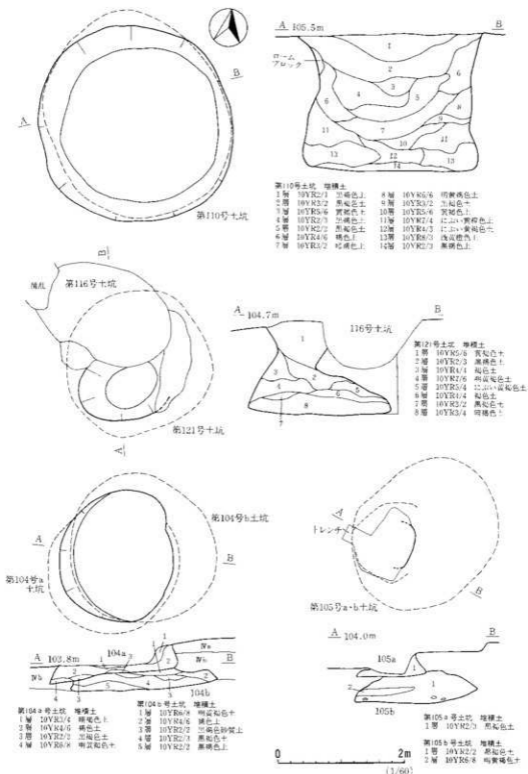
- 第102号土坑 堆積土
- | | | |
|----|---------|-------------|
| 1層 | 10YR3/3 | 暗褐色土 |
| 2層 | 10YR4/6 | 褐色土 |
| 3層 | 10YR2/3 | 暗褐色土 |
| 4層 | 10YR5/4 | 2.0% 黄褐色土 |
| 5層 | 10YR7/4 | 2.0% 黄褐色粘質土 |
| 6層 | 10YR2/2 | 暗褐色土 |

0 2m (1/60)

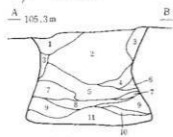
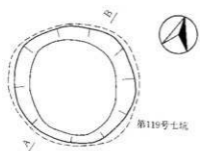
第71図 フラスコ状土坑(7) 第88・89・102号



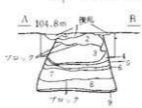
第72図 フラスコ状土坑(8) 第90・107・111号



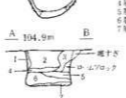
第73図 フラスコ状土坑(9) 第110・121・104a・b・105a・b号



- 第119号土坑
- 1層 10VR1/3 暗褐色土
 - 2層 10VR2/1 黒色土
 - 3層 10VR3/4 暗褐色土
 - 4層 10VR4/4 褐色土
 - 5層 10VR2/2 黒褐色土
 - 6層 10VR5/6 黄褐色土
 - 7層 10VR4/6 褐色土
 - 8層 10VR2/3 黒褐色土
 - 9層 10VR7/5 黄褐色土
 - 10層 10VR1/7/1 褐色土
 - 11層 10VR2/2 黒褐色土

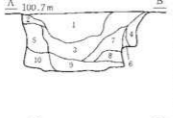
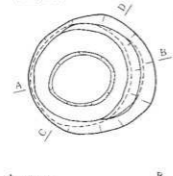


- 第115号土坑 堆積土
- 1層 10VR1/4 暗褐色土
 - 2層 10VR5/2 灰褐色粘土層
 - 3層 10VR5/8 黄褐色土
 - 4層 10VR3/3 暗褐色土
 - 5層 10VR2/6 黄褐色土
 - 6層 10VR3/2 暗褐色土
 - 7層 10VR5/8 黄褐色土
 - 8層 10VR2/3 暗褐色土
 - 9層 10VR6/8 黄褐色土

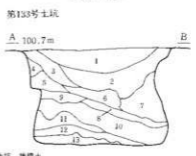
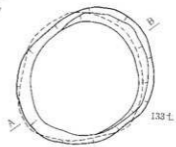


- 第61号土坑 堆積土
- 1層 10VR4/5 褐色土
 - 2層 10VR2/3 暗褐色土
 - 3層 10VR3/4 暗褐色土
 - 4層 10VR4/4 褐色砂質土
 - 5層 10VR3/4 暗褐色土
 - 6層 10VR3/2 暗褐色土
 - 7層 10VR3/3 暗褐色砂質土

第132号土坑



- 第132号土坑 堆積土
- 1層 10VR2/2 黒褐色土
 - 2層 10VR3/4 暗褐色土
 - 3層 10VR2/2 黒褐色土
 - 4層 10VR4/5 褐色土
 - 5層 10VR3/4 暗褐色土
 - 6層 10VR4/4 褐色土
 - 7層 10VR3/2 暗褐色土
 - 8層 10VR3/4 暗褐色土
 - 9層 10VR2/2 黒褐色土
 - 10層 10VR3/3 暗褐色土

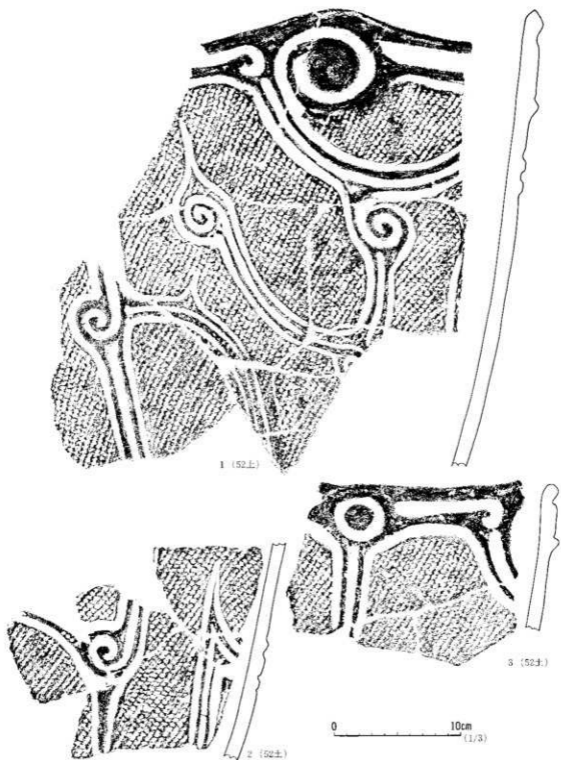


- 第133号土坑 堆積土
- 1層 10VR1/7/1 黒色土
 - 2層 10VR2/1 黒色土
 - 3層 10VR2/2 暗褐色土
 - 4層 10VR4/5 褐色土
 - 5層 10VR3/4 暗褐色土
 - 6層 10VR3/4 暗褐色土
 - 7層 10VR5/8 黄褐色土
 - 8層 10VR5/5 黄褐色土
 - 9層 10VR5/8 黄褐色土
 - 10層 10VR6/8 黄褐色土
 - 11層 10VR4/6 褐色土
 - 12層 10VR2/4 暗褐色土
 - 13層 10VR2/2 暗褐色土

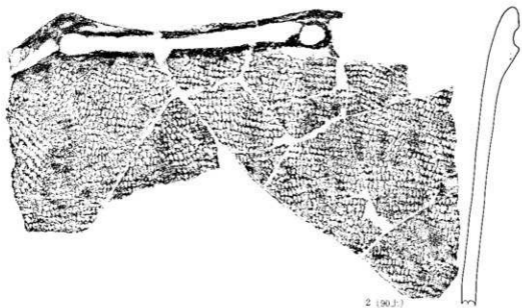
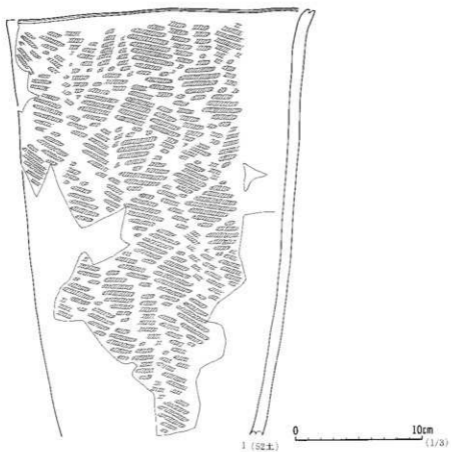
第74図 フラスコ状土坑⑩ 第61・115・119・132・133号



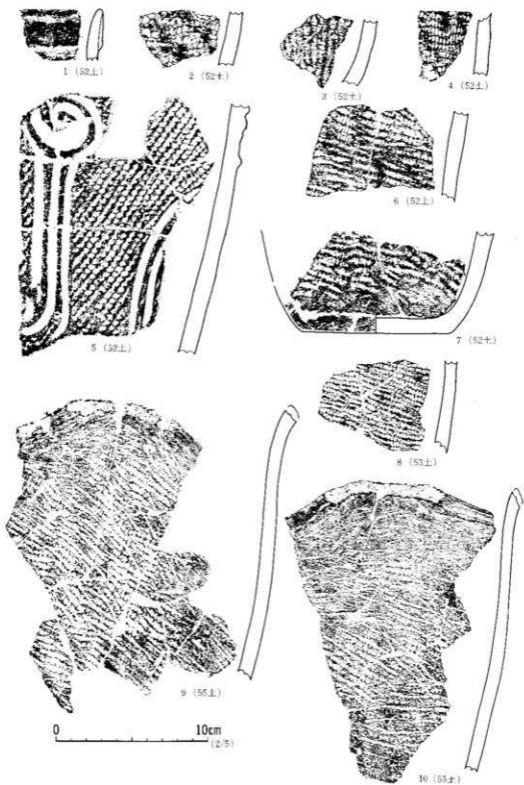
第75図 フラスコ状土坑 出土遺物(1)



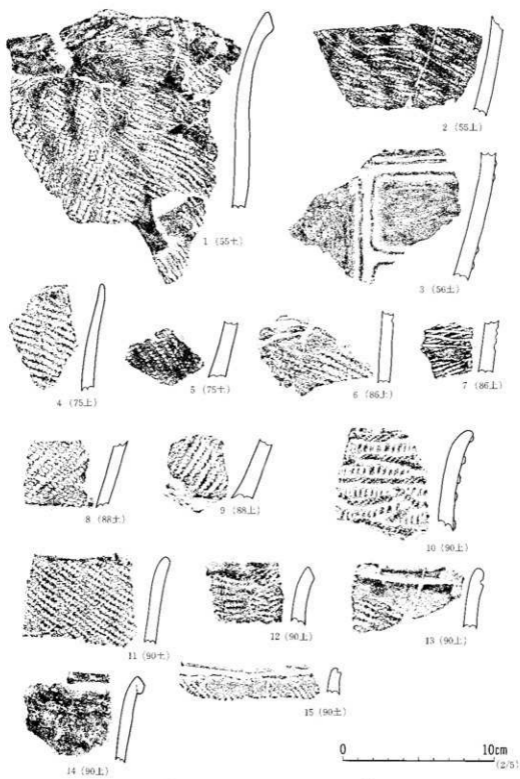
第76図 フラスコ状土坑 出土遺物(2)



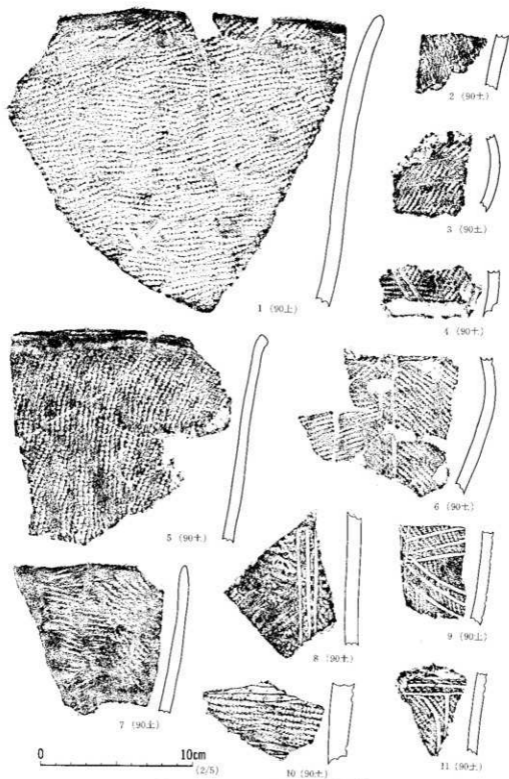
第77図 フラスコ状土坑 出土遺物(3)



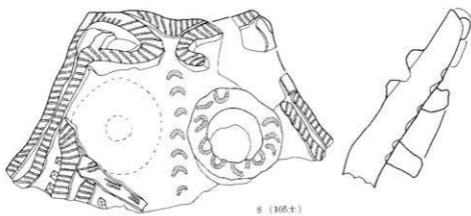
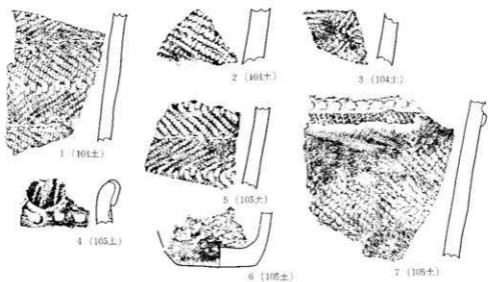
第78図 フラスコ状土坑 出土遺物(4)



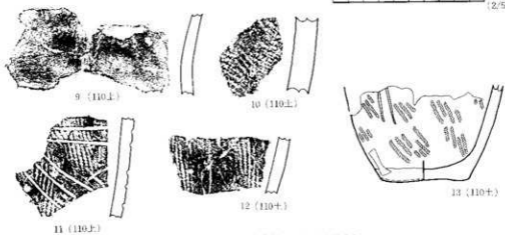
第79図 フラスコ状土坑 出土遺物(5)



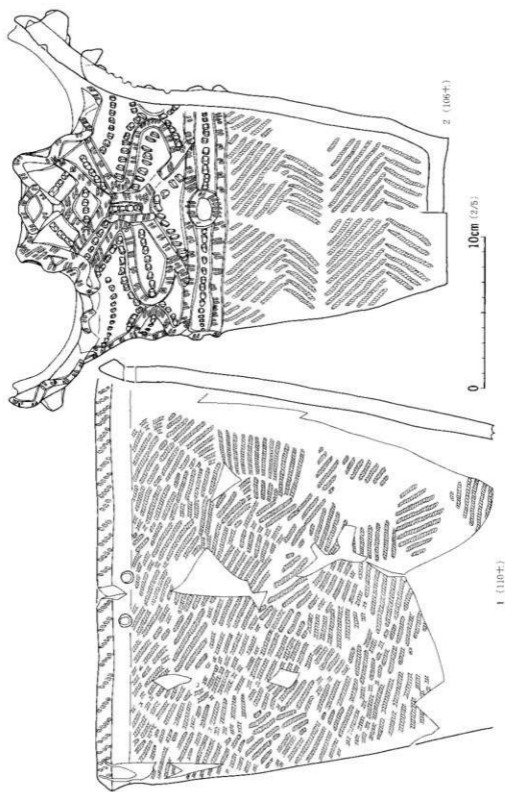
第80図 フラスコ状土坑 出土遺物(6)



0 10cm (2/5)



第81図 フラスコ状土坑 出土遺物(7)

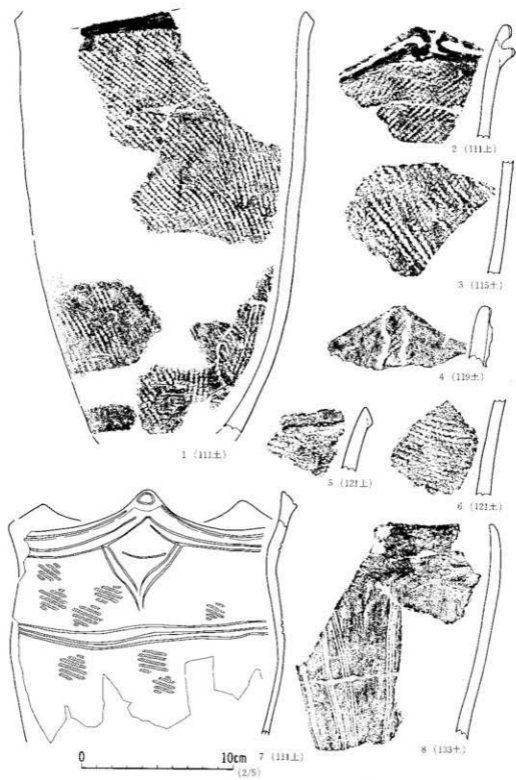


1 (110十)

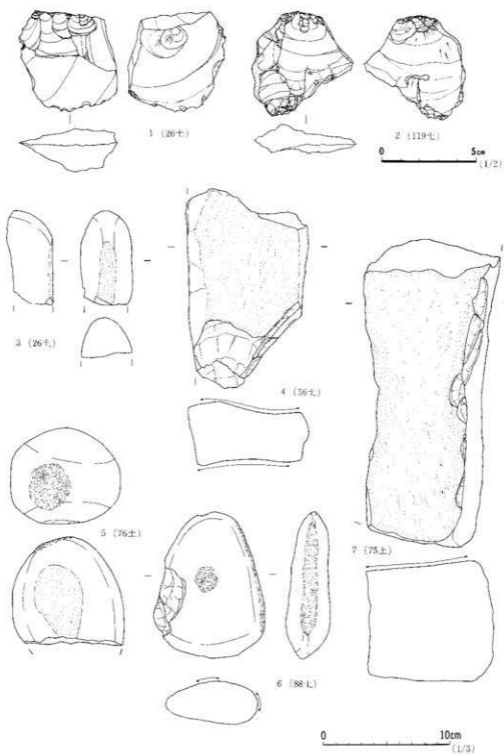
2 (106十)

10cm (2/5)

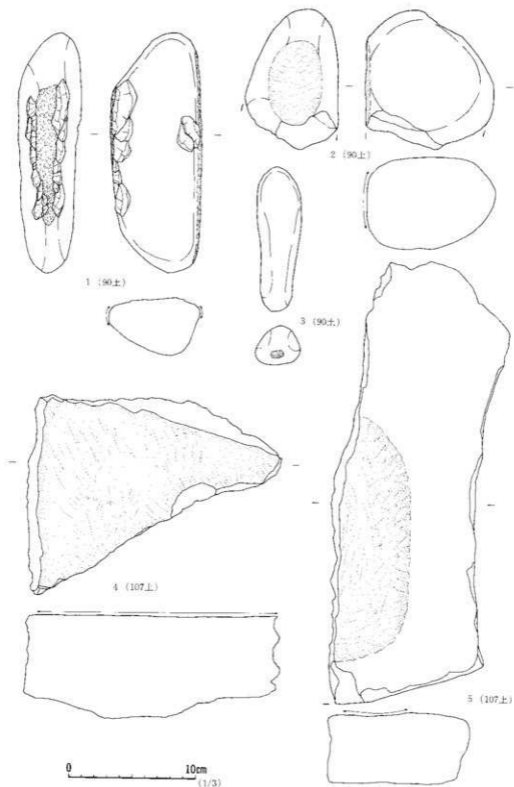
第82図 フラスコ状土坑 出土遺物(8)



第83図 フラスコ状土坑 出土遺物(9)



第84図 フラスコ状土坑 出土遺物(1)



第85図 フラスコ状土坑 出土遺物(1)

2) 小土坑列

本調査で検出した土坑のうち、ここに取り上げたものは特異なものとする。個々の土坑であれば、他の遺跡でも検出される小型の土坑であるが、意図的に列を形成するように作られていることから、本項目を設けた。

土坑列は調査A区南側だけに検出された。当初は、現道路を挟み弧状になるものと思われたが、調査により3列に分かれることが判明した。以下に、これら3列の土坑列を、小土坑A列・小土坑B列・小土坑C列として報告する。

なお、個別の土坑としては規模形態において同じものでも、単独で存在しているものについては、5)のその他の土坑の項で述べる。また、土坑番号は、他の土坑も含めた検出順であるため、列ごとに揃っているわけではない。記述については各土坑を第10・11…のほか、第10号というように号および土坑の文字を省略している。

小土坑A列(第86図)

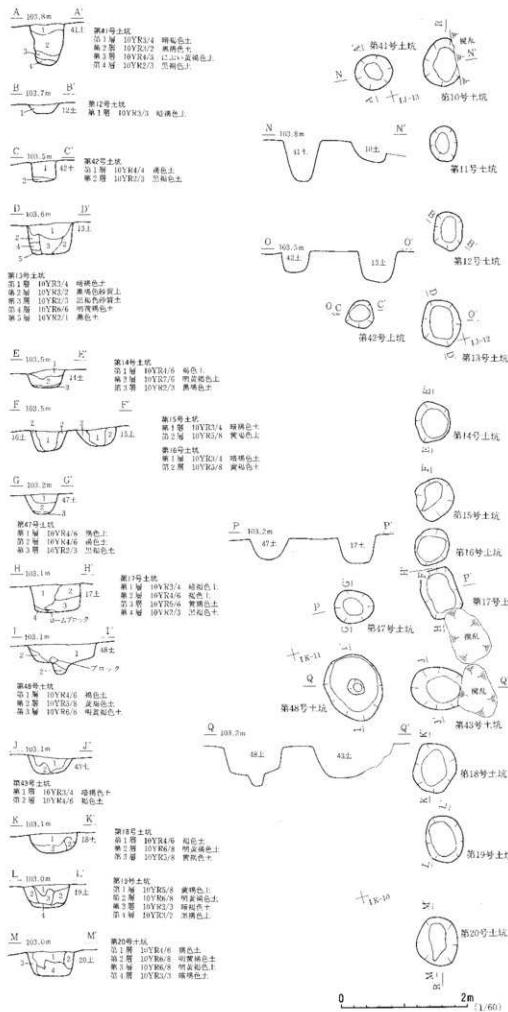
小土坑A列を構成するものは、第10・11・12・13・14・15・16・17・18・19・20・41・42・43・47・48号土坑の16基である。I J-9グリッドからI i-13グリッドまで位置し、第10号土坑から第20号土坑までの11基が直列する。全体の長さは14m65cmある。また、この列のうち第10・13・17・43号土坑の西側には、第41・42・47・48号土坑がそれぞれ付随するように作られてある。

各土坑間の間隔は、第13号と第14号、第19号と第20号の間が最大で90cmある。最小の間隔は、第16号と第17号の間の7cmである。第20号の南側と第10号の北側からは同様の土坑を検出できなかった。第10号の北側は現道路建設の際削平された可能性がある。

各土坑の形状は、不整な楕円形が多く不整形のほか、隅丸長方形のものもある。各土坑の規模は、第48号が最大で長径が1m、第42号が最小で45cmの径である。深さの最大は第41号の65cm、最小は第12号の15cmである。

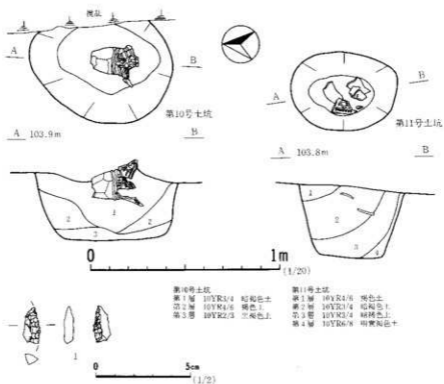
堆積土は、褐色土を主体にし、黒色土と明黄褐色土が混合する。土層注記の砂質土は中振浮石粒の混入が多いもので、ほとんどのものに見られる。全体には埋められた感じが強い。土層断面から柱状の堆積が確認されたものは、第13・15・16・17・19号土坑の5基ある。

遺物は、第10号と第11号土坑から出土している。第10号からは、円筒上層C式土器が出土した。検出時点で現れており、土坑のほぼ中央に位置し横転している。堆積土の上位にあり、土層面に掘り込みがないことから、第1層堆積時に混入したか、同時に埋められたものとする。第11号土坑の堆積土中からは円筒上層C式の土器片と石鏃の破片と考えられるものが出土している。



0 2m (1/60)





第87图 小土坑A列 第10·11号土坑·出土遗物(1)

小土坑B列（第88図）

小土坑B列を構成するものは、第29・30・31・32・33・34・35・36・37・38・39・40号土坑の12基である。I G-16グリッドからI E-19グリッドまで位置し、第30号土坑から第40号土坑までの10基が直列する。B列全体の長さは11m60cmある。この列のうち、第31・37号土坑の西側には、第29・38号土坑がそれぞれ付随するように作られてある。この付随するようにある土坑はA列にもあり、土坑二基間隔で付随している。第34号の西側にも存在していたが、第6号土坑と重複していたようで、第6号土坑の壁にその痕跡が残るだけである。その重複については不明である。本列も第40号の南側は現道であり検出できなかった。第30号の北側は調査区外のため不明である。

各土坑間の間隔は、第37・39号の間が25cmと最小であり、他の間隔は各70cmから1 m15cmまでである。

各土坑の形状は、不整な楕円形及び不整形である。規模はほぼ均一である。最大径で第38号の65cm、最小径で第40号の45cmである。深さは20cmから65cmで最大は第29号である。

堆積土の土質と状態はほとんどA列と同じである。土層断面から柱状状の堆積と促えられるものは、第29・31・35号土坑の3基である。

遺物は、第31号と第33号土坑の堆積土内から円筒上層式に比定される土器片が出土している。

小土坑C列（第89図）

小土坑C列を構成するものは、第23 b・27・44・45・49・50・63・65・66号土坑の9基である。I G-19グリッドからI E-21グリッドまで位置し、第66号土坑から第49号土坑までの7基が直列する。C列全体の長さは10m60cmある。第23 b号は、第23号精査後底面に凹みとして検出した。第63号土坑の東側に、第27号土坑が付随するように作られてあるが、他にはA列やB列のように対応するものは検出できなかった。第49号に対応するものが、第45号の可能性もある。

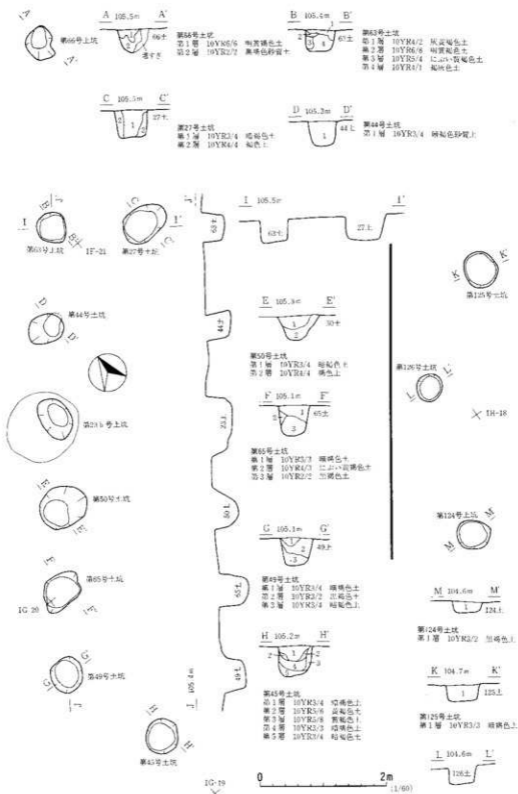
各土坑間の間隔は、第66号と第63号の間が2 m45cmと、他のものと比べかなり広い。他の間隔は70cmから1 m15cmまでである。各土坑の形状は、不整楕円形及び不整形である。規模はほぼ均一である。最大径で第50号の80cm、最小径で第66号の55cmである。深さは、第63号の33cmが最小で、最大は第45号土坑の52cmである。

堆積土の土質と状態はほとんどA列と同じである。土層断面から柱状状の堆積と促えられるものは、第27号土坑の1基だけである。

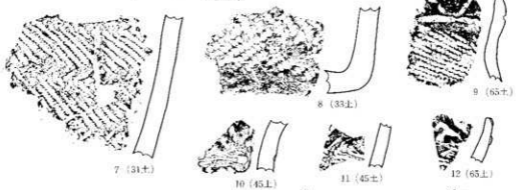
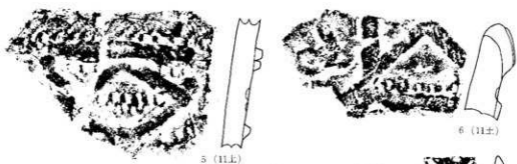
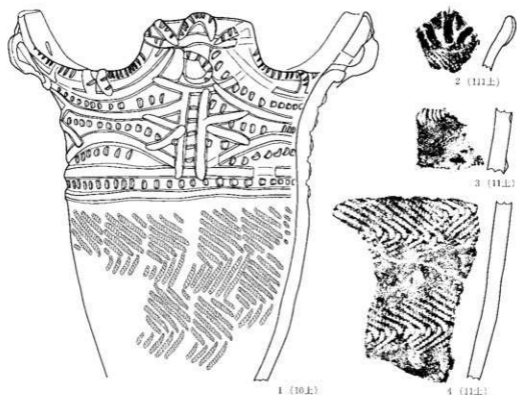
遺物は、第45号と第66号土坑の堆積土内から円筒上層式に比定される土器片が出土している。

本遺構の南西部、I II・G-17・18グリッドに第124・125・126号土坑（第89図）とした同規模の土坑がある。規模形態共に小土坑列と同じであるが直列ではない。関連する可能性も考えられるが断言できない。

（小田川）



第89图 小土坑C列 第23b·27·44·45·49·50·63·65·66·124·125·126号土坑



0 10cm
(2/5)

第90图 小土坑列 出土遗物

3) 土坑墓

土坑墓としたものは、総数7基ある。すべて調査A区で検出した。ここに分けた土坑については、特に土坑内から人骨が出土しているものではない。従来、土坑墓の可能性のあるものとして捉えられているもので、形態的に隅丸長方形及び楕円形で壁直下に周溝をもつものと、楕円形で他の土坑とは異なった遺物の出土状態を示すものを取り上げた。

調査A区の中央から南側の部分に集中して作られており、ブロックとして捉えられる。本項には含めなかったが、規模、形態、配置から第81号土坑も土坑墓として考えても良いのかも知れない。

以下に、各土坑墓としたものについて報告する。

第2号土坑墓 (第91図)

調査A区南IH-11グリッドに位置する。表土除去後にIV層面に不整なプランで検出した。規模と形状は、開口部径が0.90m、底面径が0.80m程の不整な円形で、深さは0.20mある。精査時に東側の壁を大きく掘りすぎてしまっている。

遺物は、底面から密着した状態で円筒上層c式に比定される土器が出土した。堆積土は1層である。黄褐色土と黒色土の混合土が土坑内と土器内に堆積していることから、土器が中空のまま置かれ人為に埋められたものと判断する。

第25号土坑墓 (第91図)

調査A区IF-24・25グリッドに跨って位置する。規模と形状は、長辺が1.65m、短辺が0.90mの隅丸長方形である。長軸方向はほぼ東西方向にある。周壁はほぼ直に立ち上がり、底面までの深さは検出面上より0.40mある。短辺側の底面際には、深さ5cm~10cm、幅10cm~15cmの浅い溝が掘り込まれている。

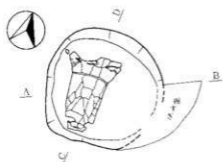
堆積土は2層に分けられた。1層は褐色土と黒色土の混合土である。2層中には多量の炭化物が混入していた。

遺物は、底面東側からやや浮いた状態で、円筒上層c式に比定される土器が潰れた状態で出土した。土器は潰れていたが完形体であり、横に置かれた後に埋土による土圧により潰れたものと判断する。

第62号土坑墓 (第92図)

調査A区IH-29グリッドに位置する。本遺構の中央部から東側の上部は、現代の溝と重複している。規模は、長軸1.10mの東西に長い楕円形であり、深さは検出面上より0.20mある。周壁はほぼ直に立ち上がる。

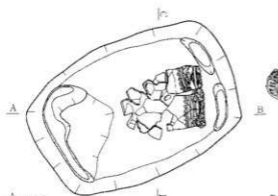
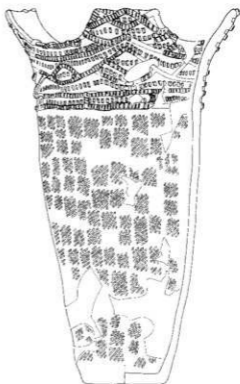
遺物は、底面から密着した状態で円筒上層c式に比定される土器が出土した。堆積土は1層



A 104.0m B

C 104.0m D

第20号土坑 堆積土
 1層 10YR3/2 灰褐色土
 (中心部赤褐色、其周部土は黒色土混入)

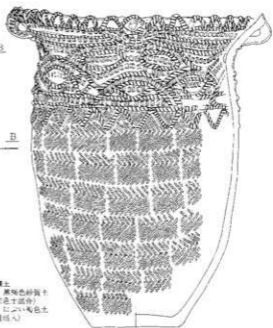


A 105.3m B

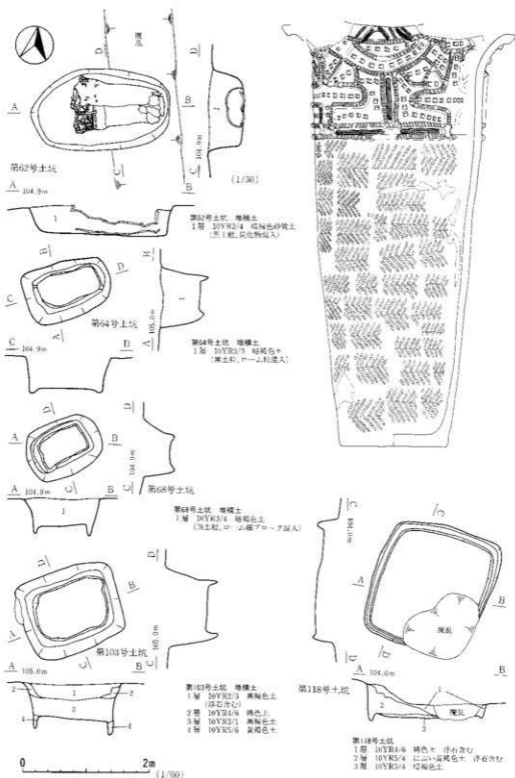
C 105.3m D

第25号土坑 堆積土
 1層 10YR3/2 黒褐色砂質土
 (褐色土と黒色土混合)
 2層 10YR4/3 紅土+褐色土
 (炭化物多量混入)

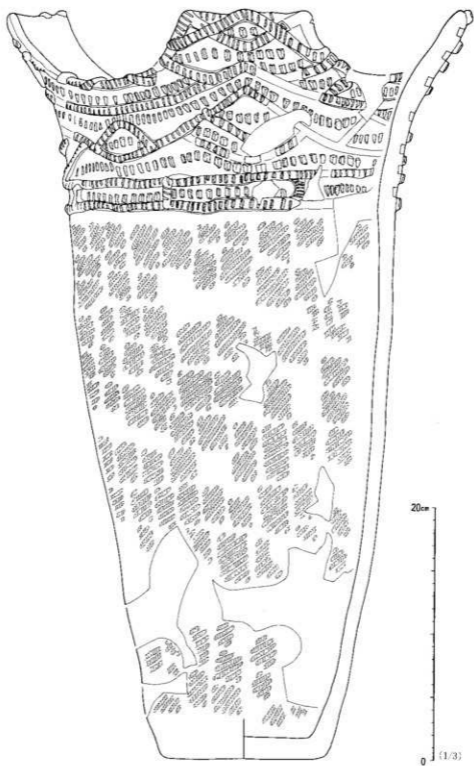
0 1m (1/30)



第91圖 土坑墓(1) 第2・25号、出土遺物



第92图 土坑墓(2) 第62·64·68·103·118号、出土遺物



第93图 第2号土坑 出土遗物

で、暗褐色土に黒色土粒と炭化物が混入する。土坑内と土器内の堆積土が同じであることから、土器が中空のまま置かれ人為に埋められたものと判断する。

第64号土坑墓（第92図）

調査A区IH-30グリッドに位置する。規模は、開口部が1.40m×0.90m、底面0.90m×0.45mある。底面までの深さは、検出した第IV a層上面から約0.50mある。平面形は、西側が隅丸で東側に細い長方形である。壁直下に、幅5cm～10cmの溝が一巡する。溝の深さは、床面から約10cmであるが、溝底には起伏が見られる。

堆積土は、ローム粒と黒色土粒が混入する暗褐色土が1層だけである。人為的堆積と判断した。遺物は出土しなかった。

第68号土坑墓（第92図）

調査A区IH-29グリッドに位置し、第62号土坑墓と第64号土坑墓の間にある。規模は、開口部が1.25m×0.90m、底面が0.80m×0.40mある。底面までの深さは、約0.45mある。平面形は、隅丸長方形である。周壁のうち、南コーナーから北東コーナーにかけての壁は中位で緩く屈曲する。壁直下に、幅10cm～20cmの溝が一巡する。溝の深さは、床面から最大20cmである。

堆積土は1層だけである。人為堆積と判断した。遺物は出土しなかった。

第103号土坑墓（第92図）

調査A区IF・G-23・24グリッドに位置する。町道撤去後に、第IV層面で黒褐色の円形プランで検出した。規模は、開口部が1.60m×1.35m、底面が1.10m×0.75m、底面までの深さは検出面から約0.60mある。平面形はほぼ隅丸方形である。壁直下に、幅10cm～20cm程の溝が一巡する。溝の深さは床面から最大20cmある。堆積土は4層に分けられる。全体に褐色土を主体にした土で、水平堆積の状態を示す。人為堆積と判断する。遺物は出土しなかった。

第118号土坑墓（第92図）

調査A区II-14グリッドに位置する。町道撤去後に不整形プランで検出した。規模は、開口部が2.10m×1.90m、底面が1.70m×1.60m、床面までの深さは検出面から約0.60m程である。平面形はほぼ隅丸方形である。壁直下に、幅15cm程の溝が一巡する。溝の深さは床面から最大15cmある。

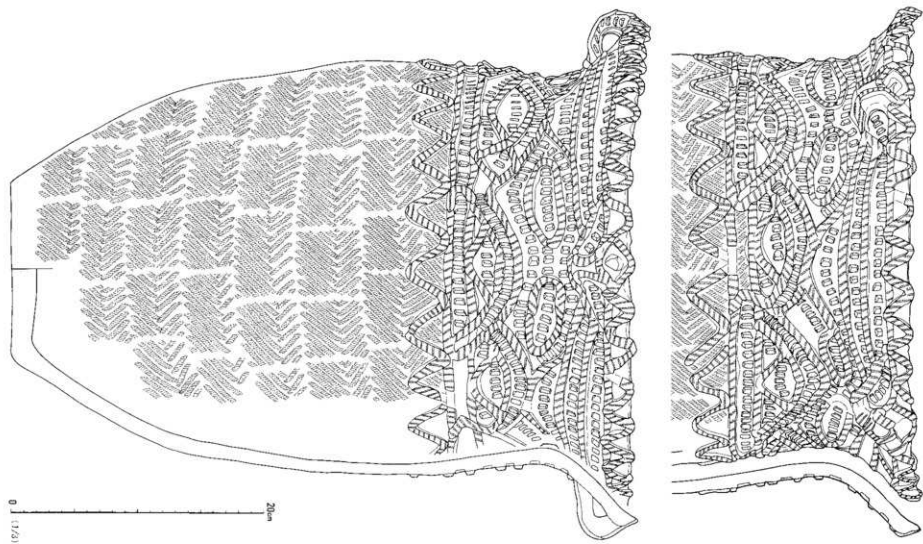
堆積土は3層に分けられる。人為堆積か自然堆積か判断しがたい。遺物は出土しなかった。

（小田川）

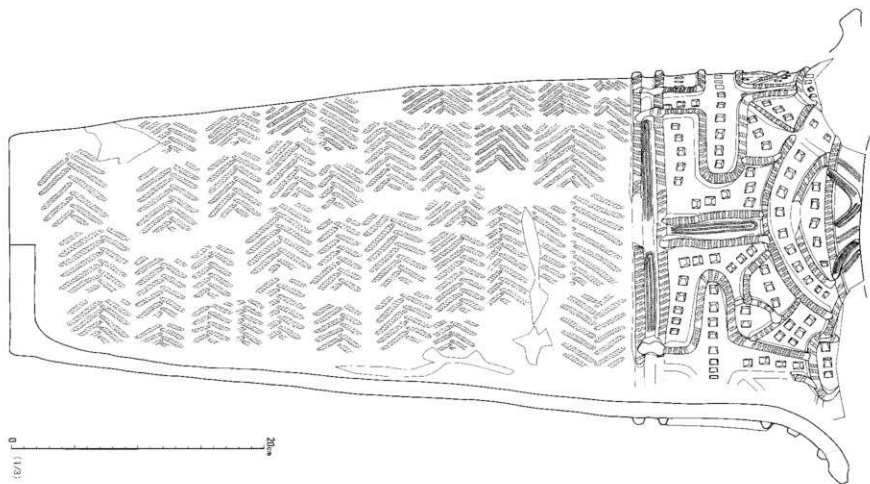
4) 溝状土坑

溝状土坑は、調査A区で2基、調査B区で4基、調査C区で1基、調査D区で4基、調査E区で3基の、総数14基検出した。調査区全域に広がっているが、散発的である。

以下に、各溝状土坑について報告する。



第94图 第25号土坑 出土遗物



第95図 第62号土坑 出土遺物

第46号溝状土坑 (第96図)

調査A区IF-31グリッドに位置する。調査A区の中でも比較的遺構の希薄な部分に作られている。規模は、開口部長軸が3.60m、開口部幅0.60m、深さは約1mある。断面形はV字型である。堆積土は9層に分けられる。各層に中乗浮石粒の混入が認められた。第2層と第3層は周壁の崩落土と思われる。遺物は出土しなかった。

第79号溝状土坑 (第96図)

調査B区IL-72・73グリッドに位置する。南側にプラスチック状土坑群がある。規模は、開口部長軸が3.70m、開口部幅0.90m、深さは1.57mある。断面形はY字型で、中位から下が細くなる。堆積土は6層に分けられる。第2層中に多量の中乗浮石粒の混入が認められた。第6層は褐色土を混合する粘土で、周壁の崩落土と考えられる。遺物は、堆積土上位層から土器片が1片出土した。自然堆積中の流れ込みと思われる。

第97号溝状土坑 (第96図)

調査A区IJ-16・17グリッドに位置する。第7号住居跡の東隅と重複しており、本土坑が古い。規模は、開口部長軸が3.40m、開口部幅0.40m、深さは0.85mある。断面形はV字型である。堆積土は6層に分けられる。第2層から6層は、第IV層に相当するもので人為堆積の可能性が高い。遺物は、堆積土1層中より土器片が出土したが、第7号住居跡からの流れ込みの可能性が高い。

第98号溝状土坑 (第96図)

調査B区IP-99・100グリッドに位置する。北側に第99号溝状土坑があるほか、周囲に他の遺構は存在しない。規模は、開口部長軸が4.10m、最大開口部幅0.80m、深さは1.60mある。断面形はY字型に近い。堆積土は6層に分けられる。第5層中には微量ではあるが、炭化物の混入が認められた。

第99号溝状土坑 (第97図)

調査B区IP-101・102グリッドに位置する。4m程南に第98号溝状土坑がつくられてある。規模は、開口部長軸が4m、開口部幅0.60m、深さは1.40mある。底面の南側がオーバーハングしているほか、底面は北側から南側に傾斜して作られてある。断面形はY字型である。堆積土は8層に分けられる。第4層と5層、8層は高館火山灰起源の粘土で、本遺構の周壁下位の崩落土と思われる。

第100号溝状土坑 (第97図)

調査B区IO-P-86・87グリッドに位置する。本遺構の周辺には、他に遺構は存在しない。規模は、開口部長軸が3.80m、最大開口部幅は0.95mあり、北側が広いが、崩落によるものと思われ、構築時は均整の取れた形であったと考える。深さは1.30mある。断面形はY字型であ

る。堆積土は7層に分けられる。

第129号溝状土坑 (第97図)

調査C区I P-113・114グリッドに位置する。調査C区で検出した唯一の遺構である。耕作によるトレンチャーによって分断されている。規模は、開口部長軸が3.55m、開口部幅0.60m、深さは1.45mある。底面は北側に傾斜して作られてある。断面形はI字型である。堆積土は4層に分けられる。第1層には微量であるが炭化物が混入する。

第131号溝状土坑 (第97図)

調査D区II E・F-154・155グリッドに位置し、第17号住居跡に近接してある。規模は、開口部長軸が3.20m、開口部幅0.95m、深さは1.30mある。底面は、南端がオーバーハングしているほか、起伏をもっている。断面形はU字型である。堆積土は9層に分けられる。第5層、8層、9層に中礫浮石の混入が顕著である。

第134号溝状土坑 (第98図)

調査D区II E-149・150グリッドに位置する。規模は、開口部長軸が4.55m、最大開口部幅は0.95m、深さは1.40mある。断面形はY字型で、南北両端の壁は中位で屈曲する。底面は平坦である。堆積土は8層に分けられる。第2層中に高館火山灰起源のロームブロックが認められる他、下位層は粘土粒が多く混入する。

第135号溝状土坑 (第98図)

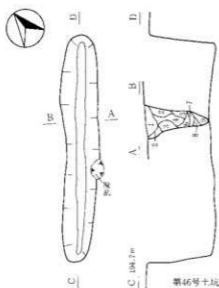
調査D区II F-144グリッドに位置する。北側の一部が調査区外に延びる。規模は、開口部長軸3.20m、開口部幅0.70m、深さは1.20mある。断面形はY字型である。堆積土は10層に分けられる。第6層から下位層はロームブロックを多く混入する層である。

第138号溝状土坑 (第98図)

調査D区II B・C-135・136グリッドに位置する。規模は、開口部長軸が4.40m、開口部幅は0.90m程ある。検出時にプランを掘みきれず、開口部西壁を掘り過ぎている。深さは1.35mあり、底面は北側に傾斜している。断面形は、ほぼV字型である。堆積土は、6層に分けられる。第6層は、高館火山灰相当の粘土を主体とした層である。

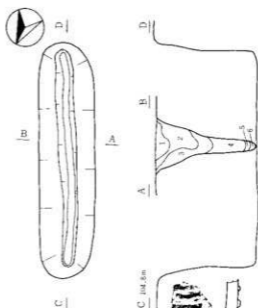
第139号溝状土坑 (第98図)

調査E区II F・G-170・171に位置する。本遺構の南側は、耕作地造成の為に大きく削土されている。北側に40mほど離れて、第140号土坑がある以外に遺構はなく、遺物も出土していない。規模は、開口部長軸が3.80m、開口部幅は0.65m、深さは1.52mある。断面形はY字型である。堆積土は、4層に分けられる。褐色土を主体にした土で、第3層中にあるロームブロックは高館火山灰起源の粘土である。



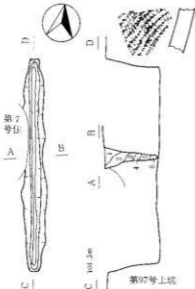
第46号土坑

- | | | |
|-----|---------|------|
| 第1层 | 10YR5/3 | 黄褐色土 |
| 第2层 | 10YR4/6 | 褐色土 |
| 第3层 | 10YR2/2 | 深褐色土 |
| 第4层 | 10YR4/4 | 褐色土 |
| 第5层 | 10YR4/6 | 褐色土 |
| 第6层 | 10YR4/6 | 褐色土 |
| 第7层 | 10YR2/1 | 黑色土 |
| 第8层 | 10YR2/3 | 暗褐色土 |
| 第9层 | 10YR4/4 | 褐色土 |



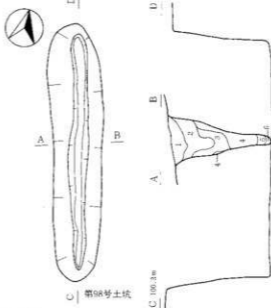
第79号土坑

- | | | |
|-----|-----------|-------|
| 第1层 | 10YR1.7/1 | 黑色土 |
| 第2层 | 10YR4/2 | 暗褐色土 |
| 第3层 | 10YR4/6 | 褐色土 |
| 第4层 | 10YR6/6 | 褐黄褐色土 |
| 第5层 | 10YR2/2 | 深褐色土 |
| 第6层 | 10YR8/3 | 浅灰棕色土 |



第97号土坑

- | | | |
|-----|---------|--------|
| 第1层 | 10YR3/3 | 暗褐色土 |
| 第2层 | 10YR4/4 | 褐色土 |
| 第3层 | 10YR5/6 | 深褐色土 |
| 第4层 | 10YR5/4 | 红土黄褐色土 |
| 第5层 | 10YR8/6 | 黄褐色土 |
| 第6层 | 10YR7/1 | 红土黄褐色土 |

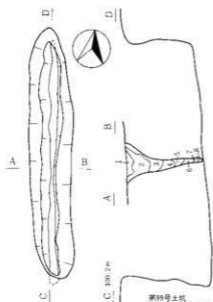


第98号土坑

- | | | |
|-----|-----------|--------|
| 第1层 | 10YR2/1 | 黑色土 |
| 第2层 | 10YR3/2 | 深褐色土 |
| 第3层 | 10YR4/4 | 褐色土 |
| 第4层 | 10YR6/6 | 褐黄褐色土 |
| 第5层 | 10YR1.7/1 | 黑色土 |
| 第6层 | 10YR6/4 | 红土黄褐色土 |

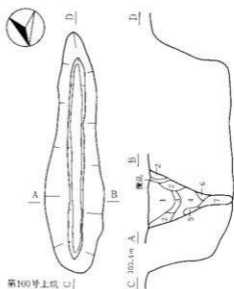
0 2m (1/60)

第96图 沟状土坑(1) 第46·79·97·98号



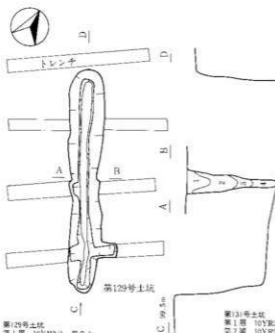
第99号土坑

- 第99号土坑
- 第1層 10YR2/1 黒色土
 - 第2層 10YR2/2 黒褐色土
 - 第3層 10YR4/3 12.5%黄褐色土
 - 第4層 10YR3/3 12.5%黄褐色粘土
 - 第5層 10YR5/4 12.5%黄褐色粘土
 - 第6層 10YR4/1 褐色土
 - 第7層 10YR2/1 黒色土
 - 第8層 10YR6/3 12.5%黄褐色粘土



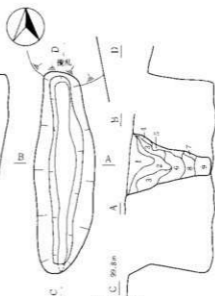
第100号土坑

- 第100号土坑
- 第1層 10YR2/1 黒色土
 - 第2層 10YR2/3 黒褐色土
 - 第3層 10YR3/2 黒褐色土
 - 第4層 10YR3/4 黒褐色土
 - 第5層 10YR5/6 黄褐色土
 - 第6層 10YR6/6 黄褐色土
 - 第7層 10YR7/4 12.5%黄褐色土



第129号土坑

- 第129号土坑
- 第1層 10YR2/1 褐色土
 - 第2層 10YR2/3 黒褐色土
 - 第3層 10YR6/8 黄褐色土
 - 第4層 10YR2/2 黒褐色土



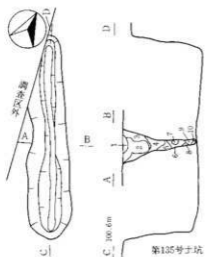
第131号土坑

- 第131号土坑
- 第1層 10YR2/1 黒褐色土
 - 第2層 10YR2/3 黒褐色土
 - 第3層 10YR2/4 褐色土
 - 第4層 10YR4/6 褐色土
 - 第5層 10YR3/6 黄褐色土
 - 第6層 10YR2/4 褐色土
 - 第7層 10YR5/8 黄褐色土
 - 第8層 10YR1/3 黄褐色土
 - 第9層 10YR4/3 12.5%黄褐色土

0 2m

(1/60)

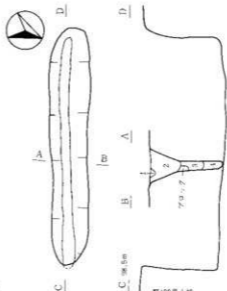
第97図 溝状土坑(2) 第99・100・129・131号



第135号土坑

第135号土坑

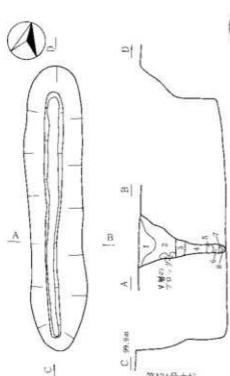
- | | |
|-------------------|--------------------|
| 第1层 10YR2/1 黑色土 | 第6层 10YR6/8 明黄褐色土 |
| 第2层 10YR3/3 暗棕色土 | 第7层 10YR2/7 紫褐色土 |
| 第3层 10YR4/6 褐色土 | 第8层 10YR7/6 暗黄褐色粘土 |
| 第4层 10YR6/8 明黄褐色土 | 第9层 10YR2/1 白色土 |
| 第5层 10YR7/1 正褐色土 | 第10层 10YR5/8 灰褐色粘土 |



第139号土坑

第139号土坑

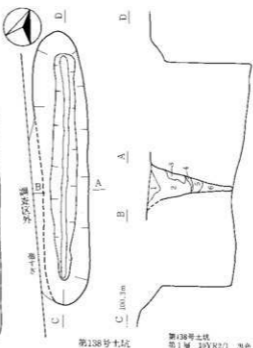
- | |
|------------------|
| 第1层 10YR2/1 白色土 |
| 第2层 10YR2/3 紫褐色土 |
| 第3层 10YR3/3 暗棕色土 |
| 第4层 10YR4/4 暗棕色土 |



第134号土坑

第134号土坑

- | | |
|-------------------|--------------------|
| 第1层 10YR1.7/1 黑色土 | 第5层 20YR1/2 灰黄褐色土 |
| 第2层 10YR2/3 紫褐色土 | 第6层 10YR5/2 灰黄褐色土 |
| 第3层 10YR2/2 紫褐色土 | 第7层 10YR2/3 紫褐色土 |
| 第4层 10YR5/8 紫褐色粘土 | 第8层 10YR6/3 红-灰褐色土 |



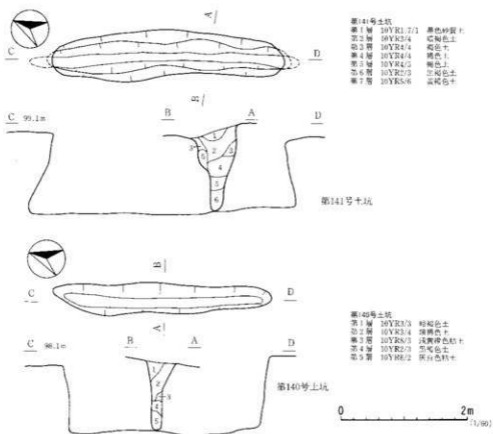
第138号土坑

第138号土坑

- | |
|--------------------|
| 第1层 10YR2/1 白色土 |
| 第2层 10YR3/4 暗棕色土 |
| 第3层 10YR6/8 明黄褐色土 |
| 第4层 10YR6/6 明黄褐色粘土 |
| 第5层 10YR6/8 明黄褐色土 |
| 第6层 10YR5/6 明黄褐色粘土 |



第98图 沟状土坑3) 第134·135·138·139号



第99図 溝状土坑(4) 第140・141号

第140号溝状土坑 (第99図)

調査E区II G-179・180に位置する。西側に傾斜する沢頭部分に作られてある。規模は、開口部長軸が3.50m、最大開口部幅は1m、深さは1.10mある。底面には起伏が見られる。断面形はY字型である。堆積土は5層に分けられる。第3層と5層は高館火山灰起源の粘土である。

第141号溝状土坑 (第99図)

調査E区II K・L-192・193に位置する。西側に傾斜する沢頭部分に作られてあり、西側に3m程離れて第142号土坑が作られてある。規模は、開口部長軸が3.70m、開口部幅は0.80m、深さは1.40m程ある。底面長軸は、4.20mあり、南北両端がオーバーハングしている。断面形はY字型である。堆積土は、7層に分けられる。第3層と5層は第4層のローム土で、崩落土と思われる。

(増 尾)

5) 土坑

前述した、1)から4)以外の土坑をまとめた。調査E区で検出した、第142号土坑を除く他のものは、比較的住居の付近に作られているものが多い。

平面形は、円形及び楕円形に作られているものが多い。断面形では、数基の特異なものを除き箱型かナベ底型である。

以下に、各溝状土坑について報告する。

第3号土坑 (第100図)

調査A区IG-14グリッドに位置する。第IV層面で、一部抜板による擾乱を受けた、褐色の不整な円形で検出した。半截後の土層観察で重複していることを確認し、本遺構の下にあるものを第4号土坑とした。規模と形状については、東側部分をつかみきれず明確にできないが、およそ2m程の不整楕円形と思われる。深さは45cmある。堆積土は2層に分けられる。自然堆積と思われる。遺物は、第1層中より縄文時代中期末から後期に比定される土器片が出土した。

第4号土坑 (第100図)

調査A区IF・G-14グリッドに位置する。第3号土坑調査時に、土層観察で本遺構が古いと確認した。第3号土坑に上部を壊されているため、規模と形状については明確にできないが、壁の立ち上がりラインから、円筒形で上部が皿状に開く特異な形状をしていたものと思われる。底面は平坦な1m程の楕円形で、筒形に掘り込まれる部分より北側にずれている。深さは1.20mある。堆積土は6層に分けられる。第6層は、第V層起源の浮石土で埋められているほか、第2層から4層までも第IV層起源のもので人為堆積と判断される。遺物は出土しなかった。

第6号土坑 (第100図)

調査A区IG-17・18グリッドに位置する。表土除去後、直下の第IV層面で1m程の暗褐色のプランで検出した。本遺構の北西壁部分は小土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。本遺構の半截時に、堆積土と壁の境を捉えることができず、トレンチを設定し掘り進めたが南側の立ち上がりを掘むことができず大きく掘り壊してしまった。そのため、規模と形状については不明である。底面直上に黒色土の薄層が堆積していたことから、底面は掘りすぎにすぎない。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは約35cmである。堆積土は2層に分けられる。

第1層は、第IV層に近似した土で人為堆積の可能性が高い。遺物は、円筒上層式に比定される土器片が数点と、石冠が出土した。石冠は、北側の僅かに捉えた壁に接して、ほぼ直立した状態で出土した。

第7号土坑 (第100図)

調査A区IF-16・17グリッドに位置する。小土坑B列から3mほど離れて検出した。規模

的にやや大きく単独であるため、本項に含めた。規模と形状は、開口部1m×0.80m、底面0.75m×0.60mの不整な円形で、深さは40cmある。堆積土は3層に分けられる。自然堆積と思われる。遺物は出土しなかった。

第8号土坑 (第100図)

調査A区1E-17グリッドに位置する。東側調査区境界に検出し、一部拡張して掘り上げた。規模と形状は、開口部が1.35m×1.25mの不整円形で、底面が1.35m×1.10mの楕円形で、底面は開口部より東にずれている。深さは60cmある。堆積土は3層に分けられる。為堆積と考えられる。土器片が1点出土した。

第22号土坑 (第100図)

調査A区1F-20グリッドに位置する。近接して、第23a号土坑と小土坑C列がある。規模と形状は、開口部径が約1m、底面径が80cm程の円形である。堆積土は2層にわけられる。人為堆積か自然堆積か判断しかねる。遺物は、第1層より数点の土器片が出土した。

第23a号土坑 (第66図)

調査A区1F-20グリッドに位置する。第IV層面に円形のプランで検出した。規模と形状は、開口部が1.20m×1.10m、底面は1m程の共にほぼ円形である。深さは30cmある。堆積土は3層に分けられ、自然堆積土と判断した。本遺構完掘後に、底面の東側に浅い楕円形の窪みを確認した。この窪みが小土坑C列を構成する一つの土坑の底面であると判断し、窪みを第23b号土坑として区別した。第23b号土坑と本遺構の新旧関係は不明である。遺物は出土しなかった。

第28号土坑 (第100図)

調査A区1F・G-14グリッドに位置する。第3号、第4号土坑の北に近接してある。規模と形状は、開口部が0.86×0.63m、底面は0.65m×0.54mの不整な円形で、深さは35cmある。規模と形状では小土坑列のものと同じであるが、単独であるため本項に含めた。堆積土は2層に分けられた。自然堆積と考えられる。遺物は出土しなかった。

第51号土坑 (第101図)

調査A区1i-14グリッドに位置する。第6号住居跡と第118号土坑の間にある。規模と形状は、開口部が1.15m×0.94m、底面が0.90m×0.70mの不整な円形である。深さは20cmで、断面形は皿状である。堆積土は3層に分けられる。堆積状態から見て人為堆積の可能性がある。遺物は、底面より円筒上層式土器が出土した。

第52号土坑 (第66図)

調査A区1F-56・57グリッドに位置する。第59号フラスコ状土坑と重複しており、本土坑が新しい。規模は、開口部が2.40m×1.95m、底面が1.93m×1.55mの不整楕円形である。深さは、1.20mある。周壁はほぼ直に立ち上がり、上部近くで外側に開く。堆積土は13層に分け

られる。第2層は、第VI層起源の埋土であるほか、前層に第V層起源のロームの細ブロックを混入する。堆積状態から人為堆積と判断される。遺物は、第11層中より廃棄された、榎木林式に比定される土器が出土した。

第69号土坑（第101図）

調査A区北側IG-57グリッドに位置する。規模と形状では小土坑列のものと同じであるが、単独であるため本項に含めた。大型のフラスコ状土坑が近接してある。規模と形状は、開口部が0.70m×0.55m、底面が0.55m×0.45mの円形で、深さは25cmである。堆積土は3層に分けられる。遺物は出土しなかった。

第80号土坑（第101図）

調査B区IK・L-71・72グリッドに跨って位置する。規模は、開口部が2.00m×1.25m、底面は1.45m×0.90mであり、深さは65cmある。平面形状は楕円形で、断面形状はナベ形である。堆積土は2層である。遺物は、石皿ないしは台石に使われた礫が出土した。この礫は、検出時に一部露出していたほか、土層断面でも直立した状態であり立石の可能性もあったが、掘形は確認できなかった。埋土に混入したものと考えたい。

第81号土坑（第101図）

調査A区IF-24グリッドに位置する。北側に近接して第25号土坑墓がある。規模は、開口部が1.70m×1.25m、底面は1.54m×1.00mであり、深さは45cmある。平面形状は不整形円形で、断面形状はナベ形である。堆積土は3層である。遺物は出土しなかった。

第84号土坑（第101図）

調査A区ほぼ中央IF-31グリッドに位置する。円形のプランで検出した。本土坑半裁時にミスで北側を大きく破壊してしまったため規模と形状は不明である。深さは73cmである。堆積土は4層に分けられる。自然堆積と思われる。遺物は出土しなかった。

第85号土坑（第101図）

調査B区IH-67グリッドに位置する。大型のフラスコ状土坑群のなかにある。規模と形状は、開口部が1.25m×1.10mのほぼ円形で、底面は0.80m×0.65mの隅丸方形である。深さは60cmある。周壁は、底面からほぼ直に立ち上がり、中位で外側に開く。堆積土は6層に分けられる。自然堆積か人為堆積か判断しかねる。遺物は出土しなかった。

第91号土坑（第101図）

調査B区IL-72グリッドに位置する。第79号溝状土坑と第80号土坑の間にある。円形のプランで検出した。半裁時のミスで底面を残し東側の壁を大きく破壊してしまった。開口部の規模は不明である。底面は0.86m×0.70mのほぼ円形である。深さは53cmである。堆積土は3層に分けられる。自然堆積と思われる。遺物は出土しなかった。

第93号土坑（第101図）

調査A区とB区の境IH-64グリッドに位置する。町道撤去前にその境で検出し、撤去後に完掘した。町道建設の際に遺構の上部が大きく壊されている。規模は、開口部径が0.95m、底面径が0.60mほどの円形である。深さは60cmある。堆積土は5層に分けられる。堆積の状態から人為堆積と考える。遺物は、堆積土中より石鏃が出土した。

第94号土坑（第101図）

調査B区IM-72グリッドに位置する。調査区西側境界にあり、規模と形状は明確にできないが、開口部径が0.80mほどの楕円形になるものと思われる。深さは90cmある。堆積土は4層分けられる。柱穴状の堆積状態を示す。遺物は出土しなかった。

第95号土坑（第101図）

調査B区中央部IM-78グリッドに位置する。近接して同様な第96号土坑があるが、比較的遺構の希薄な部分である。規模と形状は、開口部径が0.60m、底面径が0.50mほどの円形である。深さは45cmある。堆積土は4層分けられる。遺物は出土しなかった。

第96号土坑（第101図）

調査B区中央部IM-78グリッドに位置する。近接して第95号土坑があるほか、西側に約5m離れて第12号住居跡がある。規模と形状は、開口部径が0.60m、底面径が0.40mほどの不整形円形である。深さは35cmある。堆積土は1層だけで、遺物は出土しなかった。

第101号土坑（第102図）

調査B区IN・O-76グリッドに位置する。一部調査区を拡張して完掘した。規模は、開口部が1.60m×1.15m、底面は1.46m×1.10m、深さは35cmある。平面形状は隅丸方形で、断面形状はナベ形である。底面の北西側が、オーバーハングする。堆積土は2層である。遺物は出土しなかった。

第106a号土坑（第102図）

調査A区Ii-11グリッドに位置する。第106号フラスコ状土坑と重複しており、本遺構が新しい。規模と形状は、開口部が1.25m×1.10m、底面が1.10m×0.90mの不整形円形である。深さは20cmで、断面形は皿状である。堆積土は2層に分けられる。堆積状態から見て自然堆積と判断する。遺物は出土しなかった。

第108号土坑（第102図）

調査B区IH-65グリッドに位置する。フラスコ状土坑群のなかに検出した。規模と形状は、開口部0.95m×0.75m、底面0.85m×0.60mの不整形楕円形で、深さは48cmある。堆積土は3層に分けられる。自然堆積と思われる。遺物は出土しなかった。

第109号土坑 (第102図)

調査B区 I i - 64グリッドに位置する。町道撤去後に検出した。フラスコ状土坑群のなかにあり、同規模の小土坑も近接してある。規模と形状は、開口部1.25m×1.10m、底面0.85m×0.60mの不整な楕円形で、深さは50cmある。堆積土は5層に分けられる。最下層に第IV層に相当する土が見られる他、堆積状態から人為堆積と判断する。遺物は出土しなかった。

第112号土坑 (第103図)

調査B区 I i - 64・65グリッドに位置する。第90号フラスコ状土坑と重複しており、本遺構が新しい。規模と形状は、開口部が1.35m×1.15m、底面は0.92m×0.56m、深さは86cmある。形状は共に楕円形である。周壁は、底面からほぼ直に立ち上がり、中位で外側に開く。堆積土は4層に分けられる。自然堆積か人為堆積かと判断しかねる。遺物は出土しなかった。

第113号土坑 (第102図)

調査A区 I H - 56グリッドに位置する。第15号住居跡ほか、住居と土坑が密集する部分にある。規模と形状は、開口部が1.72m×1.37m、底面は1.57m×1.23mの不整円形である。深さは26cmある。堆積土は1層で、堆積土中から縄文時代後期初頭に比定される土器が出土した。

第114号土坑 (第102図)

調査A区 I H - 54・55グリッドに位置する。規模と形状は、開口部が1.68m×1.42m、底面は0.85m×0.75mの不整円形である。深さは60cmある。開口部に比べ底面が小さく、断面ボール状である。堆積土は1層で、縄文時代後期初頭に比定される土器と、土製品が出土した。

第116号土坑 (第102図)

調査A区 I H - 53グリッドに位置する。第121号フラスコ状土坑の開口部と重複しており、本遺構が新しい。部分的に抜根による擾乱がみられるが、規模と形状は開口部が2.20m×1.40m、底面が1.65m×1mの楕円形である。深さは72cmある。壁はほぼ直であるが、底面は緩く窪む。堆積土は1層である。遺物は出土しなかった。

第120号土坑 (第103図)

調査A区 I H - 57グリッドに位置する。第15号住居跡内の北側に重複してある。本遺構が古い。土層断面から、第123号土坑との重複も確認された。本遺構が新しい。規模と形状は、開口部が2.10m×1.90m、底面が1.70m×1.30mの不整形である。深さは45cmある。壁は底面から緩く立ち上がる。堆積土は2層である。黒色土を主体にした土で、埋め戻された感じがある。遺物は、第1層中より縄文時代中期から後期初頭に比定される土器が出土した。

第122号土坑 (第102図)

調査A区とB区の境 I i - 64グリッドに位置する。規模と形状は、開口部が1.50m×1.45mのほぼ円形で、底面は1.05m×0.90mの不整円形である。深さは80cmある。周壁は、底面から

ほぼ直に立ち上がり、中位で外側に開く。堆積土は5層に分けられる。自然堆積か人為堆積か判断しかねる。遺物は出土しなかった。

第123号土坑 (第103図)

調査A区I H-57グリッドに位置する。第15号住居跡内の北側に重複してあるほか、第120号土坑とも重複しており、本遺構が古い。規模と形状は不明である。土層図からの深さは52cmある。堆積土は1層で、堆積土中より縄文時代中期から後期初頭に比定される土器が出土した。

第127号土坑 (第103図)

調査B区I i-65グリッドに位置する。第90号フラスコ状土坑及び第112号土坑と重複している。第112号土坑より古い、第90号フラスコ状土坑との関係は不明である。規模と形状についても第90号フラスコ状土坑ともに掘り上げてしまったため不明である。残った部分から、底面はほぼ円形、開口部は隅丸方形であったと思われる。深さは67cmある。周壁は、底面からほぼ直に立ち上がり、中位で外側に開く。堆積土は5層に分けられる。自然堆積か人為堆積か判断しかねる。遺物は出土しなかった。

第128号土坑 (第103図)

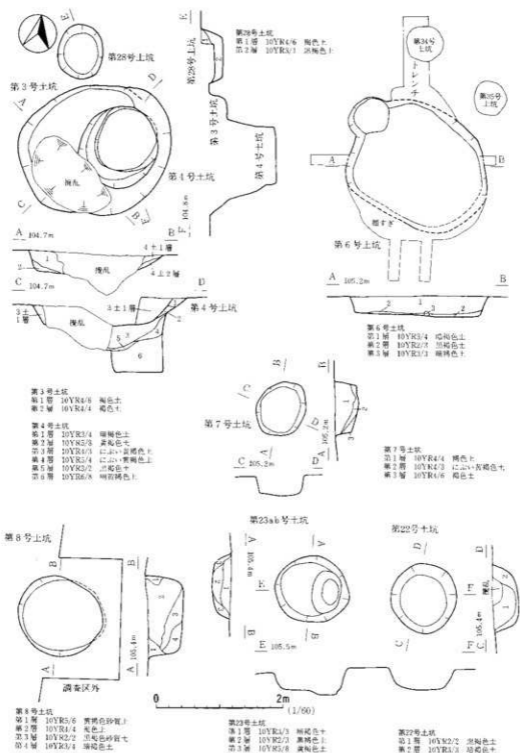
調査B区I i-65グリッドに位置する。第90号フラスコ状土坑の南西隅と重複している。本遺構の南西部分は、第90号フラスコ状土坑ともに掘り上げてしまったため不明である。堆積土についても同様である。規模と形状は、開口部径が $0.90\text{m} \times 0.80\text{m}$ 、底面径が 0.70m のほぼ円形と思われる。深さは検出面から50cmある。遺物は出土しなかった。

第130号土坑 (第104図)

調査D区II E-155グリッドに位置する。南側に4m程離れて第17号住居跡と第131号溝状土坑があるが、概して遺構は希薄である。調査区東側境界に検出したため、調査区を拡張して掘り上げた。規模は、開口部が $1.25\text{m} \times 1.20\text{m}$ 、底面が $0.78\text{m} \times 0.73\text{m}$ である。深さは1.83mと深い。形状は、開口部及び底面がほぼ円形である。周壁のうち、南北壁は底面から1m程直に立ち上がり、開口部近くで外側に開く。東西壁は、底面から30cm程上がった所から、幅20~25cm、奥行き最大20cmの横穴が、3個連続して対になって掘られている。堆積土は5層に分けられる。第1層の上位は掘りとばしてしまったが、第1層とほぼ同じである。第2層と第5層は、第VI層の粘土である。各層には多量の炭化物が混入していた。人為堆積と判断される。遺物は出土しなかった。

第136号土坑 (第103図)

調査D区II B-150グリッドに位置する。第18号住居跡と第134号溝状土坑の間にある。規模と形状は、開口部が $1.60\text{m} \times 1.45\text{m}$ 、底面が $1.25\text{m} \times 0.93\text{m}$ の不整形円形である。深さは80cmある。堆積土は7層に分けられる。下位の第6、第7層は崩落土と自然堆積土と思われるが、



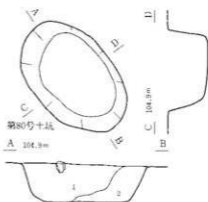
第100图 土坑(1) 3·4·6·7·8·22·23a·b·28号土坑



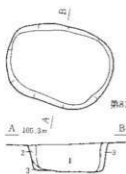
第51号土坑
A 104.3m B
第51号土坑
第1層 10YR4/6 褐色土
第2層 10YR3/4 暗褐色土
第3層 10YR4/6 褐色土



第69号土坑
A 105.1m B
第69号土坑
第1層 10YR2/4 暗褐色土
第2層 10YR4/4 褐色土
第3層 10YR4/6 褐色土



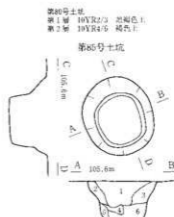
第80号土坑
A 104.9m B C D
第80号土坑
第1層 10YR2/3 暗褐色土
第2層 10YR4/6 褐色土



第81号土坑
A 106.3m B
第81号土坑
第1層 10YR3/4 暗褐色土
第2層 10YR5/6 暗褐色土
第3層 10YR1/6 褐色土



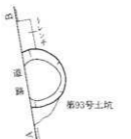
第84号土坑
A 104.5m B
第84号土坑
第1層 10YR3/4 暗褐色土
第2層 10YR1/3 暗褐色砂質土
第3層 10YR2/3 暗褐色砂質土
第4層 10YR5/6 暗褐色土



第85号土坑
A 105.6m B C D
第85号土坑
第1層 10YR2/3 暗褐色土
第2層 10YR4/6 褐色土



第91号土坑
A 104.8m B
第91号土坑
第1層 10YR3/3 暗褐色土
第2層 10YR2/2 黑褐色土
第3層 10YR1/1 褐色土



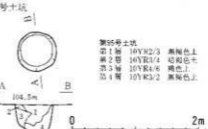
第93号土坑
A 105.4m B
第93号土坑
第1層 10YR3/4 暗褐色土
第2層 10YR2/3 暗褐色土
第3層 10YR3/3 暗褐色土
第4層 10YR3/4 暗褐色土
第5層 10YR2/3 暗褐色土



第94号土坑
A 104.7m B
第94号土坑
第1層 10YR3/4 暗褐色土
第2層 10YR1/6 褐色土
第3層 10YR2/3 暗褐色土
第4層 10YR2/2 黑褐色土



第96号土坑
A 104.5m B
第96号土坑
第1層 10YR3/1 黑褐色土



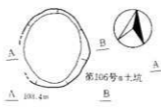
第95号土坑
A 104.5m B
第95号土坑
第1層 10YR2/3 暗褐色土
第2層 10YR1/4 褐色土
第3層 10YR4/6 褐色土
第4層 10YR3/2 暗褐色土

第101图 土坑(2) 第51·69·80·81·84·85·91·93·94·95·96号土坑

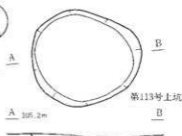
(1/60)



第101号土坑
第1層 10YR2/2 黑褐色土
第2層 10YR4/6 褐色土



第106号a土坑
第1層 10YR1/3 暗褐色土
第2層 10YR4/4 褐色土



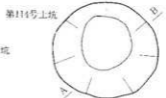
第113号土坑
第1層 10YR2/1 黑色土



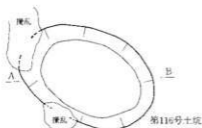
第108号土坑
第1層 10YR2/3 暗褐色土
第2層 10YR2/2 黑褐色土
第3層 10YR4/6 褐色土



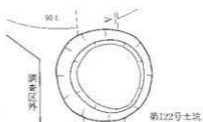
第109号土坑
第1層 10YR2/1 黑色砂質土
第2層 10YR4/6 褐色土
第3層 10YR3/3 暗褐色砂質土
第4層 10YR3/4 暗褐色土
第5層 10YR5/8 灰褐色土



第114号土坑
第1層 10YR2/2 黑褐色土



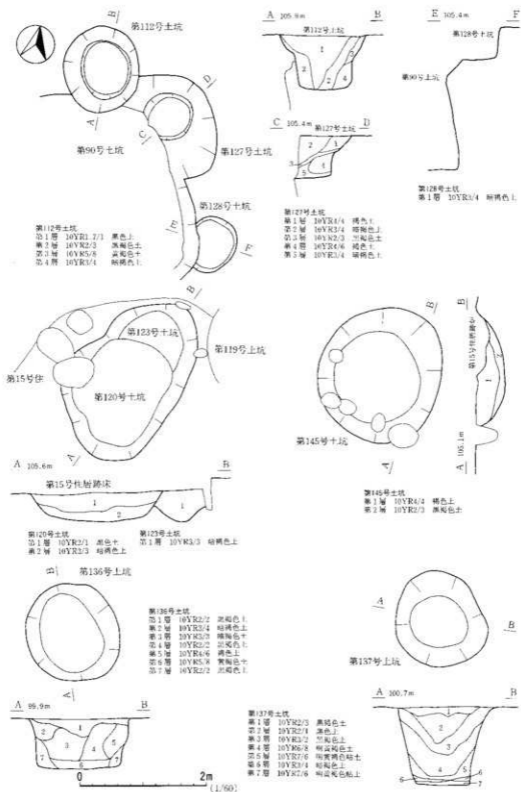
第116号土坑
第1層 10YR2/2 黑褐色土



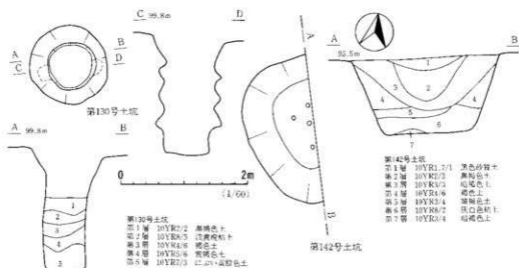
第122号土坑
第1層 10YR3/3 暗褐色土
第2層 10YR1/6 褐色土
第3層 10YR2/4 暗褐色土
第4層 10YR6/6 暗灰褐色土
第5層 10YR1/3 暗褐色土



第102図 土坑(3) 第101・106a・108・109・113・114・116・122号土坑



第103图 土坑(4) 第112-120-123-127-128-145-136-137号土坑



第104図 土坑(5) 第130・142号土坑

第1層から第5層までは堆積状態から人為堆積と考える。遺物は出土しなかった。

第137号土坑 (第103図)

調査D区II D・E-142・143グリッドに位置する。規模と形状は、開口部が1.55m×1.38m、底面が0.92m×0.82mの不整形円形である。深さは1.25mある。堆積土は7層に分けられる。第5層下位の層は周壁の崩落土で、自然堆積土と判断する。遺物は出土しなかった。

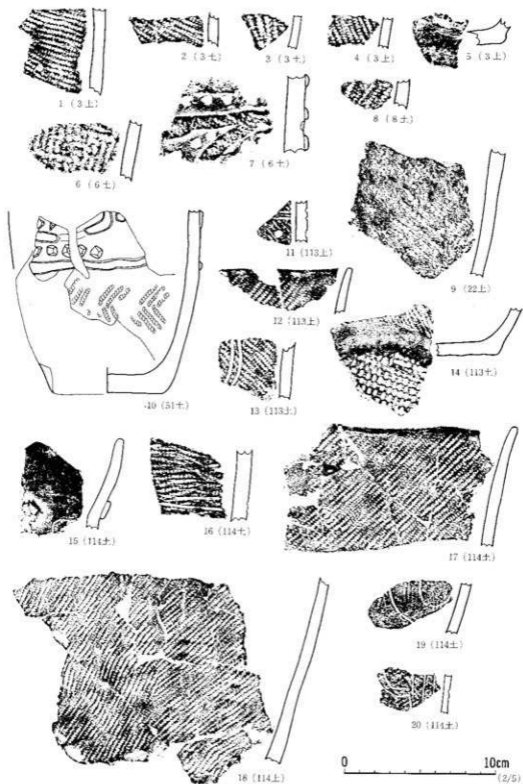
第142号土坑 (第104図)

調査E区II L-192グリッドに位置する。調査E区内の谷地形部分で検出した。調査日数の都合で、完掘することができなかった。規模と形状については不明である。深さは土層観察面から1.20mである。堆積土は7層に分けられる。第3層は中振浮石粒が混入する、第III層相当の土である。堆積状態から自然堆積と判断する。底面から4個の小穴を検出した。小穴の径は5cm程で、打ち込みによる杭跡と思われる。この小穴と推定される形状及び堆積土の状態から、縄文時代早期に帰属する落し穴と思われる。遺物は出土しなかった。

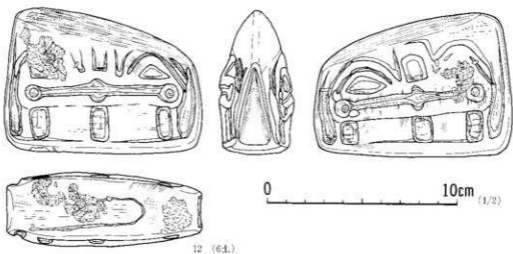
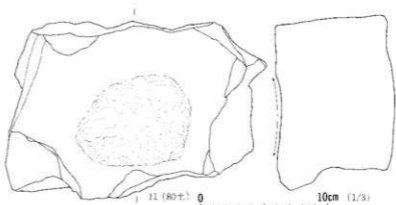
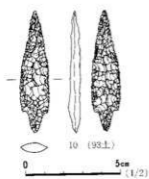
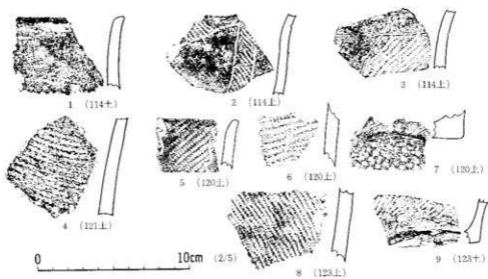
第145号土坑 (第103図)

調査A区I H・i-57グリッドに位置する。第15号住居跡炉の土層断面で確認した。本遺構の上に炉が作られてある。規模と形状は、開口部が2.15m×1.95m、底面が1.50m×1.40mの不整形円形である。深さは、第15号住居跡床面から45cmある。堆積土は2層に分けられる。褐色土を主体にした土で、緻密で硬い。人為堆積の可能性がある。遺物は出土しなかった。

(小田川)



第105圖 土坑 出土遺物(1)



第106图 土坑 出土遺物(2)

第3節 出土遺物

本調査で出土した遺物は、総数10,400点あまりである。遺構外出土遺物の大多数は、第II層中からの出土であり、縄文時代前期から後期前半までの土器が混在して出土した。石器についても同様である。

遺物の分布については、調査A区では、グリッド26ラインから44ラインまでが無遺物範囲を除いて、遺構の集中する周辺からの出土量が多い。特に、遺構内廃棄の遺物を含む、第7号住居跡と第15号住居跡周辺からの出土頻度が高い。調査B区では、グリッド103ラインの南側のほぼ全域から出土しているほか、グリッド94から97ラインの谷部からの出土も目立つ。調査C区を含むグリッド103ラインから134ラインまでも無遺物範囲である。調査D区でも遺構の周辺部分から出土している。また、調査D区II E-147グリッドの極めて狭い範囲からは、集中して土師器が出土している。調査E区ではほとんど遺物が出土していない。以下に、本調査で出土した土器、石器、土製品について記述する。

記述の図番号について、個別説明の場合は、第107図1を(107-1)のように略して表記する。

1) 土器

遺構内と遺構外から出土した土器の総数は、9,692点である。時期的には、縄文時代前期から縄文時代後期前半までのものが出土しており、特に円筒上層c式と大木10式併行期からこれに後続する土器が主体となる。以下に、本遺跡から出土した土器について概観する。

第I群土器 縄文時代前期に比定される土器

本群の出土数は極めて少なく、出土位置もA類を除き散発的である。

A類 円筒下層a式土器(第107図6～8・10)

本類は4点だけ出土した。出土は調査B区の南側に限定される。すべて破片で全体形を把握できるものはない。(107-6)は口頸部付近の破片と思われる。無文帯に結節を回転施文し、いわゆる葦瓦状縄文にしている。胴部には複節斜縄文が施文される。(107-7)も結節回転文が横位に施文される。(107-10)は捺糸圧痕文が施文される。

B類 円筒下層b式土器(第107図9・11・12)

本類に属すると思われるものは3点ある。胴部破片で単軸絡条体の回転文が施文される。

C類 円筒下層d式土器(第107図1～5)

本類は5点ある。(107-1)は口唇部に幅の狭い無文帯をもち、直下に不整捺糸文が施文さ

れる。(107-2~4)は口縁部に撚糸圧痕文が施文されたものである。(107-4)は、太い1本の撚糸と細い2本の撚糸を巻いたものが口縁部に押圧施文された後、1段の結節回転文が施文される。胴部には付加条縄文が施文される。

第II群土器 縄文時代中期に比定される土器

調査A区からB区までのほぼ全域から出土している。

A類 円筒上層b式土器(第25図1、第32図1・2、第38図10・11、第81図8、第107図13~15)
遺構外出土のものは少なく、遺構内堆積土からの出土が多い。

口頸部文様帯の隆帯間に、馬蹄形撚糸圧痕文を施すものを本類とした。

【器形】すべて破片資料であり、全体形のわかるものはない。

【口縁部】平口縁(107-13)のものと弁状突起をもち波状口縁(81-8)になるものがある。

【口頸部文様】文様帯の幅は後統する上層c式より広く(25-1)隆帯は直線的である。隆帯上に縄文が施文される。隆帯間には、馬蹄形撚糸圧痕文のほか撚糸圧痕文が施文される(107-15)ものもある。

【胴部文様】弧状の隆帯に区画された胴部には結束第1種の羽状縄文が施文される。

B類 円筒上層c式土器(第24図1~11、第27図、第28図1~3、第29図1・4、第30図1、第31図3・4、第32図3、第33図1~3、第38図4、第75図5・6、第79図10、第81図7、第82図2、第90図1・4~6・10~12、第93図、第94図、第95図、第105図7・10、第107図16~21)

遺構内出土が多く、特に第7号住居跡堆積土内からは多量に廃棄された状態で出土した。遺構外では調査A区南側からの出土量が多い。本遺跡の主体をなす土器群の一つである。

口頸部文様帯の隆帯間に、連続刺突文を施すものを本類とした。

【器形】口縁が大きく開き、胴部の膨らみのない円筒形のものが多く、胴部に膨らみをもち、寸胴な形のもの(82-2、94図)もある。全般に大型である。

【口縁部】平口縁(27-2、94図)のものと波状口縁のものがある。波状口縁のものは、上層b式と同様な、弁状突起を有するものと、山形の突起をもち(28-2・3)波状を形作っているものがある。口唇部文様は、波状の隆帯を施すものと、コイル状の隆帯を施すもの(27-2)、刺突を施すもの(28-2)、絡糸体圧痕文が施されるもの(28-1)がある。また、口縁直下に橋状把手が付けられたものもある。(28-3、94図)

【口頸部文様】口頸部文様帯は、隆帯と隆帯間に連続刺突文を施すものが主体となる。(27-1)だけが、隆帯間に刺突と撚糸圧痕が施される。隆帯は、無文面に曲線状のものを連結させ弧状や山形の文様を横方向に展開している。弁状突起を有するものは、縦位に2条の隆帯を貼付し、口頸部波文様帯を区画しているものがある。これら隆帯上には、撚糸圧痕文が施文される。

胴部と文様帯を区画する隆帯は2条で、この隆帯上に、ボタン状の隆帯や山形突起を4方向に付けられたものもある。(27-2、29-1、82-2)

〔胴部文様〕羽状縄文を施文するものがほとんどであるが、(28-2)のように複節斜縄文が施されるものもある。

これら円筒上層c式土器のうち、(29-4、31-3・4)は隆帯間に刺突文をもつが、隆帯文様が簡素で、隆帯上に擦糸圧痕も施されていない点から、後続する円筒上層d式土器に含まれる可能性もある。

C類 円筒上層d式土器(第29図3、第30図2~5、第31図1、第33図10~13、第108図1~4、第109図1・2、第109図4~10)

遺構外のは、調査B区のグリッド70ラインに集中して出土している。また、第7号住居跡の堆積土内より、一部上層c式土器と混在して出土しているものも多い。

口頸部文様帯の隆帯文様が上層c式土器に比べ簡素であり、隆帯上に文様が施されないものや、隆帯間に文様が見られないものを本類とした。

〔器形〕口縁が大きく開き、胴部の膨らみのない円筒形のもの(29-4)と、胴部に膨らみをもつもの(30-2)がある。胴部に膨らみを持つものは寸胴で小型のものが多く、深鉢形である。

〔口縁部〕平口縁のもの、弁状突起をもち波状口縁になるものがある点で、上層c式土器と同じである。口唇部文様も同じであるが、隆帯自体の作りが雑である。弁状突起を持つものの中には、突起部分に穿孔されるものがある。

〔口頸部文様〕文様帯の幅は、口頸部と胴部の比率から見て広い。胴部との区画に2条の隆帯を用いている点で上層c式土器と変わりはない。隆帯そのものの構成にも特別相違はみられないが、簡素な作りという点では明らかである。隆帯は、無文面に付けられるものと、地文縄文の上に貼付されるもの(30-2)がある。隆帯上は、無文のものが多く、縄文が施文されるものもあるが、施文は上層c式に比べ緻密ではない。隆帯間を無文とするものが本類であるが、(29-4、30-3・4)のように刺突文が施されるものもある。この刺突についても、上層c式土器に比べて雑である。

〔胴部文様〕胴部には、斜縄文が施文されるものが多い。羽状縄文が施文されるものもあるが、(29-4、30-2)雑然としている。

D類 円筒上層e式土器(第80図9・11、第81図11、第108図5)

出土数は少ない。遺構堆積土内より破片が出土したほか、遺構外から粗製土器が出土した。(80-9・11、81-11)は沈線が施されるもので、胸骨文の一部と思われる。(108-5)は波状口縁を有するもので、波頂部のつくりから本類に属するものと考えた。

E類 大木7b式に比定される土器（第33図7～9、第38図6、第75図12、第109図3）

6点出土した。第7号・第8号住居跡の堆積土と第26号フラスコ状土坑の堆積土から出土している。第7号住居跡から出土したものは、円筒上層c・d式土器と混在して出土した。

【器形】口縁部破片であるため、全体形のわかるものはない。(33-7)を除き、頸部で屈曲する深鉢形になるものと思われる。

【口縁部】平口縁と波状口縁(33-9)のものがある。

【文様】燃糸圧痕による施文を基本としている。(33-8)は外傾する口縁部に、逆「ハ」の字状の隆帯を付け、その上から縄文を施文している。口頸部文様は、無文面に無節の原体2本を結んだものを押圧施文している。(33-9)は波状口縁を有するもので、口唇に沿って燃糸圧痕を施文するほか、口縁部文様帯と頸部文様帯を区画する、微隆起線の直下にも弧状に燃糸圧痕が施文される。(38-6)は微隆起線で口縁部文様帯を区画するもので、口縁部文様帯内をさらに馬蹄形燃糸圧痕により区画し、さらに燃糸圧痕で楕円形文を施文した中に沈線による波状文を施文している。(109-3)は口縁部に波状隆帯と突起を貼付し、燃糸圧痕を施文する。頸部の隆帯も同様であり、直下にも燃糸圧痕が施文される。(33-7)は弁状突起の破片である。口端は平坦で幅があり、突起の頂部から橋状把手が付けられる。口唇と把手に連続する隆帯は円筒上層式のものに似るが、異質な感じがあり本類に含まれる可能性があるものとして扱った。

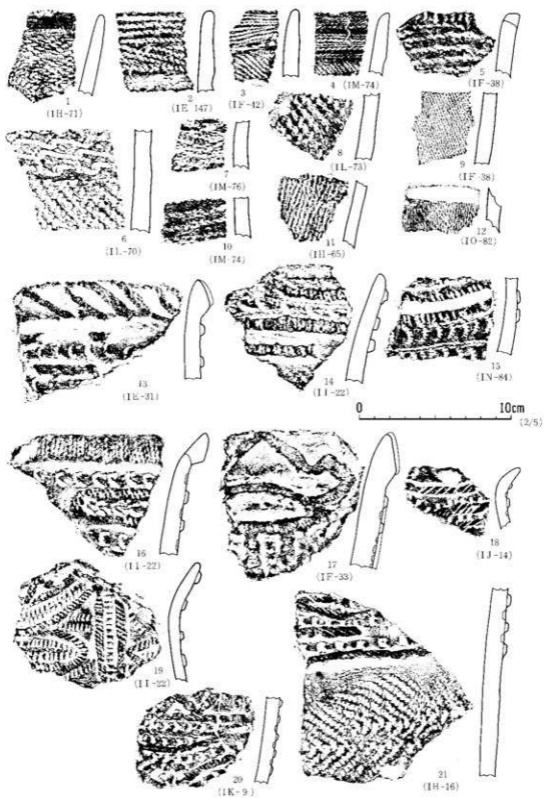
F類 椀林式に比定される土器（第12図15、第53図12、第75図8・15、第76図、第77図1・2、第78図5、第79図11～14、第83図1・2・7、第105図11・13、第109図11～16）

本類は、隆沈線と沈線を用いて文様を施文するものである。

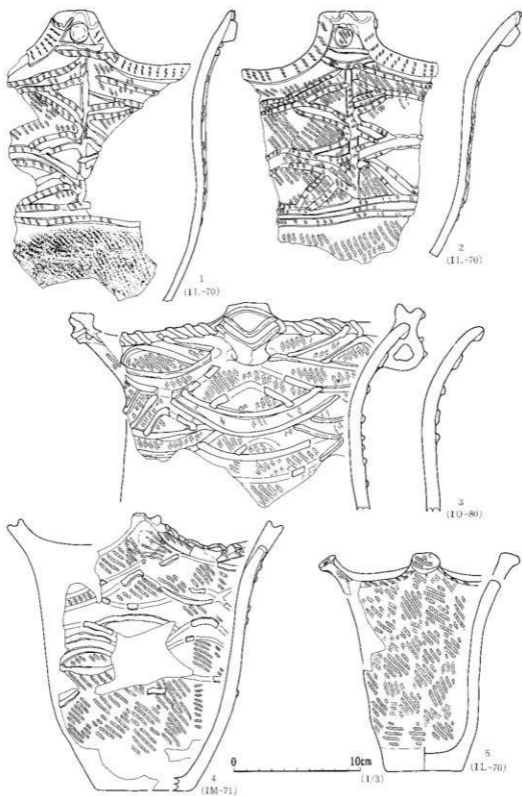
【器形】全体形がわかるものはないが、胴部から口縁に向かって外反する深鉢形になるものと、胴部が膨むもの(83-7)がある。

【口縁部】ほとんどのものが波状口縁となる。ただし、本類の粗製土器と考えられるものには平口縁のものもある。

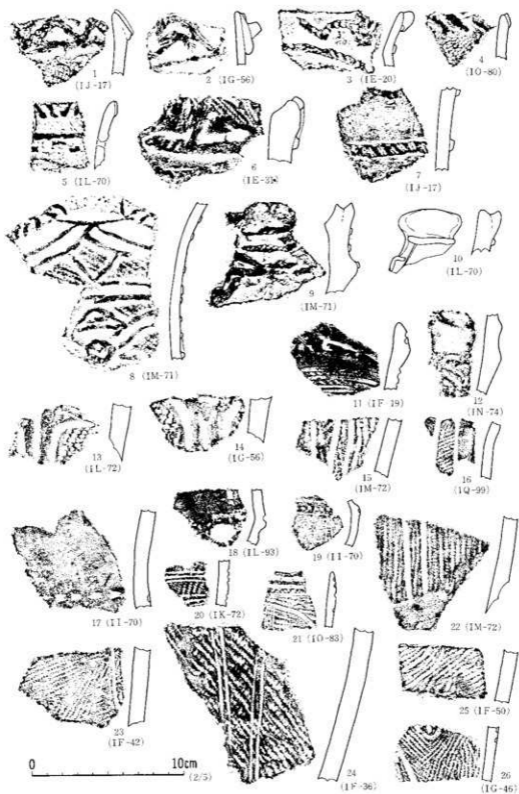
【文様】文様は、隆沈線と沈線を用いた渦巻き文、ワラビ状文に代表される。(75-8)は波状口縁の深鉢形の土器と思われる。頸部に押し引き状の刺突文を2状施し、口縁部を区画している。文様は、地文縄文を施文後に2本及び3本を一単位とした沈線で、冂形と直線を組み合わせて施文される。(76図)と(78-5)は同一個体である。緩い波状口縁の深鉢である。地文に複節縄文を施文後、隆沈線により渦巻き文を施文している。口縁部は、隆沈線で渦巻き、円形文を施文後に、丁寧に磨消されている。(77-2)は口縁部を磨消し、幅の広い横位の沈線を施している。沈線の末端は円形文と連続する。(83-7)は波状口縁を有する深鉢型の土器である。波頂部に沈線による円形文を施文するほか、口縁部から連続する沈線で波頂部の下の菱形文様を描いている。胴部上半にも3条の沈線が施される。この土器は、円筒上層e式の様相を強



第107圖 遺構外出土土器(1)



第108圖 遺構外出土土器(2)



第109圖 遺構外出土土器(3)

く残しており、本類の最古期に位置づけられるもののご教示を頂き、本類で扱った。

G類 中の平皿・最花式に比定される土器（第80図8、第81図13、第109図17～26、第110図1）

地文縄文施文後に、縦位の沈線で胴部文様を施文するものを本類とした。

【器形】全体形がわかるものはないが、(110-1)は胴部上半が膨らみ、頸部が強く内湾する深鉢形になるものと思われる。以下、(110-1)について記述する。

【口縁部】平口縁で、幅の広い無文帯をもつ。

【文様】文様は、胴部上半に横位方向の連続刺突を施し、口縁部と胴部を区画する。連続刺突文の直下から沈線文を施している。縦位の楕円形文になるものと思われる。

H類 大木10式に比定される土器及びこれに併行土器（第110図1～4、第120図1～12、第160図1～7・12～16、第180図、第220図、第220図、第410図2・7・11、第430図1、第460図、第1100図2～10・15～20、第1110図、第1120図1～6）

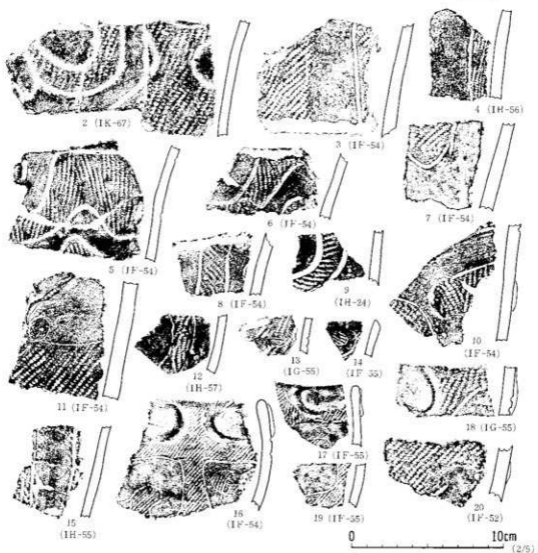
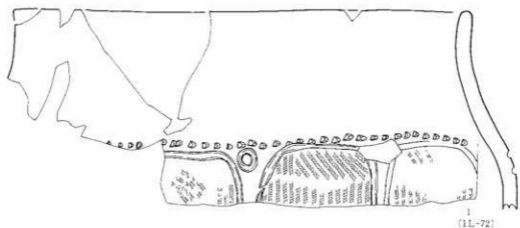
本調査区内で、円筒上層c式について主体をなす土器群である。第1号から第4号・第12号住居跡から良好な資料が出土している。

【器形】深鉢形土器のほか、壺形土器2点(11-1、43-1)とキャリバー形土器が1点(11-1)ある。深鉢形のもの、胴部下半から底部に向かってすぼまるものである。

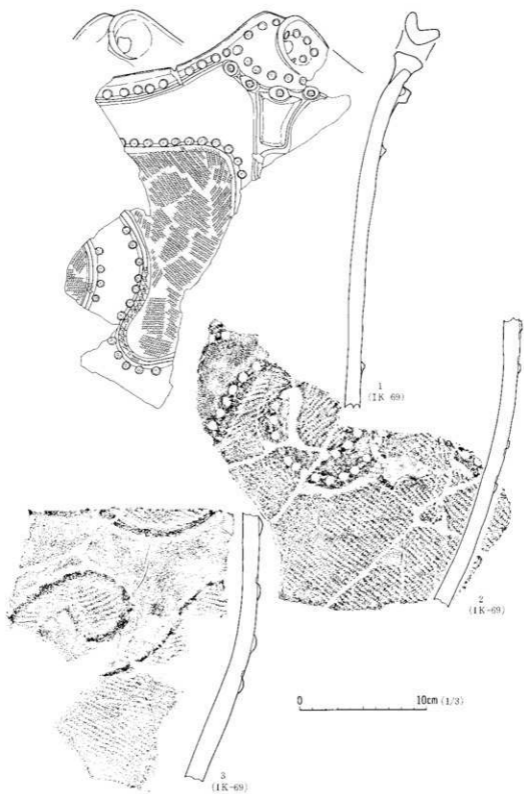
【口縁部】口縁は、平口縁のものと波状口縁のものに分かれる。波状口縁のものは、曲線の強い波状口縁のもの(21-3、111図)と、低い突起がついたような緩い波状口縁のもの(11-1・3、21-4・5)がある。(21-4)は4波状で、各波頂部に刻みが施されている。(11-3)にも刻みがある。口縁部は外反するものと、胴部上半からほぼ直に立ち上がるものがある。

【文様】文様は、口縁部を無文帯とするものが多く、胴部に「J」字状文、「U」字状文、波頭文、入り組み文が描かれる。また、鱗状隆起帯をもつもの(21-3、18-1、111図、112-1)や刺突文が施されるもの(11-3、21-3、111図)がある。

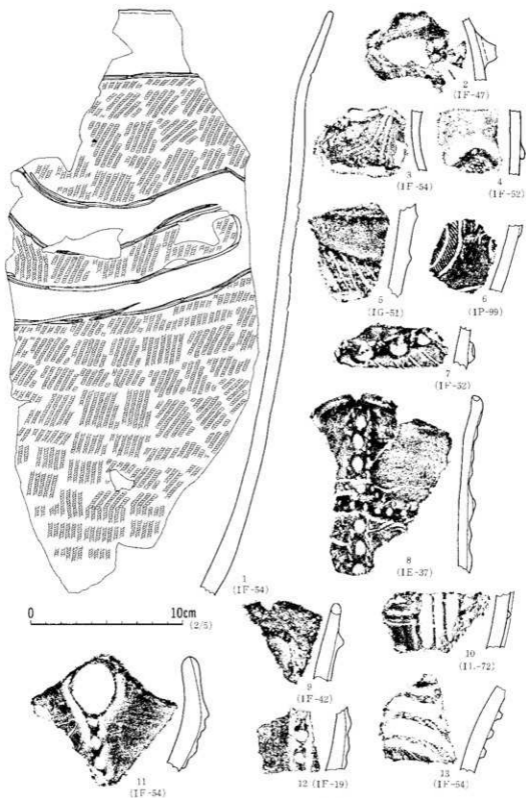
(21-4・5)は頸部に一条の沈線を施し、口縁部と胴部文様帯を区画し、胴部にも沈線で緩い波状文で胴部下半部を区画している。胴部上半には、頸部沈線から垂下する沈線で磨消しの方形区画文を施文している。(18-1)は胴部に一条の沈線を施し、胴部上半と下半を区画する。胴部文様帯には、沈線で玉抱文が施され末端には鱗状隆起帯が付けられている。(112-1)は頸部に沈線を施し、口縁部と胴部を区画する。胴部文様帯には、沈線で文様が施される。「ㄩ」字か「J」字状文の可能性が有る。湾曲する部分には鱗状隆起帯が付けられている。(11-3)は頸部の片側に一条の沈線を施している。片側が途切れているが、口縁部と胴部文様帯を区画する意図が見られる。胴部には二条の刺突列を施し胴部下半部を区画している。低い波頂部の直下には、二条の沈線により楕円形文を施し中に刺突文を充填している。(111-1～3)は



第110圖 遺構外出土土器(4)



第111图 透孔外出土器(5)



第112圖 遼寧外出土土器(6)

同一個体である。隆帯により文様帯を区画しているものである。口唇部には、一条の隆帯が付けられ口唇側に円形刺突文が施文される。波頂部には、斜め方向の橋状突起が作られ、波頂部の内外面には鱗状隆起帯が付けられている。口縁部も隆帯と円形刺突文により区画される。無文帯となるが、波頂部の直下には隆帯を弧状に張付け、さらに方形の隆帯を連結した方形文様が垂下するようである。弧状の隆帯には、さらに刺突されたボタン状の隆帯が付けられる。胴部には、隆帯による波頭文が施され、胴部下半を区画する。隆帯の内側には円形刺突文が施される。胴部文様帯は、判然としないが隆帯による「J」字状文ないし「S」字文が施されていたものと思われる。(21-3)は口縁部に沈線を施し口縁部と胴部文様帯を区画する。沈線の直下には刺突文が施される。口縁部は無文となる。胴部文様は沈線により、「J」字状文の連結ないし「S」字状文が施されていたものと思われる。また、沈線を縁取るように刺突文が施される。文様の末端と曲線部には鱗状隆起帯が付けられている。(11-4)は頸部に隆帯を貼付け、口縁部を幅の広い無文帯として区画している。隆帯には、穿孔された突起が付けられる。胴部文様は、突起の直下から沈線で区画された、磨消し文が施される。(43-1)は胴部にやや崩れた波頭文が施され、上部には「S」字文が施されていたものと思われる。(11-1)は口縁部を無文とする。胴部文様は、沈線により「U」字状文とおそらく「C」字状の文様が施されていたものと思われる。この沈線は、破損しているが波頂部から垂下する沈線と連結する。胴部下半には弧状の沈線文が施されている。

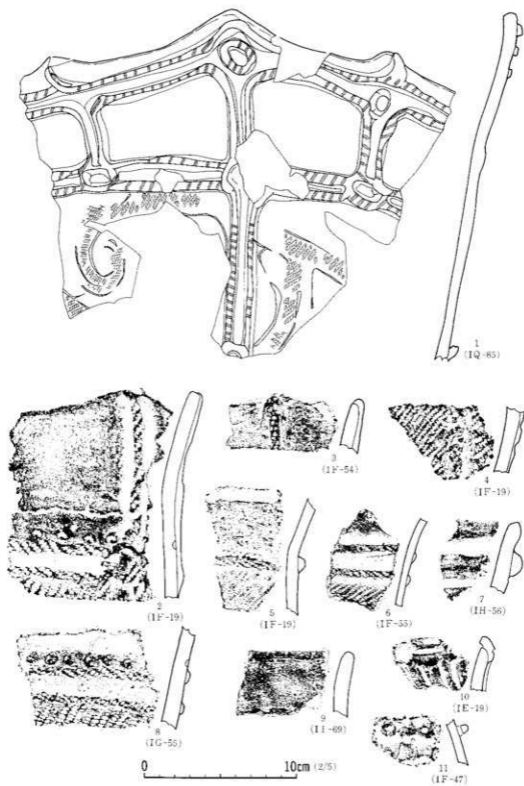
【文様施文】(11-1・4、18-1)は地文縄文に、沈線で文様が施文され、沈線で区画された文様は磨消される。これ以外のものは、地文に沈線で区画した後に、縄文が施文される。沈線で区画された文様の内部は磨消されるが、磨消しは雑でナデらる程度である。沈線は浅く、雑な感じをうける。

第Ⅲ群土器 縄文時代後期に比定される土器

調査A区からD区までのほぼ全域から出土している。A類は第15住居跡周辺からの出土量が多く、B・C類はB区の中央部から北側からの出土量が多い。

A類 牛ヶ沢遺跡第Ⅲ群土器に相当する後期初頭に位置すると考えられる土器(第40図1、第41図9・12、第50図1・2、第53図11・19~21、第79図3、第81図9、第83図4、第105図15、第110図11~14、第112図7~13、第113図)で、牛ヶ沢式と重羅式と言われるものを本類とした。

本類は、口縁部文様帯を隆帯で区画し、隆帯上に指頭圧痕文や刺突文が施されるもので、胴部文様帯に沈線で文様を施文し、磨消し縄文等をもつものである。沈線は細いが、シャープなものが多い。



第113圖 遺構外出土器(7)

【器形】破片資料が多く、全体形を把握できるものは少ない。ほとんどが深鉢形土器である。

【口縁部】口縁は、平口縁のもの(40-1、53-11)と波状口縁のもの(50-1・2、112-8・11、113-1・2)に分かれる。波状口縁のものは、4波状から8波状になるものと思われる。口縁部は、ほとんどのものが外反する。(53-11)のように大きく屈曲するものもある。

【文様】文様は、口縁部文様帯と胴部文様帯を隆帯で区画する。口縁部文様帯は、垂下する隆帯によりさらに区画される。区画する隆帯上には、指頭圧痕や燃糸圧痕、刺突等が施文される特色がある。胴部文様帯は、「J」字状文、「U」字状文、波頭文等の磨消し縄文が施される。また、鱗状隆起帯をもつもの(50-1)もある。(40-1)は連続指頭圧痕を施した隆帯で、口縁部と胴部を区画する。口縁部文様帯は、無文であり、口唇から垂下する「ノ」字状の隆帯に区画される。胴部文様帯は、口縁部を区画する隆帯と同様の隆帯で区画される。胴部文様は、蛇行する沈線文が施され、充填縄文施文後に磨消しが施される。(50-1)は縄文が施文される隆帯で、口縁部と胴部を区画する。口縁部文様帯は、無文であり、波頂部から垂下する隆帯に区画される。胴部文様帯は、胴部上半と下半に分けられる。胴部上半は「J」字状文が、下半は波頭文が沈線で施文される。磨消し充填縄文が施文される。波頭文の屈曲部には鱗状隆起帯が付けられる。(50-2)は口縁部と胴部を区画する隆帯上に刺突文が施文されるものである。口縁部文様帯は無文で、波頂部直下に隆帯で円形文が付けられる。胴部文様帯は、連続指頭圧痕を施した隆帯で区画される。胴部文様は、破片であり判然としないが、沈線で曲線文が施される。縄文は充填縄文である。(112-8)は波状口縁の波頂部に刻みが施される。頸部に刺突文を施した隆帯を付け、口縁部と胴部を区画する。波頂部からは、連続指頭圧痕を施した隆帯が縦位に施され、隆帯を縁取るように刺突が施文される。(113-1)は頸部に燃糸圧痕を施した2条の隆帯を付け、口縁部文様帯と胴部文様帯を区画する。口縁部文様は、同様な隆帯が付けられるほか、波頂部から垂下する隆帯でさらに区画される。口縁部の隆帯間には隆帯で、円形文が付けられる。胴部文様帯は、縦位の隆帯に区画され、沈線で曲線と渦巻き文が施文される。縄文は充填縄文である。(113-2・8)は縄文を施文した2条の隆帯で、口縁部文様帯と胴部文様帯を区画する。波頂部からは垂下する隆帯が付けられる。口縁部には縄端刺突が連続して施文される。口唇部裏面には、鱗状隆起帯が付けられている。

B類 弥栄平(2)遺跡第V群土器に相当し、第III群A類に後続するものと考えられる土器(第114図1~12)で、弥栄平(2)式と沖付式と言われるものを本類とした。

本類は、渦巻き沈線文と平行沈線文で文様が構成されるもので、口縁部に隆帯やボタン状貼付帯を持つものもある。沈線は深く、太い。すべて小破片であり、復元できるものはない。

(114-1・2)は波状口縁のもので、口唇部を隆帯で縁取りその直下にボタン状隆帯がつけられる。(114-3)も波状口縁になる。山形沈線文から連続する渦巻き沈線文が施文される。

(114-5・7) は平口縁になるものと思われる。口縁直下に平行沈線文が施文される。

C類 十腰内I式に比定される土器(第114図13~26、第115図1~4)

本類は、沈線により方形区画文や曲線文、入り組み文様が施文されるものである。すべて破片であり、復元できるものはない。(114-25) 小型の壺形土器で沈線のみで入り組み文が施文される。(114-13、17~19) は沈線により方形区画文が施文されるものである。(114-26、115-1~4) は同一個体と思われる、大型の壺形土器の破片でカメ棺の可能性もある。(114-13) の磨消し縄文以外は、すべて沈線のみで文様を構成する。

第IV群土器 縄文時代中期中葉から後期前半期に比定される粗製土器

本類は、特徴的な文様を持たない、無文あるいは地文のみの土器をこの群であつた。器形及び施文文様から細分される。

A類 口縁部が折り返し口縁となるもの

折り返し部分が無文帯となるもの(第52図1、第53図2、第75図10、第79図14、第83図5、第115図17~19・21、第116図1~4)と、折り返し部分に縄文が施文されるもの(第115図20・22)がある。(115-17・18)の無文帯部は指頭圧痕で成形されている。無文帯部は、幅の広いものと(52-1)のように口唇を僅かに折り返しただけのものがある。折り返し部分に縄文が施文されるものは、地文の縄文と同じ原体が施文される。

B類 口縁部が無文帯となるもの

無文帯が地文と同じ原体による撚糸圧痕で区画されるもの(第41図6、第115図5~10)と、意図して磨消されているもの(第58図1、第61図1・3・5、第83図8、第117図1~3・11)がある。また、口唇部がある程度の幅で外傾し無文となるもの(第53図7、第78図9・10、第79図1・12、80-5、第83図1、第116図3・6・8・24)がある。

C類 口端部に文様が施文されるもの

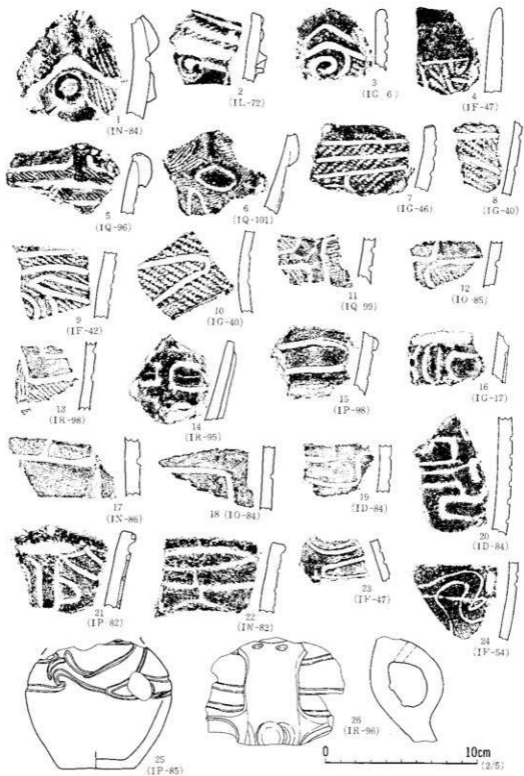
口端部に縄文が施文されるもの(第115図11~16)と沈線が施文されるもの(第77図1)がある。(115-11・13)は口唇にも横位施文される。

D類 胴部文様に結節回転文が施文されるもの(第12図2、第22図3・9、第46図1、第106図5、第115図14・16、第116図13、第118図3~6)

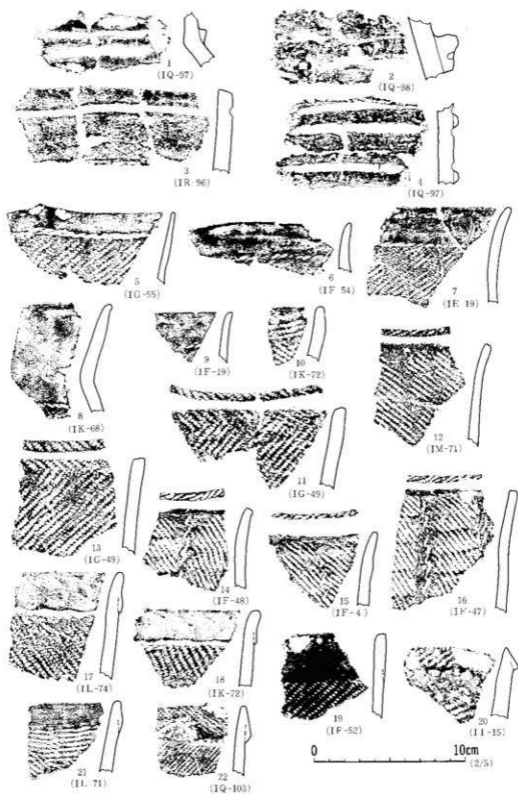
(115-11~15)は地文の縄文原体と同じ撚りの縄による結節が施文される。(115-16)は地文に0段多条文が施文され、口端にR L縄文が施文される。

E類 胴部文様に刷毛目状沈線が施文されるもの(第83図3、第117図11~17)

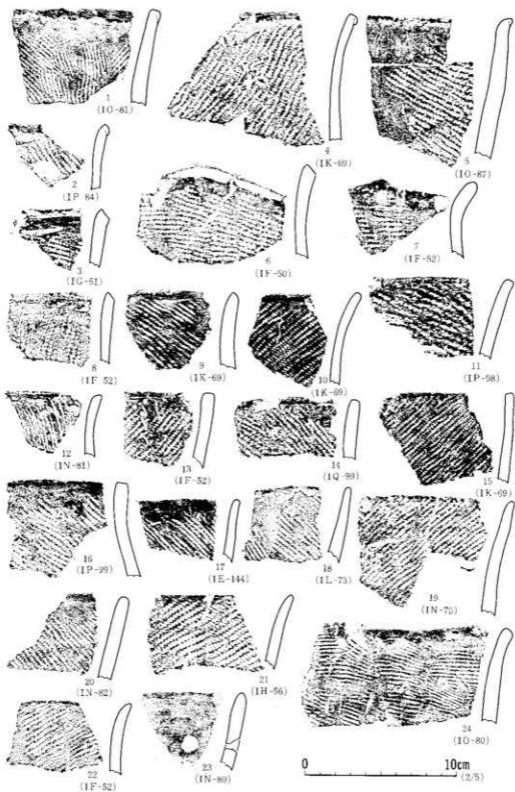
F類 無文土器(第29図2、第38図9、第52図3、第119図7)



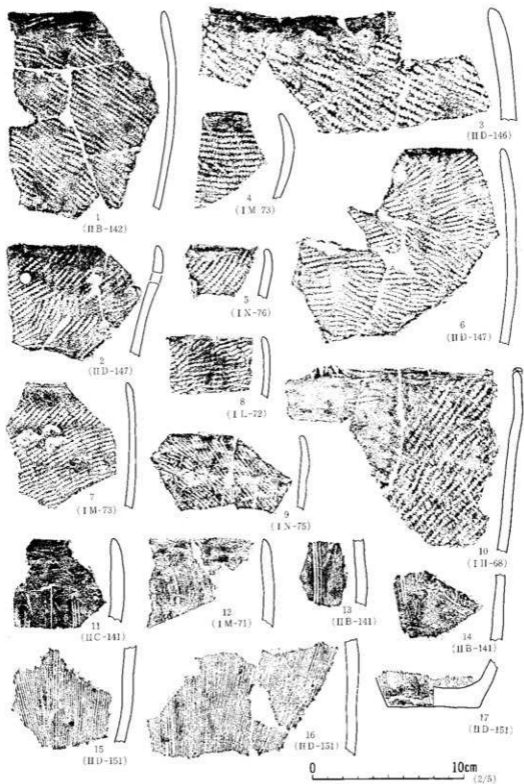
第114图 渣溝外出土土器(8)



第115圖 遺構外出土土器9)



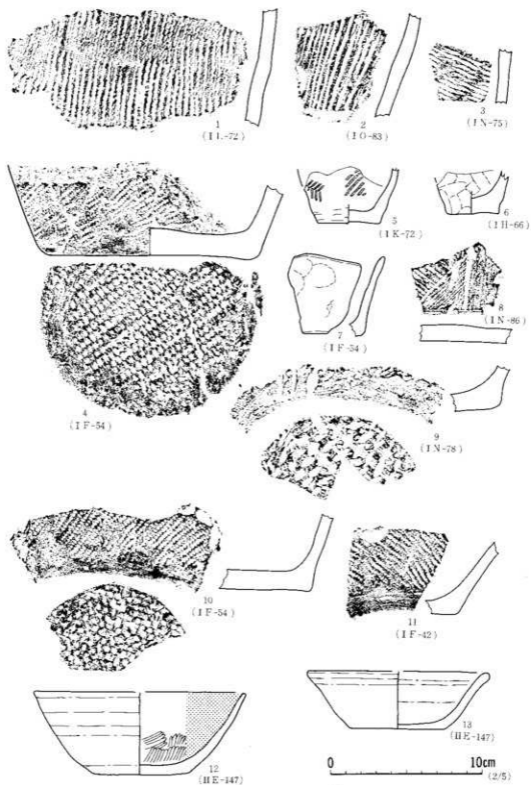
第116图 遼南外出土土器10



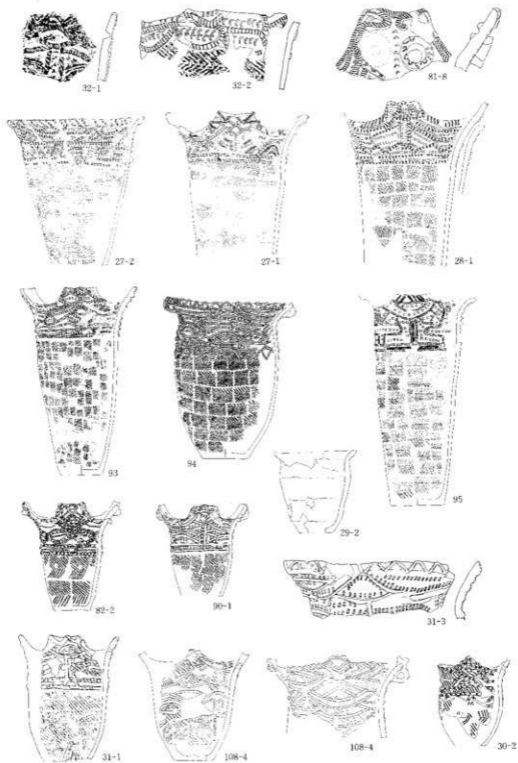
第117圖 遺構外出土土器(1)



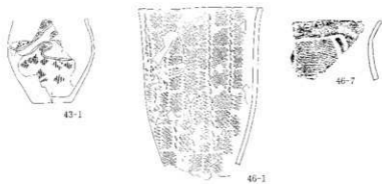
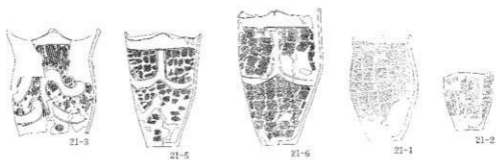
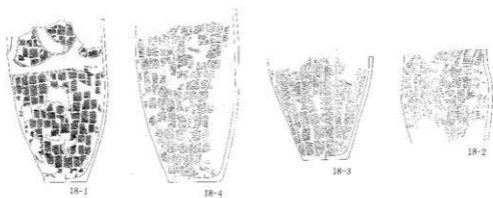
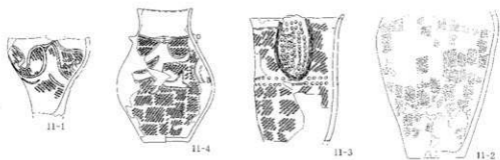
第118圖 遺構外出土器12



第119圖 遺構外出土土器13



第120図 第Ⅱ群A～C類土器



第121图 第II群H类土器



第122圖 第II群H類・第III群A類土器

第V群 平安時代の土器

土師器環（第119図12・13）10世紀頃のものと思われる。

（119-12）は外面ロクロ成形で、内面ミガキの黒色処理される。底部には糸切り痕が残る。

（119-13）は内外面ロクロ成形されるもので、底部は再調整されている。

（小田川）

2) 石器

本項では、遺構内及び遺構外から出土した石器類をまとめて記述する。石器類の総数は172点で、これらを形態的特徴から器種ごとに分けた。器種は、石鏃・石槍・石錐・石匙・石筥・楔形石器・削器・搔器・石核・磨製石斧・磨石・敲石・凹石・台石・石皿・石冠・その他がある。これらの石器類の他、報告書には採録しなかった剥片および破片は、総数444点ある。また、上記石器以外の調査中に出土した際は、総数258点であった。この使用痕跡が認められない礫のおよそ3分の1は、焼けていた。

以下に、器種別に石器の特徴を述べていく。

石鏃 遺構内21点・遺構外6点の総数27点が出土した。

基部形態から、無茎鏃Ⅰ類、有茎鏃Ⅱ類と大別され、更に諸特徴から細分される。

Ⅰ類A 凹基無茎鏃（第16図17・18、第34図6、第62図1の4点ある。）

（16-18、34-6）は、挟りが浅く平基に近い。（62-1）は、脚部を欠損しているが、基部の残存状態から本類に属すると推定した。形状的には、基部幅より鏃身の長い二等辺三角形状と、基部と鏃身の比がほぼ同じ三角形のものがある。

Ⅰ類B 尖基・平基・円基鏃（第12図22、第34図5、第39図3～5、第120図6の6点ある。）

（12-22）は、尖頭部がバルブ側に作られてある。（34-5）は、側縁を欠損するが、剥離から基部が尖っていたか湾曲していたものと推測される。（39-3～5）は、第8号住居跡からまとも出土した。小剥片の周縁だけを加工した簡易な作りである。（120-6）は、器厚から石鏃の可能性もあるが、先端に使用痕跡が認められないことから本類に含めた。

Ⅱ類 有茎鏃（第34図1～4、第39図1・2、第106図10、第120図1～5の12点ある。）

基部を挟りだし、茎を作出しているものを本類とした。厳密には、その基部形態より細分される。（120-1～3）は、挟りが浅く基部から茎部にかけて撫で肩状に作出される。形状的には、鏃身が短く小型のもの、長さとお幅の比率が2：1と中型のもの、鏃身が長いものがある。

石鏃欠損品（第34図7～10、第87図1）5点ある。形状及び大きさと剥離から石鏃の破損品と判断される。これら石鏃類の石質は、（16-3）が玉髓、ほかのは珪質頁岩である。

石槍 (第34図11・14、第39図6、第43図9、第120図8) 遺構内4点・遺構外1点の総数5点が出土した。石質はすべて珪質頁岩である。

両面調整で尖頭部を作出しているもので、形状的には尖基錐と似るが、器厚があり、石錐より大型のものを本類とした。平面形および縦断面形は柳葉状である。(34-14)は、他のものと形状的に異なり石錐の可能性もあるが、断面形状から本類に含めた。剝離調整は、(120-8)のように丁寧な押圧剝離で作られているものと、(34-11、43-9)のように大まかな剝離で作られているものがある。

石錐 (第19図12、第34図12、第54図4) 3点で、全て遺構内より出土した。

素材の一部を両面から簡易に調整して、小突起状の錐部を作出している。尖頭部とその両側縁に潰れが見られる。石質は、(54-4)が玉髓質頁岩で、ほかは珪質頁岩である。

石匙 (第22図11、第120図9) 2点ある。石質は珪質頁岩である。

いずれも縦型の石匙である。剝離調整は、急角度な背面調整だけで刃部を作出している。

(22-11)は、つまみ部分が刃部と斜行して作られる。刃部尖頭部分を欠損し、尖頭部は素材のバルブ側に作られてある。(120-9)は、丁寧な周縁調整で作られている。また、腹面の尖頭部に数個の剝離が施されている。腹面右下半部には使用光沢が認められる。

石筈 (第34図13、第54図1) 2点で、共に遺構内より出土した。石質は珪質頁岩である。

(34-13)は、短冊形で器体全面に調整が及ぶ、特に刃部として機能したと思われる上下両端には槌状の剝離が施される。(54-1)は、周縁調整が施されるが、背面には原石面、腹面にも主要剝離面の一部を残す。形状は撥形で、基部と思われる上端部分は浅く抉られるように調整されている。刃部先端には、急角度な槌状剝離が施される。

楔形石器 (第19図13、第39図9、第41図18~21、第54図2・3・6~10、第84図2、第121図3・5~7) 遺構内14点、遺構外4点の18点ある。

ここに取り上げたものは、いわゆるピエス・エスキーユとされるもので、向かい合った二辺ないし四辺の縁辺部に、階段状の剝離と潰れが認められるものをまとめた。大多数のものは、両極剝離痕と2ヶー対の刃部をもつが、剝離が刃部作出の調整か加撃によるものかは判別しかねる。平面形状は、四角形状と楕円状のものがあり、断面形は三角形ないし四辺形である。形状が不整形であるものは、加撃により破碎しているものと考えられる。第41図18・19は破碎片と思われる。これらは第41図18を除き、全て玉髓質珪質頁岩の小円礫を素材としている。器体に原石面を残しているものも多く、大きさが22mm~35mmの間に集中することから、素材そのものもほぼ同様な大きさであったと思われる。石質は、(39-9、41-18)が珪質頁岩で、ほかは玉髓質頁岩である。

不定形石器 (第12図23・24、第34図15~17、第39図7・8・10~12、第41図16・17、第44

図4、第54図5・11・12、第84図1、第120図7・10～13、第121図1・2・4）遺構内16点、遺構外9点の25点ある。石質はすべて珪質頁岩である。

剥片の縁辺ないし周縁の剝離調整を施し、刃部を作り出しているものと、微細な剝離があるもので、搔器・削器として使用されたと思われるものを本類とした。意図して形状を整えるための剝離が施されているものは少ない。(120-7・10・11)は、両面調整によりほぼ楕円形に形づくられている。調整剝離の角度も急で、搔器として機能したと思われる。(34-16・17)は、小剥片を素材に両面調整で、ノッチを作り出している。異形石器として扱われることが多い。これ以外のもは、素材の形状を変えずに簡易な剝離で刃部を作り出している。

石核 (第54図10、第121図8・9、第122図) 遺構内1点、遺構外5点の6点ある。

いずれも原石面を部分的に残している。剥片の剥取が進んでおり、母岩形状は推定できない。(121-8・9)の縁辺部分には、細かな剝離が周縁に残る。敲打による剥落と思われ、剥片を作出した後にタタキ石に使用したものと考えられる。(122-1)は剥片の剥出が進んで板状に残ったブランクと思われる。(122-3)は転打による剥片剥取で、ほぼ方形に遺存した石核である。石質は、(122-3)が流紋岩で、ほかは珪質頁岩である。

磨製石斧 (第55図1・2、第123図1～5) 遺構内2点、遺構外5点の7点ある。

完形品は(123-5)だけである。(55-2、123-1・2・4)は基部を欠損する。(55-1、123-3)は刃部を欠損する。刃部は(123-5)を除き、ほかは円刃となる。(123-4)は小型で、鏟か楔的な使用が考えられる。石質は、(55-1・2、123-4)が頁岩、(123-1)が安山岩、(123-2・3)が閃緑岩、(123-5)が緑色細粒凝灰岩である。

磨石 遺構内12点・遺構外14点の総数26点ある。

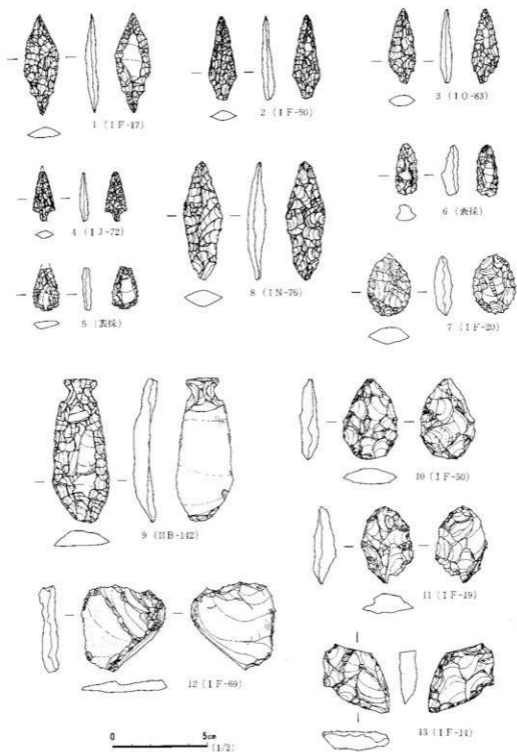
使用部位と形状から以下に細分される。

A類 石の稜(断面形の角)部分を使用しているもので、細く長い使用痕跡のもの。(第13図4、第124図1・2)の3点ある。

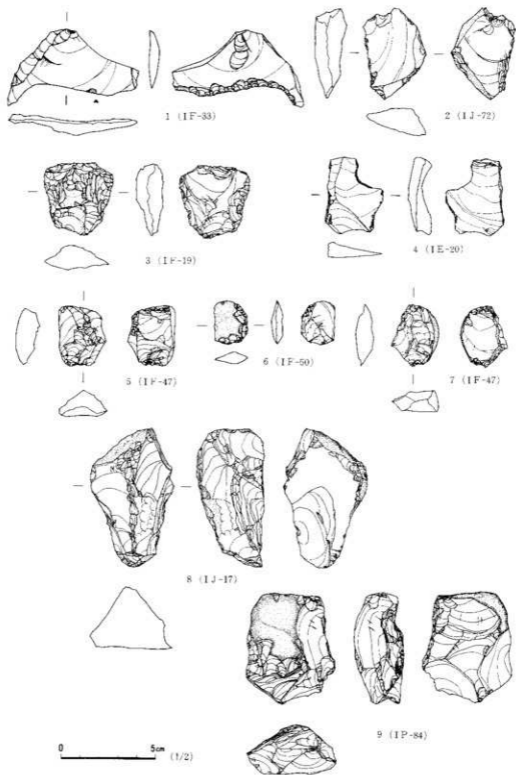
(124-1)は、スリ面の両端に整形のための剝離が施され、そのうちの一端は敲打痕が認められ、潰れている。また(124-2)は、使用面によって剥落したと思われる痕跡が残る。

B類 扁平で板状の側縁部を使用しているもので(第13図3、第35図2・4、第43図2、第84図3・第124図3・4)の7点ある。

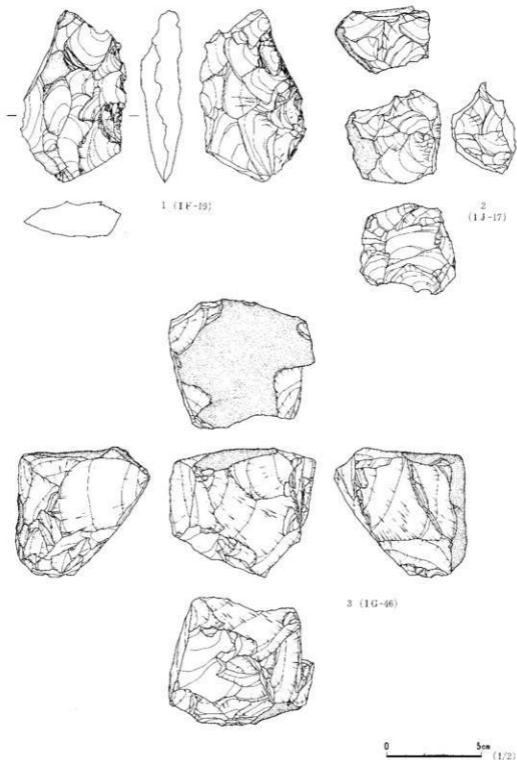
(35-2)は側縁部に剝離整形を加えた後に、スリ石として使用したと思われる。(124-3)は側縁部が使用によって幅広の面をなし、かなり使い込まれたことが伺える(124-4)は、扁平の礫の側縁部を剝離によって整形しているもので、両端部に敲打痕も認められることから、破損品を磨石として再使用しているものとかんがえられる。おそらく、もとは半円状扁平打製石器であったと思われる。



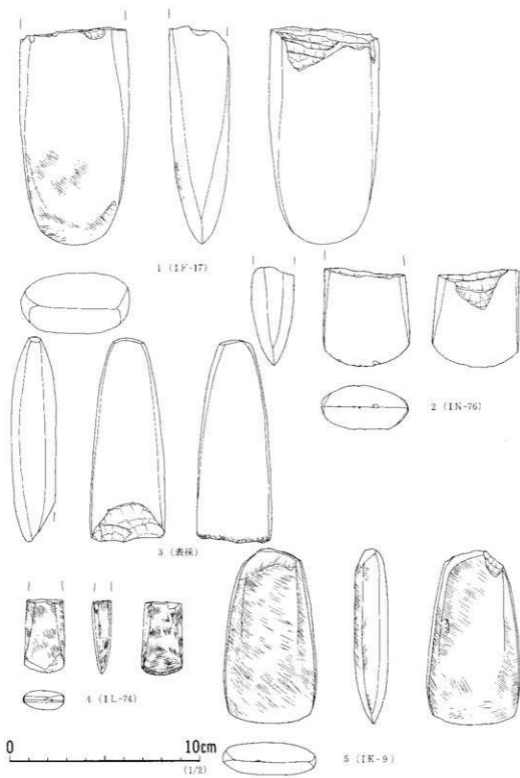
第123図 遺構外出土石器(1)



第124图 遼構外出土石器(2)



第125圖 遺構外出土石器(3)



第126図 遺構外出土石器(4)

C類 円柱状・角柱状の側縁部（断面形の面）を使用しているもので、比較的幅広い使用痕跡をもつものである。（第13図1、第25図2、第35図3、第38図13、第44図5、第85図2、第124図5～7、第125図1～4）

幅広い使用痕跡は、A類及びB類と比べて使用頻度が高かったことによって生じたものとは一概に断定はできず、最初から面を使用していることに起因するとも考えられる。スリ石に使用される礫の種類や使用部位は時代・時期差によるものとの見解が大方であるが、そればかりではなく、面の広さによる機能的な使い分けが行われた可能性も考えられる。

（35-3）は面をスリに用い、稜部分をタタキに用いた複合痕跡が存在し、スリとタタキが連続した動作で行われたことを物語る。また、（25-2）は三角柱状礫の2面に使用痕跡が認められる。遺構外出土のものは、両側縁を使用しているものは（125-4）のみである。側縁部の片方だけを使用しているもので（124-2）は、表裏両面に敲打による凹みが見られ複合痕跡を有する。また、その他のものは部分的な剝離が存在し、使用しやすいうように整形したものと思われる。

D類 球に近い形状で、全面に使用痕跡を有するもの（第125図5～7）

一般的に全面スリといわれものである。（125-6）は転がしながら使用したと思われるもので球状である。

石質は、（13-4、43-2、84-3）が砂岩、（124-4）が凝灰岩である。これ以外は、全て安山岩である。

敲石 遺構内13点・遺構外10点の総数23点ある。

使用部位と形状から以下に細分される。

A類 側縁部及び稜部に細長い使用痕跡を有するもの（第55図6、第84図6、第85図1、第125図8、第126図1）の5点ある。

（84図-6）は三角柱状の礫を石材とし、稜の部分を使用している。使用による剝落が顕著である。（125-8、126-1）は側縁部だけでなく、礫の腹面にもわずかな敲打痕が観察される。この部位を使用して敲いたともとれるが、敲打の痕跡が弱いことから手に馴染みやすくなるためのわずかな整形か、使用による器面のアレとも捉えられる。

B類 端部に使用痕跡を有するもの（第35図5、第55図3、第62図2、第84図5、第85図3、第126図2～6）の10点ある。

（126-4・5・7）は、球状の礫の端部を使用しているものである。これに対し（126-2）は折損によって本来の形状は掴めないものの、三角柱状礫の端部を使用しているものである。

（35-4）は円礫の両端部を使用しており、顕著な痕跡が残る。

C類 礫の平坦面に使用痕跡を有するもの（第13図2・7、第36図1・2、第55図5、第126

図7～9)の8点ある。

A類とB類は、実際に手に持って敲いた(能動的)ことによる使用痕跡を有するのに対し本類は敲かれた(受動的)痕跡である可能性が強いものである。従って、(126-8)は、台石の折損品の可能性もある。

石質は、(126-3・5)が珪質細粒凝灰岩であり、これ以外はすべて安山岩である。

凹石 遺構内1点・遺構外3点の総数4点ある。(第55図4、第126図10・11、第127図1)

(126-10・11)は、両面に凹みを有しており、特に(126-11)は発達した凹みが3つ連続して並んでいる。(127-1)は、凹み部分の周辺に剝落が顕著であることから、敲打による剝落の可能性も考えられる。石質は、すべて安山岩である。

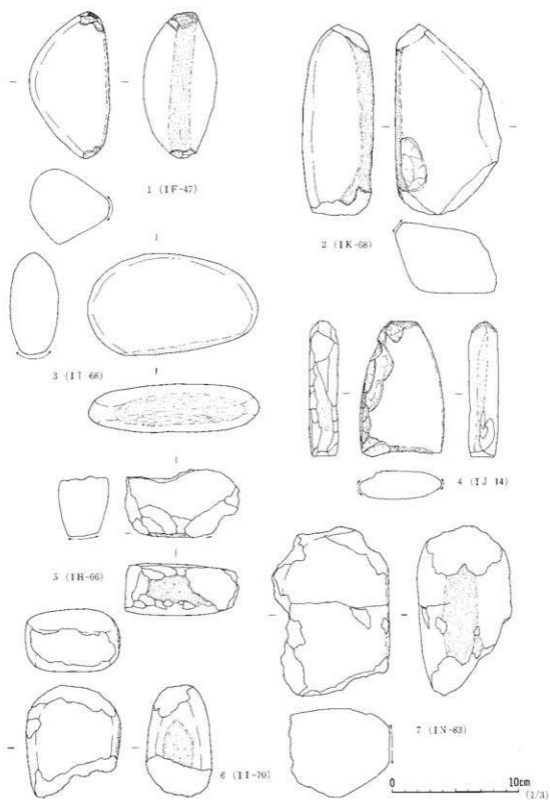
台石 遺構内5点・遺構外11点の総数16点ある。(第25図3、第35図6・7、第84図7、第85図4、第127図2～9、第128図1～3)地面において作業台として使用された可能性が高いものを一括した。

(127図-2～5)は角型の礫を利用したもので、平坦なスリ痕を有する。これらの内2はスリ面に敲打痕の複合痕跡を有し、5はスリ面にやや強い4条の擦痕を有する。(128図-2・3)は、前者に比べて大型のものである。3については周辺を剝離して円形に加工しており、ほぼ中央部の緩やかな稜の左右ともに一樣なすり痕跡が認められる。(25-3)は、板状節理によって得られたものをそのまま台石として使用したものであろう。(35-7)は円柱礫の弧状にカーブする表面にスリ痕跡が見られる折損品で、石棒の制作過程にあるものとも考えられる。(第127-6・7・9)は、石皿の折損品の可能性も考えられるが、いずれも破損品であるため本類に含めた。石質は、(127-4)が閃緑岩、(127-8)が砂岩、これ以外は安山岩である。

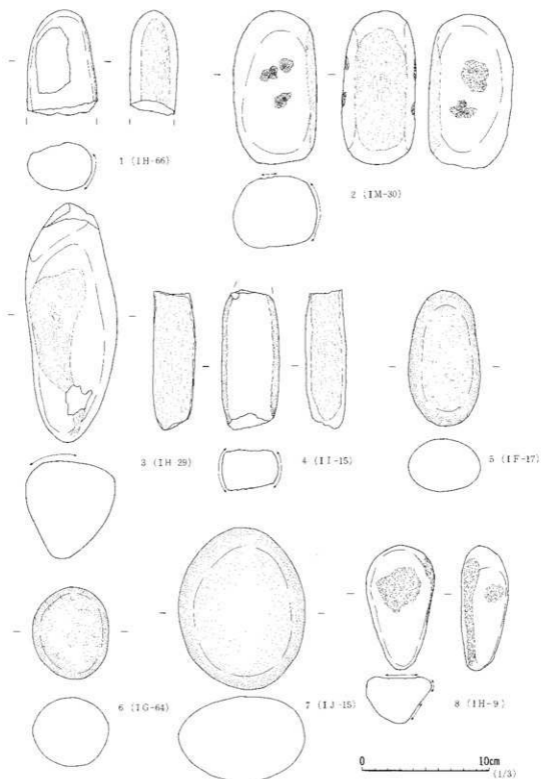
石皿 遺構内6点・遺構外1点の総数7点ある。(第13図5・6、第25図4、第84図4、第85図5、第106図11、第128図4)明確に中央部が凹み、皿状のものだけを本類とした。(13-6)は縁辺部だけの折損品であるが、薄手の石皿の一部と思われる。(128-4)は使用面の縁辺部から中央部にかけて緩い傾斜が認められ、長軸においてはいっそう顕著である。また、(106-11)は使用面の中央部付近だけが直径7cmほどに凹むものである。石質は、(13-6)が凝灰岩で、これ以外は、すべて安山岩である。

石冠 遺構内から3点出土した。(第35図1・8、第36図3)

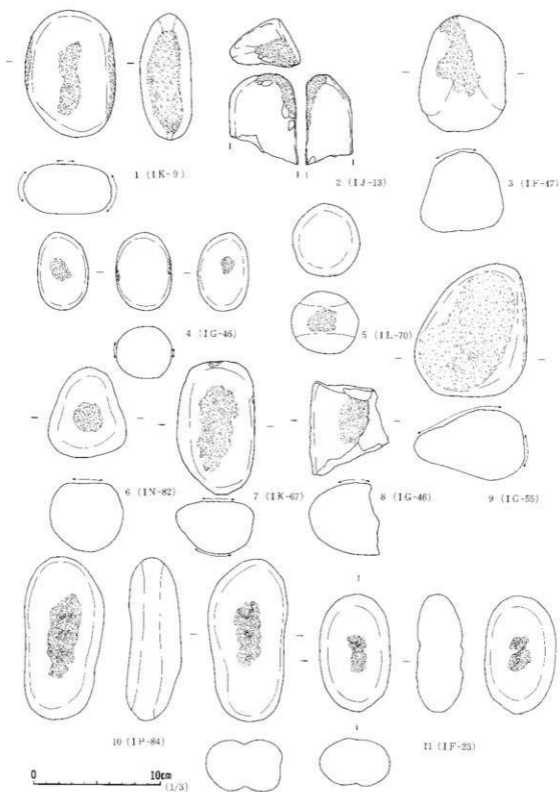
3点とも第7号住居跡の堆積土内より出土した。破損品であり、廃棄されたものと判断される。(35-1)は幅広のスリ痕跡を有する。(35-8)は折損部位にタタキの痕跡があることからタタキ石として再利用されているものと考えられる。これらは、楕円形礫の器体に環状に敲打を施した、いわゆる北海道式石冠と呼ばれるものである。一側縁にスリ面をもつものが一般的で、スリ石及びタタキ石として機能したものと理解される。器体に全周する敲打痕は、手で把握し



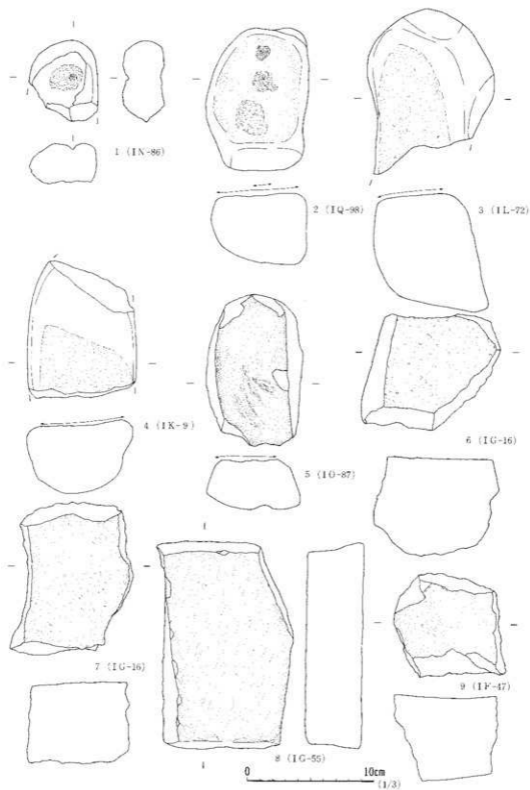
第127図 遺構外出土石器(5)



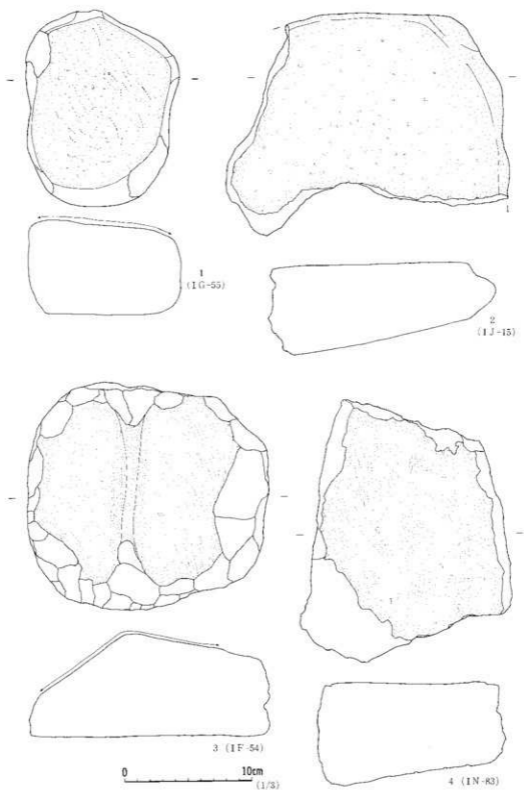
第128図 遺構外出土石器(6)



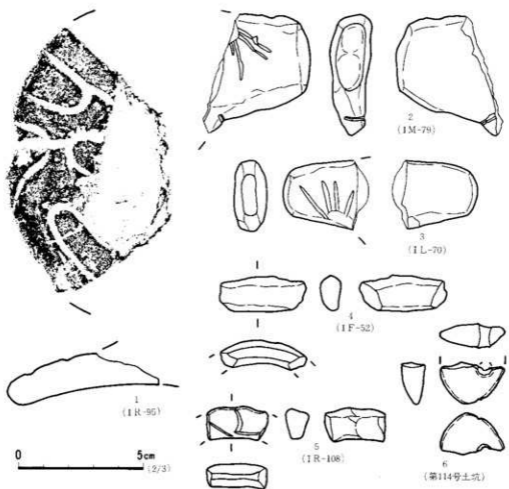
第129图 遺構外出土石器(7)



第130图 遺構外出土石器(8)



第131圖 遺構外出土石器(9)



第132图 遺構外出土土製品

やすくするためか、柄等に装着しやすいようにするための加工痕と思われる。石質は、安山岩である。

石製品 (第106図12) 第6号土坑より1点出土した。

本遺物については、形状的に類似するものの名称として、前述の「石冠」呼ばれるものがある。平面形は、長辺の一边が下がるほぼ長方形で、側面観は砲弾形である。長辺の一侧縁は、幅を持ち平坦であり、対する側縁は、両面から研磨され切っ先のように尖る。両面には、鋭利な工具により、幾何学的な文様が両面对称に、掘り刻まれている。短辺の両側面には、二等辺三角形が縁取るように掘り刻まれる。平坦面には、U字状の刻みが施されている。文様を掘り刻んでから、全面が丁寧に研磨されている。微細な擦痕が全面にみられる。また、研磨等によるものか不明だが、文様等の稜が完全に磨耗している。両面と平坦面にある傷(凹み)は、タタキによるものである。石質は、滑石ないし自然石膏の可能性があるとの見解をいただいた。滑石および自然石膏は、青森県内での産出はなく、石材については搬入品である。

(増尾)

3) 土製品 (第129図)

本調査からは、総数6点の土製品が出土した。器種は、蓋・土偶・環状土製品・有孔土製品がある。

蓋 (129-1) 形状と断面形から蓋の破損品と思われる。推定口径は13.5cmで、ツマミ部分を含め全体の8分5程が失われている。表面には、沈線による樽形文が施されており、文様から十腰内I式に比定されるものと思われる。この時期の蓋については、壺形土器として作られ、体部から切断されるものが多いが、本遺物の口縁部(周縁)は、滑らかで再調整の痕跡も認められないことと、断面形から蓋そのものとして作られたと考えられる。

土偶 (129-2・3) 共に、板状土偶の腕の部分だけである。2は、縦4.8cm、横4cm、厚さ1.7cmで、表に4条の浅い沈線と、臨下に1条の沈線が施されている。3は、縦2.7cm、横3.5cm、厚さ1.3cmで、表に4条の浅い短沈線が施されている。

環状土製品 (129-4・5) 共に粘土紐状のもので、両端を破損する。4は、内外側ともにナデにより、平滑に作られてある。5は、表側に浅い短沈線が施されているほか、裏側には指頭圧痕が残る。

有孔土製品 (129-6) 第114号土坑の堆積土内より出土した。穿孔された部分から半分に割れているが、およそ円形ないし樽形であったと思われる。厚さは1cmあり、両面から穿孔されている。

(小田川)

第Ⅲ章 まとめ

1) 今回の発掘調査で検出された遺構は、竪穴住居跡20軒、土坑137基である。

土坑には、フラスコ状土坑、墓坑、小土坑列、溝状土坑等がある。

2) 竪穴住居跡の時期は、床面及び堆積土内出土遺物から、次のように判断される。

縄文時代中期中葉円筒上層式期4軒

(第6号住居跡・第7号住居跡・第8号住居跡・第20号住居跡)

縄文時代中期末葉大木10式併行期5軒

(第1号住居跡・第2号住居跡・第3号住居跡・第4号住居跡・第12号住居跡)

縄文時代後期初頭期に比定されるもの3軒

(第15号住居跡・第17号住居跡・第18号住居跡)

時期不明のもの8軒門

(第5号住居跡・第9号住居跡・第10号住居跡・第11号住居跡・第13号住居跡・第14号住居跡・第16号住居跡・第19号住居跡)

時期不明なもののうち、第9号住居跡・第11号住居跡・第16号住居跡は、炉の構造と位置が第15号住居跡の炉と類似することから、第15号住居跡とほぼ同じ時期にあった可能性がある。

円筒上層式期の第7号住居跡と第8号住居跡の平面形は、方形状で、住居の一辺に階段状の張り出しを持っている。同様な施設をもつ住居跡は、八戸市「沢堀込遺跡」(青森県教育委員会1991)、函館市「中野A遺跡」(跡北海道埋蔵文化財調査センター1991)でも検出されており、出入口施設の可能性が指摘されている。

大木10式併行期の住居跡は、地山を掘り残し周堤を巡らす炉で、これに付随する前庭部を持つ。床面の中央部分は僅かだが一段低く、意図的に掘り窪まれているものと考えられる。

後期初頭に比定される住居跡の炉は、粘土を盛り周堤を構築している。炉の位置は偏在する(第15号住居跡)ものと思われるが、前庭部は持たない。

3) 検出した土坑の中で注目されるものに、小土坑列がある。管見の限りで類別がなく、機能性格については、棚跡・墓坑・建物跡等と考えられるが、いずれも推測の域をでない。

フラスコ状土坑では、住居跡周辺に作られているものとグリッド60~70の範囲に密集して群を形成しているものに分けられる。フラスコ状土坑の堆積土をみると、土坑中位に自然堆積土を介させ、下位と上位の堆積土が埋め土であるものと、下位から中位までが埋め土で上位が自然堆積のものがある。堆積土のうち、壁際から鋸歯状に入り込み、ロームを主体にして堆積しているものは、断面形がピーカー状のものに多く、埋め戻される際に開口部が意図的に崩されているものとする。さらに、底面出土遺物がないことと、開口していれば堆積したと思わ

れる土の堆積も認められないことから、埋め戻し時には土坑内が整理され短時間のうちに埋められたものと思われる。また、群を形成しているものは大型のものが多く、密集はしているがプラスチック土坑自体の重複が見られないことから、埋め戻して、更に新しい土坑を構築する際には位置が考慮されていたものと思われる。群を形成するものは単独の集合体ではなく、あらかじめ複数基を予定して作られていた可能性もある。

4) 遺物は、土器と石器類あわせて段ボールで46箱分が出土した。時期は、縄文時代前期円筒下層式から平安時代のものまでが出土している。

このうち、主体となるものは、縄文時代中期円筒上層C式から後期初頭までのものである。

遺物の出土状態は、住居が作られている調査区南側からの出土が多い。遺物の出土状況のうち、第7号住居跡地積土内からは多量の円筒上層C式土器が出土している。いわゆる「吹上パターン」(小林達夫1965)と呼ばれるものと理解している。削平により判然としないが、同様な出土状況のものに、第9号住居跡と第15号住居跡がある。

土器のうち、第II群H類とした大木10式併行期の土器と、それに後続するであろう第III群A類土器については、近年資料が増加しており、本調査でも良好な資料が出土している。本報告では十分な検討ができず、文様構成や文様の変遷、本土器群の分布等で多くの課題を残すことになった。

石器類は、組成において他の遺跡と比べ特にかわるものはない。特異なものに、幾何学文様が印刻される石冠がある。元来、稀少な石器であり用途についてはやはり推測の域をでない。本県で産出しない石材で作られていることから、交易品と考えられ、その産出地や搬入経路が問題となる。

5) 今回の調査は、南北に延びる標高100m程の丘陵地頂部が対象であった。調査の結果から、縄文時代前期から平安時代まで、この丘陵地が生活の場であったことが判明した。特に、縄文時代中期円筒上層式期、大木10式併行期、後期初頭期には丘陵の南側を中心に、住居の他多くの遺構が作られ活発な活動が窺われる。調査区が狭長地のため、全容を把握することはできなかったが、遺構の位置から各時期に丘陵の南側が居住域として使用されていることが判明した。住居域の北側には土坑群、さらに丘陵の北部は狩猟域として使われていたことが窺われる。

丘陵の南側から中央部にかけての調査区外の丘陵斜面地には、上記の各時期のまとまった集落が展開しているものと判断される。また、今回検出されなかったが、縄文時代前期や後期前葉期の集落(遺構)が丘陵内に存在している可能性がある。(小田川)

引用・参考文献

- | | | | |
|-----------------|---------------------------|------------|-------|
| 青森県教育委員会 | 『弥栄平遺跡(2)』 | 青埋文報第81集 | 1983年 |
| 青森県教育委員会 | 『菫窪遺跡』 | 青埋文報第84集 | 1984年 |
| 青森県教育委員会 | 『牛ヶ沢(3)遺跡』 | 青埋文報第86集 | 1984年 |
| 青森県教育委員会 | 『弥栄平(1)遺跡』 | 青埋文報第98集 | 1986年 |
| 青森県教育委員会 | 『館野遺跡』 | 青埋文報第119集 | 1988年 |
| 青森県教育委員会 | 『富ノ沢(1)・(2)遺跡』 | 青埋文報第133集 | 1990年 |
| 青森県教育委員会 | 『富ノ沢(2)遺跡Ⅳ』 | 青埋文報第137集 | 1991年 |
| 青森県教育委員会 | 『富ノ沢(2)遺跡Ⅴ』 | 青埋文報第143集 | 1992年 |
| 八戸市教育委員会 | 『田面木平遺跡(1)』 | 八戸市埋文報第20集 | 1992年 |
| 八戸市教育委員会 | 『八戸市内発掘調査報告書7』 | 八戸市埋文報第20集 | 1987年 |
| (財)岩手県埋蔵文化財センター | 『上里遺跡発掘調査報告書』 | 岩埋文報第55集 | 1983年 |
| 鈴木克彦 | 「東北地方北部における大木系土器文化の編年的考察」 | | |
| | 『北奥古代文化』 | 第8号 | 1976年 |
| 成田滋彦 | 「東北地方北部の大木10式土器の周辺」 | | |
| | 『奥南』 | 第3号 | 1984年 |
| 本間宏 | 「縄文時代後期初頭土器群の研究(1)」 | | |
| | 『よねしろ考古』 | 第3号 | 1987年 |
| 本間宏 | 「縄文時代後期初頭土器群の研究(2)」 | | |
| | 『よねしろ考古』 | 第4号 | 1988年 |
| | 『特集 縄文時代前・中期のムラ』 | | |
| | 『よねしろ考古』 | 第7号 | 1991年 |

付 章

学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書

1994年3月26日

青森県埋蔵文化財調査センター殿

1993年12月24日受領致しました試料についての年代測定の結果を下記の通りご報告致します。

なお年代値の算出には ^{14}C の半減期としてLIBBYの半減期5570年を使用しています。また、付記下誤差は β 線の計数値の標準偏差 σ にもとずいて算出した年数で、標準偏差(ONE SIGMA)に相当する年代です。また試料の β 線計数率と自然計数率の 2σ 以下のときは、 3σ に相当する年代を下限の年代値(B.P.)として表示してあります。また試料の β 線計数率と現在の標準炭素(MODERN STANDARD CARBON)についての計数率との差が 2σ 以下のときには、Modernと表示し、 $\delta^{14}\text{C}\%$ を付記してあります。

記

Code No	試料	年代(1950年よりの年数)
Gak - 17747	木炭 from 上蛇沢	3420 ± 90
	No1 第3号住居床	1470 B.C.
Gak - 17748	木炭 from 上蛇沢	4100 ± 80
	No1 第18号住居床	2150 B.C.

以 上

木 越 邦 彦

写 真 图 版



基本土層No.1 (W→)



基本土層No.2 (W→)



基本土層No.4 (S→)



A区遺物出土状況 (N→)



B区遺物出土状況 (NE→)



B区遺物出土状況 (SE→)



調査風景 (S→)



調査風景 (N→)



第1号住居跡土層 (S→)



第1号住居跡完掘 (N→)



第1号住居跡覆土内遺物 (S→)



第1号住居跡埋込土器 (W→)



第1号住居跡炉土器 (E→)



第1号住居跡伊崎刺付 (E→)



第2号住居跡遺物出土状態 (S→)



第2号住居跡完掘 (S←)



第3号住居跡土層 (NE→)



第3号住居跡完備 (E→)



第3号住居跡炉 (S W→)



第3号住居跡炉埋設土器 (S→)



第3号住居跡炉東攝 (E→)



第3号住居跡炉内遺物出土状態 (N→)



第4号住居跡土層 (N→)



第4号住居跡土層 (E→)



上 第4号住居跡 炉壇跡 (E→) 中 第4号住居跡 土層 (E→) 下 第4号住居跡 炉完壊 (E→)



第5号住居跡発掘 (W→)



第6号住居跡発掘 (E→)



第7号住居跡
土層 (SE→)



第7号住居跡
梁塚 (N→)



第7号住居跡覆土内遺物出土状況 (NW→)



第7号住居跡炉核出 (SE→)



第7号住居跡伊土層 (E→)



第7号住居跡伊 (E→)



第7号住居跡伊断制り (E→)



第7号住居跡特殊施設 (S→)



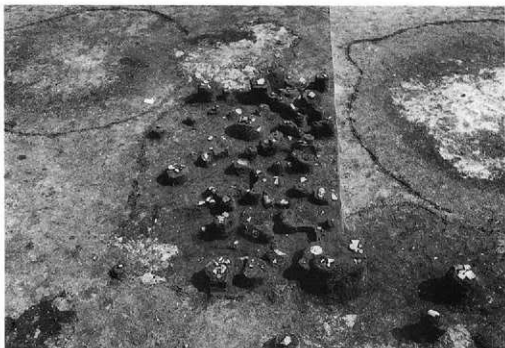
第7号住居跡完掘 (SE→)



第8号住居跡土層 (N→)



第8号住居跡土層 (N→)



第9号住居跡映出 (W→)



第9号住居跡石圍い壁 (N→)



第10号住居跡・第56・57号土坑完掘 (W→)



第11号住居跡完掘 (E→)



第12号住居跡土層 (E→)



第12号住居跡土層 (E→)



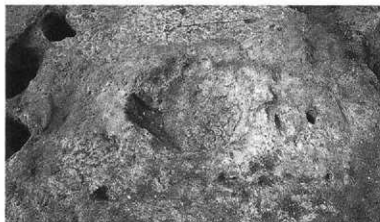
第14号住居跡土層 (E→)



第14号住居跡完掘 (E→)



第15号住居跡
土層(S E →)



第15号住居跡
伊弉攝(E →)



第15号住居跡
伊弉割リ(E →)



第16号住居跡平土層
(S→)



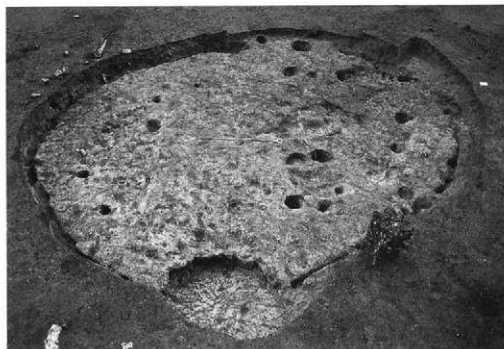
第17号住居跡
穴壁 (N→)



第17号住居跡
土器片圍炉(N→)



第18号住居跡土層 (S E →)



第18号住居跡光燭 (W →)



第18号住居跡
遺物出土状況
(S W→)



第18号住居跡
石圍い跡(S W→)



第18号住居跡
石完掘(S W→)



第19号住居跡出土品 (W→)



第20号住居跡出土品 (W→)



第1号フラスコ状土坑完掘 (S→)



第24号フラスコ状土坑土層 (W→)



第26号フラスコ状土坑土層 (E→)



第26号フラスコ状土坑完掘 (S→)



第52号フラスコ状土坑土層 (S→)



第52号フラスコ状土坑完掘 (S→)



第52号フラスコ状土坑遺物出土状況 (W→)



第52号フラスコ状土坑遺物出土状況 (W→)



第53号フラスコ状土坑土層 (W→)



第53号フラスコ状土坑完掘 (E→)



第77号フラスコ状土坑土層 (E→)



第77号フラスコ状土坑完掘 (N→)



第78号フラスコ状土坑土層 (W→)



第78号フラスコ状土坑完掘 (E→)



第76号フラスコ状土坑土層 (S→)



第75号フラスコ状土坑土層 (E→)



第83号フラスコ状土坑土層 (W→)



第90号フラスコ状土坑土層 (W→)



第90・112・127・128号土坑完掘 (S→)



第110号フラスコ状土坑土層 (N→)



第110号フラスコ状土坑完掘 (E→)



第111号フラスコ状土坑土層 (S→)



第106号フラスコ状土坑完掘 (S E→)



第115号フラスコ状土坑土層 (S→)



第115号フラスコ状土坑完掘 (E→)



第119号フラスコ状土坑土層 (E→)



第119号フラスコ状土坑完掘 (E→)



第133号フラスコ状土坑土層 (S→)



第133号フラスコ状土坑完掘 (E→)



第104号フラスコ状土坑土層 (S E→)



第121号フラスコ状土坑土層 (N→)



第2号土坑遺物出土状況 (S E→)



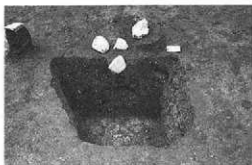
第62号土坑遺物出土状況 (S→)



第25号土坑遺物出土状況 (N→)



第25号土坑遺物出土状況 (N→)



第64号土坑土層 (E→)



第64・68号土坑完掘 (E→)



第103号土坑周溝確認 (E→)



第103号土坑完掘 (E→)



小土坑A列 (N→)



小土坑B・C列 (S→)



A列第10号土坑横出 (N→)



A列第10号土坑土層 (E→)



A列第11号土坑横出 (E→)



A列第11号土坑土層 (E→)



小土坑B列 (N→)



小土坑C列(N→)



A列第19号土坑土层 (E→)



B列第29号土坑土层 (W→)



B列第30号土坑土层 (W→)



B列第35号土坑土层 (W→)



C列第45号土坑土层 (W→)



C列第47号土坑土层 (E→)



第46号溝状土坑完掘 (W→)



第97号溝状土坑完掘 (N→)



第98号溝状土坑完掘 (S→)



第100号溝状土坑完掘 (N→)



第129号溝状土坑完掘 (S→)



第142号土坑完掘 (W→)



第3・4・28号土坑完掘 (W→)



第7号土坑完掘 (S→)



第6号土坑完掘 (E→)



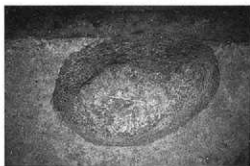
第6号土坑遺物出土状況 (S W→)



第22号土坑完掘 (N→)



第51号土坑完掘 (W→)



第80号土坑完掘 (W→)



第81号土坑完掘 (E→)



第91号土坑完掘 (S→)



第94号土坑土層 (E→)



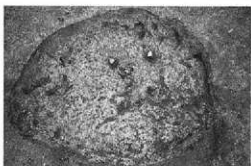
第101号土坑完掘 (S→)



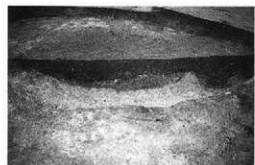
第109号土坑完掘 (E→)



第113号土坑土層 (S→)



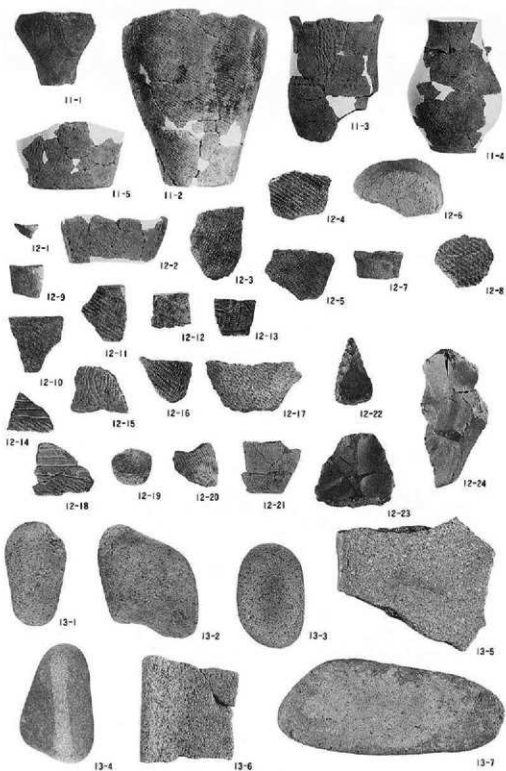
第113号土坑完掘 (N→)



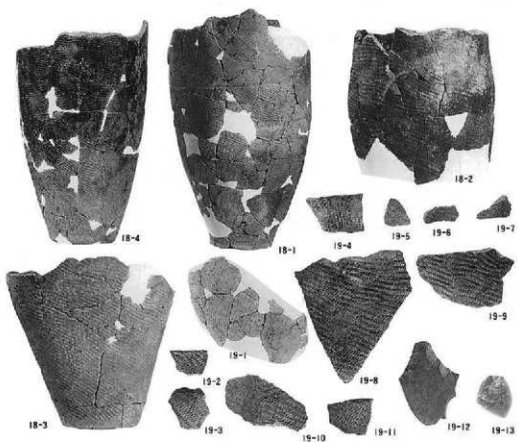
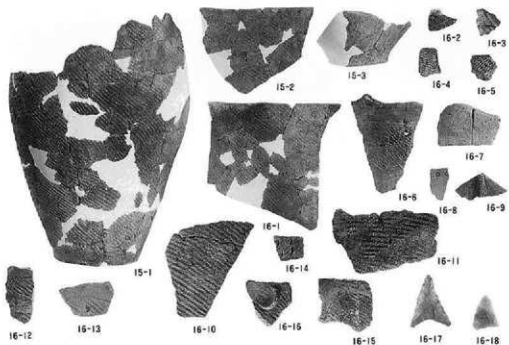
第120・123号土坑土層 (S E→)



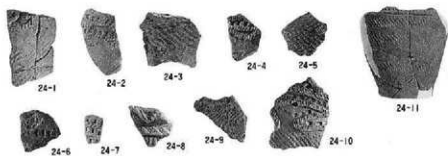
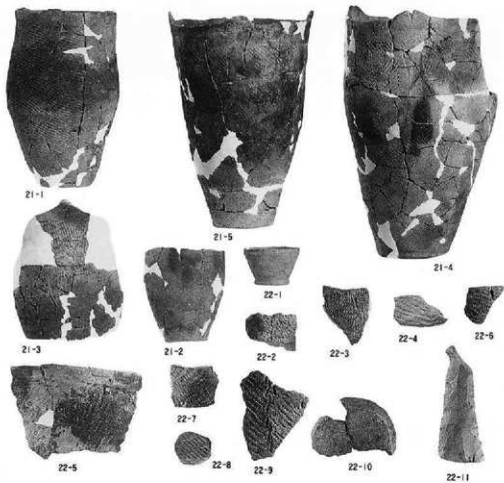
第137号土坑完掘 (E→)



写真図版32 第1号住居跡出土遺物



写真图版99 第2号·3号住居跡出土遺物



写真図版30 第4号・5号・6号住居跡出土遺物



25-1



25-2



25-3



27-2



27-1



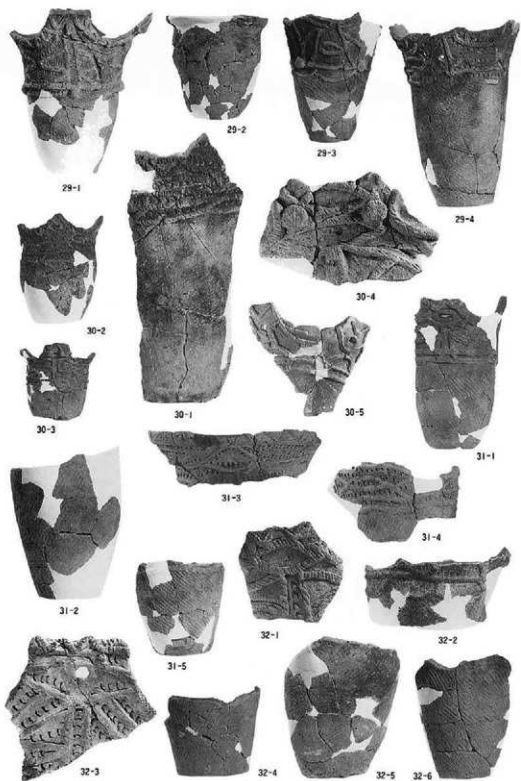
28-2



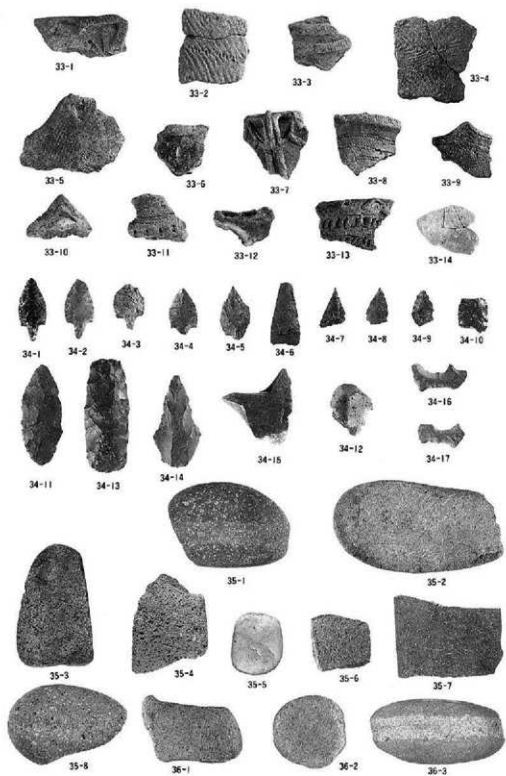
28-1



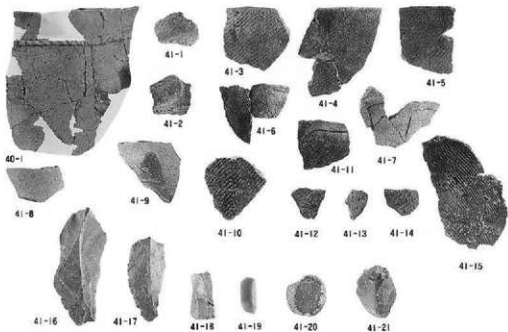
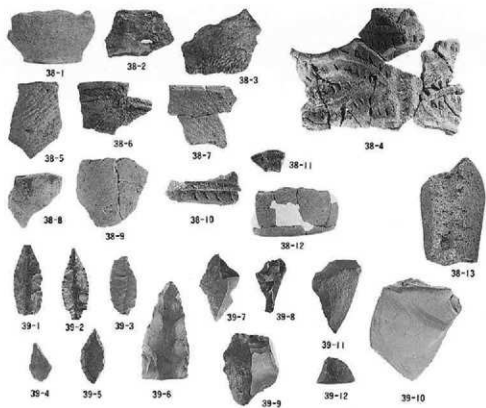
28-3



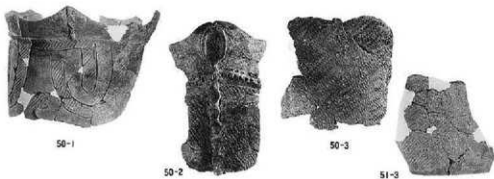
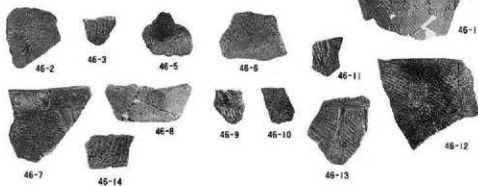
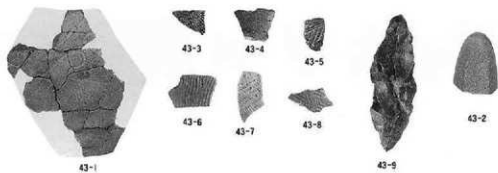
写真图版30 第7号住居跡出土遺物



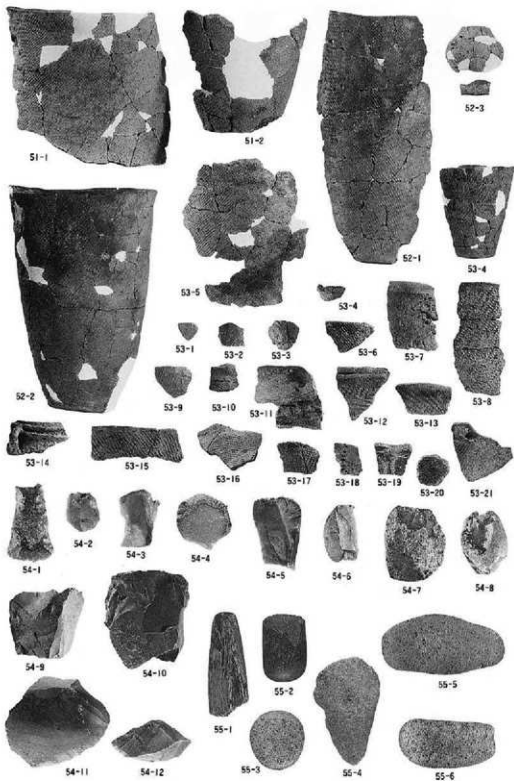
写真図版① 第7号住居跡出土遺物



写真図版30 第8号・9号住居跡出土遺物



写真図版39 第10号・11号・12号・15号住居跡出土遺物



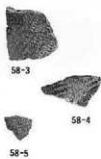
写真図版30 第15号住居跡出土遺物



50-1



58-2



58-3

58-4

58-5

第17号住居跡



60-1



61-2



61-1



61-5



61-3



61-6



61-4



61-7



61-8



62-1



62-2

第18号住居跡



第19号住居跡

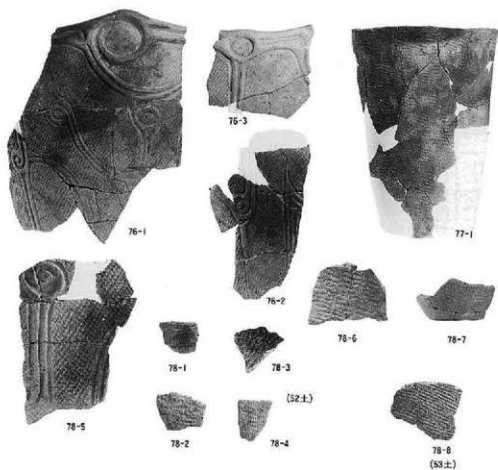
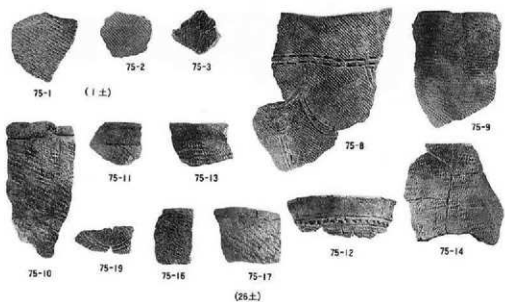
63-1



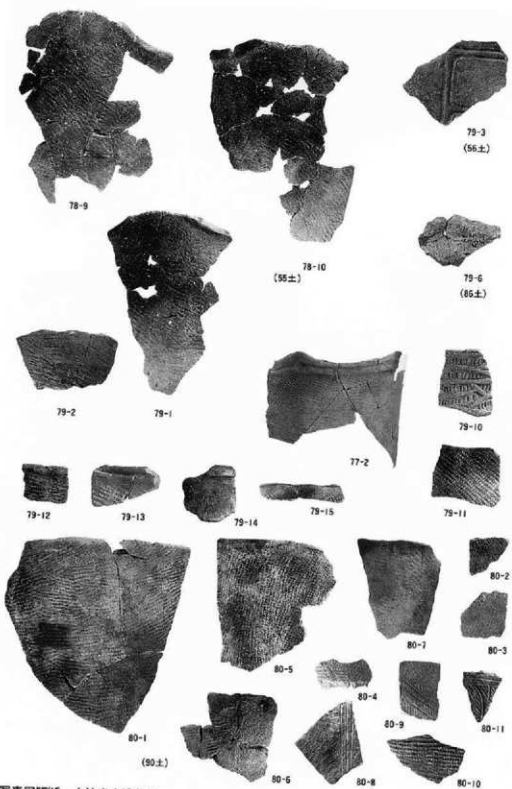
第20号住居跡

64-1

写真図版(4) 第17号・18号・19号・20号住居跡出土遺物



写真図版(42) 土坑出土遺物 1



写真図版43 土坑出土遺物 2

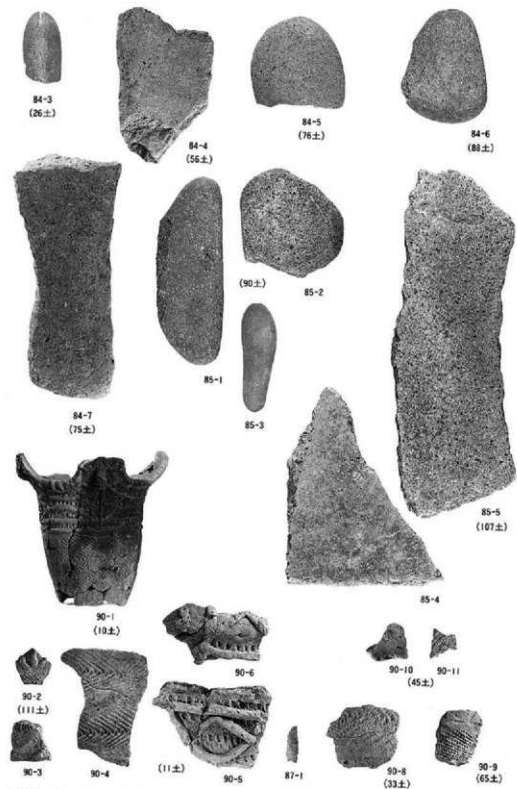


83-7
(111±)

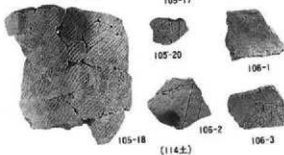
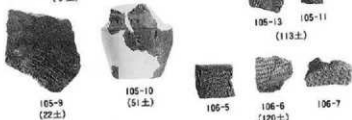
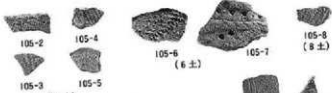


83-2

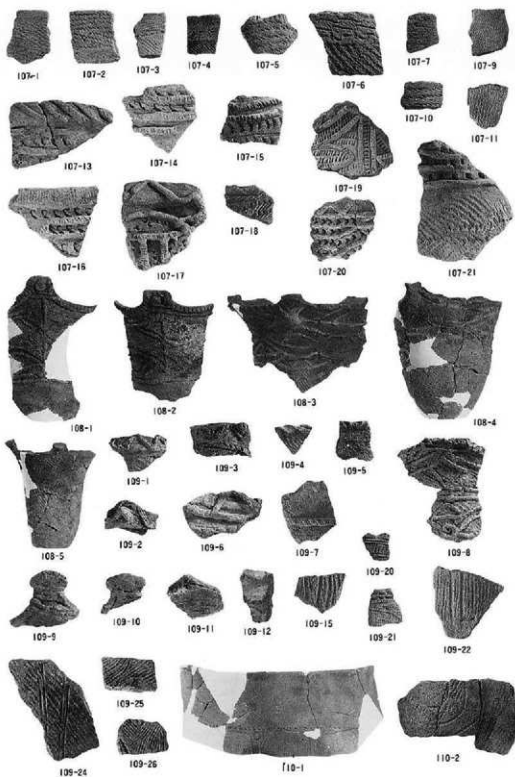




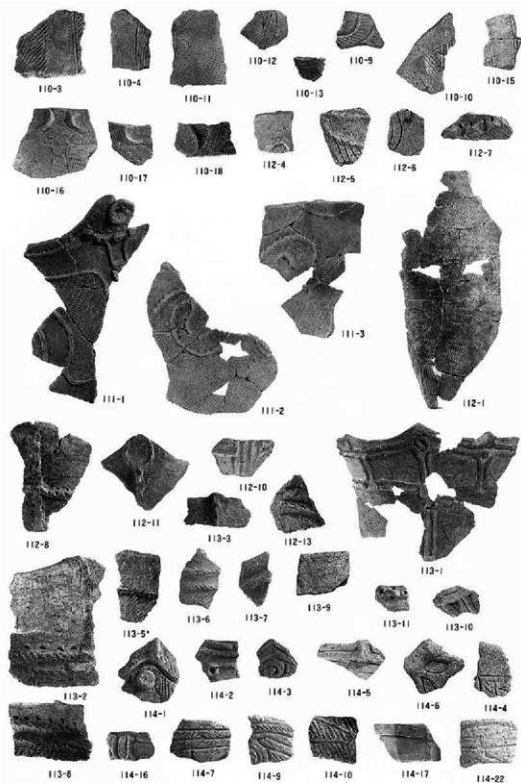
写真図版49 土坑出土遺物 4



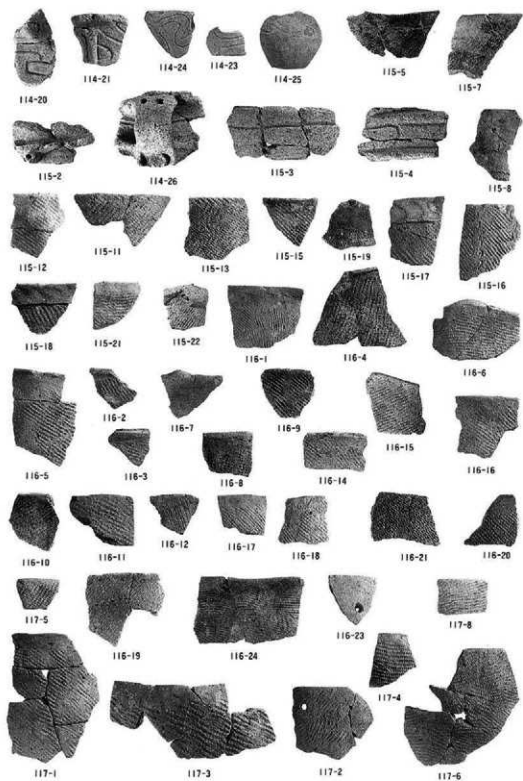
写真図版46 土坑出土遺物 5



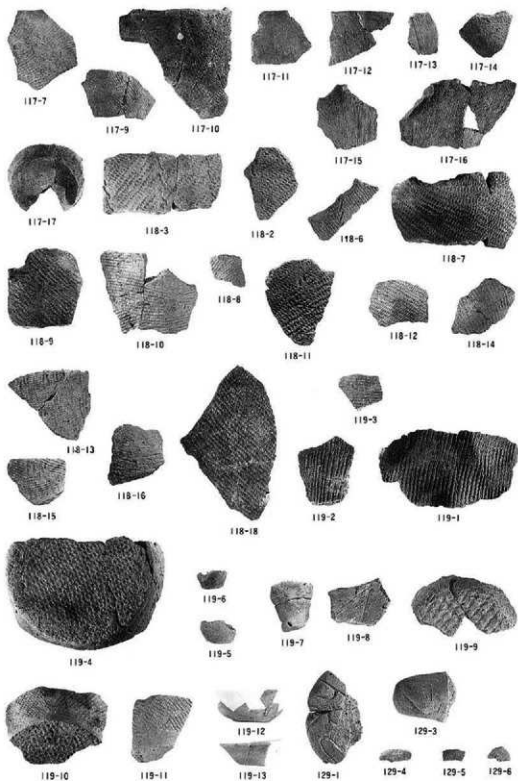
写真図版(37) 遺構外出土土器 1



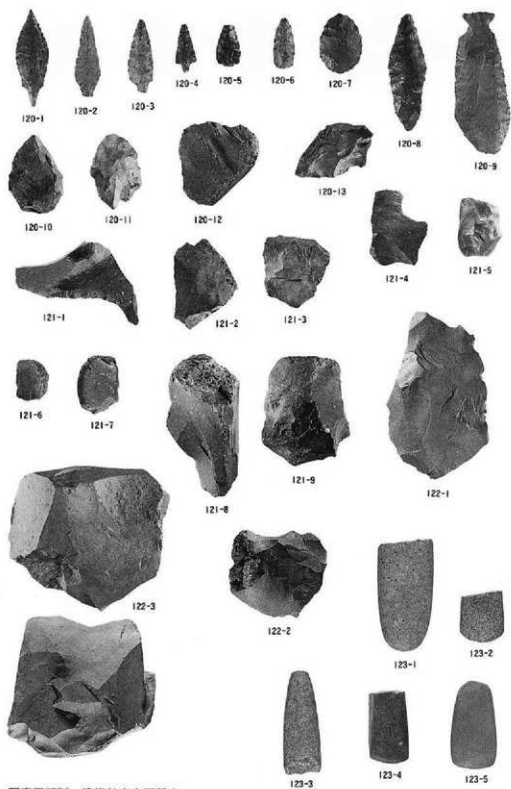
写真図版(40) 遺構外出土土器 2



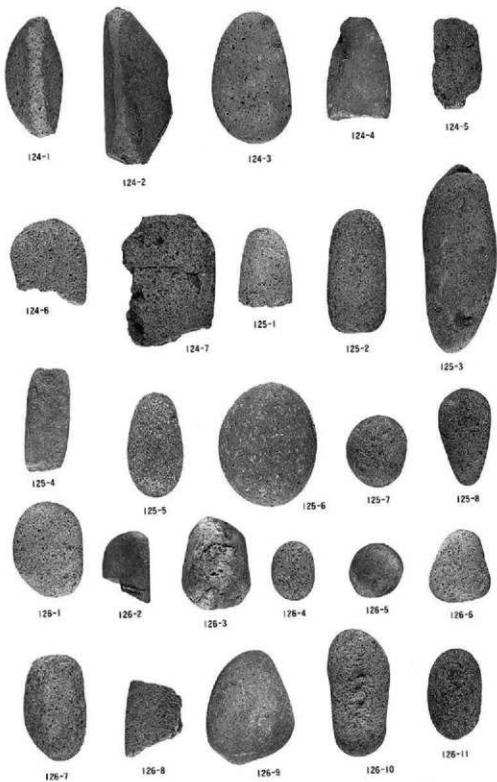
写真図版(49) 遺構外出土土器 3



写真図版50 遺構外出土土器4・土製品



写真図版61) 遺構外出土石器 1



写真図版② 遺構外出土石器 2



127-1



127-2



127-3



127-4



127-5



127-6



127-7



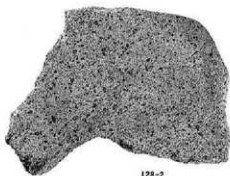
127-8



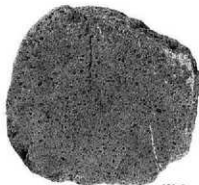
127-9



128-1



128-2



128-3



128-4



写真图版54 第6号土坑出土石冠 106-12

報告書抄録

ふりがな	かみへびさわ に いせき							
書名	上 蛇 沢 (2) 遺 跡							
副書名	東北電力株式会社新五戸変電所新設工事に係る埋蔵文化財発掘調査							
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第177集							
編集著名	小田川 哲彦、増尾 知彦							
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒038 青森市大字新城字天田内152-15 TEL 0177-88-5701							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
かみへびさわ に いせき 上蛇沢(2)遺跡	あおもりけん 青森県 さんごのへん 三戸郡 ごみへまち 五戸町大字 まきりやないふらぎ 切谷内字 かみへびさわ 上蛇沢48-6 ほか 外	市町村	遺跡番号	* ' "	* ' "	19930719 ～ 19931118	9,245㎡	東北電力株式会社新五戸変電所新設工事に伴う事前調査
		02-442	59-041	40度 30分 50秒	141度 21分 50秒			
所取遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
上蛇沢(2)遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居20軒 土坑 136基	縄文土器 (円筒上層式 ～ 大木10式 後期前半期) 他に石器類		縄文時代中期～後期初頭の集落跡。 大型フラスコ状土坑群の他小土坑列が目目される。 遺物では、幾何学的文様を施された石製の石冠がある。		
	散布地	平安時代	土坑 1基	土師器				

青森県埋蔵文化財調査報告書第177集

上蛇沢(2)遺跡発掘調査報告書

— 東北電力株式会社新五戸変電所新設工事に係る —
発掘調査報告書

発行年月日 平成7年3月31日
発行 青森県教育委員会
〒030 青森市新町二丁目3-1
編集 青森県埋蔵文化財調査センター
〒038 青森市新城字天田内152-15
TEL 0177-88-5701、FAX 0177-88-5702
印刷所 株式会社 三栄企画印刷
〒030-01 青森市妙見三丁目2-19
TEL 0177-38-0040、FAX 0177-38-0880